

令和2年度

講座「丹波学」特別編

明智光秀

～光秀は何を見たか～



(公財)兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑

目 次

1 講座「丹波学」の開講にあたって	・・・	1
2 講義記録	・・・	2
講座概要		
第1回 8月29日(土)	・・・	3
明智光秀の出自をめぐって		
株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役	渡邊 大門 氏	
第2回 9月19日(土)	・・・	22
赤井氏、荻野直正と明智光秀・織田信長・足利義昭との関係		
小山工業高等専門学校 非常勤講師	山田 康弘 氏	
第3回 10月10日(土)	・・・	35
近江時代の明智光秀		
城郭談話会 会員	福島 克彦 氏	
第4回 11月21日(土)	・・・	46
本能寺の変を考える		
東京大学史料編纂所 准教授	金子 拓 氏	
第5回 12月26日(土)	・・・	57
山崎合戦と惟任(明智)光秀		
～本能寺の変後の主導権をめぐる動向～		
東洋大学 非常勤講師	柴 裕之 氏	
3 講師紹介	・・・	70

1 講座「丹波学」の開講にあたって

1 丹波の森宣言

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する緑豊かな森のくにです。丹波篠山市と丹波市からなり、阪神都市圏から50～70kmの近郊にありながら、森林面積が約75%を占めています。昔ながらの田園風景や静かな環境が今も残され、加古川、武庫川、由良川の源流をなす母なる森の恵みは、良質な食糧の生産や自然環境の保全など重要な役割を担ってきました。また、京都、大阪、播磨、山陰などからの街道が交差する文化の十字路として、様々な文化が入り交じり、独特的な文化を育んできました。

この丹波の自然と文化を守り生かした地域づくりを目指し、昭和63年8月、住民代表による100人委員会を組織して「丹波の森宣言」を起草し、同年9月の丹波の森1000人大会において、「丹波の森宣言」を採択しました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

- 1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
- 2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
- 3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
- 4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

「丹波の森宣言」は、丹波地域の全世帯、企業に配布され、丹波地域の約6割にあたる21,616世帯が同意署名を行いました。

2 講座「丹波学」の開設

講座「丹波学」は、「丹波の森宣言」の中でも、「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という宣言を具現化するために、平成8年から開設されています。

今年で25回目を迎える本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に学ぶことを通して、丹波の資源や特性を生かした地域づくりに資することを目的とした地域学です。

3 令和2年度のテーマ

令和2年度は、テーマを「明智光秀～光秀は何を見たか～」としました。

丹波地域と関わりの深い明智光秀。丹波学でも、以前から丹波での足跡を取り上げてきました。しかし、「丹波攻め」や「丹波平定」は取り上げてきたものの、光秀に関する謎はまだまだたくさんあります。そこで、令和2年度は、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放映にあわせて、これまでの丹波学とは違い、光秀ただ一人にスポットを当て、「丹波学」特別編として、光秀の系譜から始まり最期までをたどる連続講座としました。光秀の生涯を知ることで、光秀がどのように丹波を見ていたのか、考えていたのかを知り、丹波の人々がその時代をどのように生きていたのかを学ぶ機会にしたいと考えテーマを設定しました。

2 講義記録

講座概要

- テーマ 明智光秀～光秀は何を見たか～
- 期間 令和2年8月29日（土）～12月26日（土）
- 場所 丹波の森公苑ホール
- 日程

回	開催日	各回テーマ	講師等
第1回	8月29日（土）	明智光秀の出自をめぐって	株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役 渡邊 大門 氏
第2回	9月19日（土）	赤井氏、荻野直正と明智光秀・織田信長・足利義昭との関係	小山工業高等専門学校 非常勤講師 山田 康弘 氏
第3回	10月10日（土）	近江時代の明智光秀	城郭談話会 会員 福島 克彦 氏
第4回	11月21日（土）	本能寺の変を考える	東京大学史料編纂所 准教授 金子 拓 氏
第5回	12月26日（土）	山崎合戦と惟任（明智）光秀～本能寺の変後の主導権をめぐる動向～	東洋大学 非常勤講師 柴 裕之 氏

第1回 明智光秀の出自をめぐって

株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役
渡邊 大門

はじめに



明智光秀の生涯、特に前半生については謎が多い。光秀に関する諸系図を見ると、名門の土岐明智氏を自称しているが、明確な根拠はない。父の名前も系図によって一致せず、

バラバラである。何よりも、若き光秀の痕跡を示す一次史料がないのである。光秀の人物像も二分されるところである。現在、光秀の肖像画として残っているのは、大阪府岸和田市の本徳寺に所蔵されるものだけである。その顔立ちはどことなく気品があり、インテリの趣を漂わせている。体格も細く、ごつごつとしていない。後年、主君の織田信長の指示を受け、各地を転戦した強者とは思えないような線の細さである。

光秀にインテリのようなイメージがあるのは、彼が連歌に親しんでいたからだろう。本能寺の変の意思表明とされる「愛宕百韻」の光秀の発句は有名であり、これまでもさまざまな解釈がなされてきた。信長には青年期の破天荒だった印象が強いため、いつも光秀の物静かな佇まいが強調されているのかもしれない。一方で違った評価もある。ポルトガルからやって来たイエズス会の宣教師のルイス・フロイスは、その著『日本史』のなかで非常に悪賢く狡猾な光秀像を提示している。それは、光秀のインテリ、線が細い優男というイメージを覆すのに十分である。どうして、こうも対照的な光秀像が描けるのだろうか。

明智光秀の関係史料は、そんなに多いとは言えない。圧倒的に多いのは、信長に仕えて以降の史料である。一方で、光秀に関する二次史料の記述は少なからずある。特に、本能寺の変にまつわる逸話については、明確な裏付けとなる根拠史料がないことも多く、混乱をもたらしているようである。史料は大別すると、一次史料と二次史料があるが、根本に据えて用いるのが一次史料である。一次史料と二次史料の違いは、どのようなところにあるのだろうか。

一次史料は、同時代に発給された古文書あるいは

日記、金石文などを指す。史料としての価値は高い。二次史料は系図、家譜、軍記物語など、後世になつて編纂されたものである。素材は文書、口伝などであり、作成者の創作が入ることも珍しくない。作成された意図（先祖の顕彰など）が反映されていることなどから、史料的な価値は劣る。ただし、年代記として、かなり正確に記述されたものもある。

歴史研究では一次史料に拠ることを基本原則とし、二次史料は副次的な扱いとする。とはいって、一次史料の記述についても間違えている可能性があるので、ほかの関連する史料と突き合わせ、内容の検討をするなどの慎重さが必要である。特に、偽文書には注意しなくてはならない。また、文書の原本が失われ、写しきれない場合も、内容に不審な点がないかを多方面からチェックする必要がある。

二次史料については、別にまったく価値がないわけではない。作成された政治的・社会的・文化的な背景を考慮し、史料批判を行って用いることもある。その場合、成立年が早いとか（当該事件が終わってから早い時期に成立）、伝統ある名家に伝わるものだからという理由で、信憑性が高まるわけではない。あくまで内容の吟味が重要である。いずれにしても、安易に用いるべき史料ではないのはたしかである。以下、光秀の出自について検討するが、併せて可能な限り史料の性格をわかりやすく解説することにしたい。

土岐氏と明智氏

一般的に光秀は、美濃の名門一族である土岐氏の流れを汲む、土岐明智氏の出身といわれている。土岐氏は清和源氏・源光衡の末裔であり、鎌倉時代に美濃國土岐郡に本拠を構えた。以降、土岐氏は美濃に勢力を拡大し、室町幕府が成立すると美濃国に守護職を与えられ、三管四職家（管領または侍所の所司になれる家柄）に準じる扱いを受けた。実際に土岐氏は、侍所の所司を務めたこともある。十四世紀中後半の土岐頼康の代には、尾張・美濃の守護も兼ねた。ところが、天文十一年（一五四二）に当主の頼芸は、配下の斎藤道三によって美濃から追放された。これにより事実上は滅亡したものの、土岐氏は名族にふさわしい家柄である。

土岐明智氏は美濃国の名門で守護を務めた土岐氏の支族で、室町幕府の奉公衆の一員でもあった。奉公衆は室町幕府における御目見以上の直勤御家人で、五番（五つの部隊）に編成されていた。日常は番の隊長である番頭のもとで、御所内の諸役や將軍御出の供奉などを務め、戦時には將軍の親衛隊とし

て出陣する直属の軍事力でもあった。後年、信長に仕え重用された光秀にとっては、相応な出自といえるのかもしれない。

奉公衆の名簿である『文安年中御番帳』には外様衆として「土岐明智中務少輔」の名を、『東山殿時代大名外様附』にも同じく外様衆として「同（土岐）中務少輔」の名を、三番衆として「土岐明智兵庫助」の名をそれぞれ確認することができる。『常德院御動座當時在陣衆着到』にも「土岐明智兵庫助」と記載されている。このような史料的根拠から、土岐明智氏が奉公衆の位置だったのは明らかである。

外様衆の役割は不明な点が多いものの、有力守護の支族が名を連ねている点を考慮すれば、相当な格式と地位であったと考えられる。何といっても、外様衆は將軍の直臣でもある。明智氏もまた土岐氏の支族であるがゆえに、外様衆に加えられたのであろう。赤松氏、佐々木氏といった守護家は、庶流が奉公衆に加えられていた。奉公衆は將軍の直臣という意味で、家格としては守護と同等だったのである。土岐明智氏の名は、おおむね十四世紀半ばから十五世紀の終わりにかけて、多くの一次史料で確認することができる。その本拠地は美濃国だった。

明智家の系譜

では、光秀の父はどのような人なのだろうか。その点は、数多くの明智氏の系図に触れられている。次に、代表的な系図を挙げることにしよう。

①光隆——『明智系図』（『続群書類従』所収）、『明智系図』（『鈴木叢書』所収）。

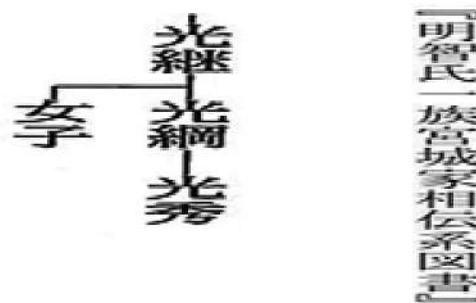
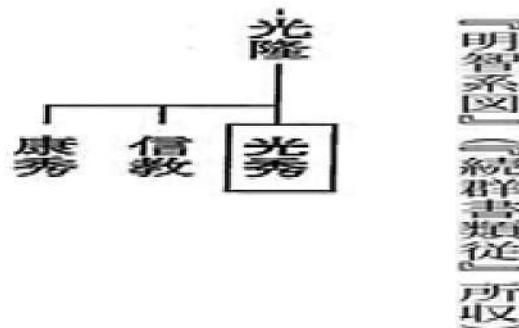
②光綱——『明智系図』（『系図纂要』所収）、『明智氏一族宮城家相伝系図書』（『大日本史料』所収）。

右の系図によると、光秀の父の名は、①光隆とするもの、②光綱とするもの、の二つに分かれており確定していない。そうなると、光秀の父の名前が一次史料に登場するかがカギとなる。しかし、彼ら二人のうち一人でも登場する一次史料は、管見の限り見当たらなかった。裏付けとなる一次史料がない以上、二人のうち誰が光秀の父であるかを考えても、正確な結論に至るとは思えないでの、あまり意味のある作業といえないかもしれない。

史上に突如としてあらわれた人物の場合、意外に父祖の名前が判然としないケースが多い。系図によってこれだけ光秀の父の名前が違うのだから、その背景を改めて検証する必要がある。先に掲出した『明智系図』のうち、『続群書類従』所収の『明智系図』については、上野沼田藩の土岐氏に伝わる「土岐文書」の写しが書き写されている。このように系図

や家譜類に古文書が記載されていることは珍しくなく、系図の信憑性を高めることになる。『明智系図』と「土岐文書」などを照合すると、光秀の祖父にあたる頼典とその弟の頼明まで存在を確認できるが、光秀の父の光隆は一次史料で確認できない。

この点は、不審と言わざるを得ず、『明智系図』がいかに「土岐文書」を写し取っているとはいえ、光秀の父を安易に光隆とすべきではないだろう。光隆以降の系譜は、不明と言わざるを得ないのである。このように父の名さえ分からぬ光秀に関しては、生年や出生地についても、実に謎が多いといえる。光秀は、いつどこで誕生したのだろうか。光秀の誕生年についても、諸説あって定まらない。『続群書類従』所収の『明智系図』には、享禄元年（一五二八）三月十日に美濃の多羅城（岐阜県大垣市）で誕生したとある。母は若狭守護の武田義統の妹とあり、名族にふさわしい母の家柄となっており、内容がかなり具体的である。



『明智氏一族宮城家相伝系図書』には、光秀が享禄元年八月十七日に誕生し、石津郡の多羅で誕生したと記す。ただ、父は進士信周、母は光秀の父・光綱の妹だったと記す。病弱だった光綱は、四十歳を過ぎても子に恵まれなかった。そこで、光綱の父・光継（光秀の祖父）は光秀を光綱の養子とすることを決意し、家督の後継者にしたという。

こちらは、光秀が養子だったとする。進士信周については不明であるが、奉公衆の出身であり、幕府

との関係を示唆する。また、光秀の譜代の家臣には進士貞連がおり、光秀の死後は肥後藩の細川興秋（忠興の次男）に仕えた。誕生した日付を除けば合致しており、ほかの系図もおおむね享禄元年誕生説を唱えている。後述する『明智軍記』も、享禄元年誕生説である（天正十年に五十五歳で没したと記す）。ただ、先の諸系図の記載には、いささか疑問が残る。

たとえば、光秀の母の兄とされる武田義統の誕生年は、大永六年（一五二六）である。義統の妹はさらに若いはずなので、明らかに年代的に矛盾している。光秀が享禄元年（一五二八）生まれであるならば、義統の妹は光秀の母であるはずがない。なぜこうなったのか理由は不明であるが、義統の子息・元明は天正十年（一五八二）の本能寺の変で光秀に与した。もしかしたら、そういう縁から光秀と武田氏を結び付けようとしたのかもしれない。

『明智軍記』『当代記』に記す光秀の誕生年

実は、享禄元年生誕説を唱える編纂物は、ほかにもある。それは、『明智軍記』である。すでに半世紀以上も前、古典的名著『明智光秀』の著者として知られる高柳光壽氏は、『明智軍記』を信頼できない悪書（「誤謬充満の悪書」と記す）と指摘している。たしかに『明智軍記』は誤りが多いので、歴史史料として用いるのには躊躇する史料である。

『明智軍記』は元禄六年（一六九三）から同十五年の間に成立したとされ、作者は不詳である。光秀が亡くなつてから、おおむね百年以上が経過している。光秀を中心に取り上げた軍記物語はほかになく、そういう意味では貴重な史料といえるのかもしれない。『明智軍記』が拠った史料には、『江源武鑑』のようなひどい代物がある。何よりユニークな話が多々書かれているが、それらは一次史料で裏付けられず、またほかの記述内容も誤りが多い。

『当代記』には、光秀の没年齢を六十七歳であると記している。つまり、永正十三年（一五一六）の誕生となる。『当代記』は著者が不明（松平忠明？）で、寛永年間（一六二四～四四）頃に成立したと考えられている。当時の政治情勢や大名の動向などを詳しく記しており、時代が新しくなるほど史料の性質は良くなつていて、残念ながら信長の時代については、史料的な価値が劣る儒学者の小瀬甫庵『信長記』に拠っている記事が多い。したがって、そのような性質は考慮しなくてはならないだろう。比較のうえでは、先の系図類よりも『当代記』の方が良質であるが、正しいという保証はない。

小瀬甫庵『信長記』（現代思潮社）は元和八年

（一六二二）に成立したといわれてきたが、今では慶長十六・十七年（一六一一年・一二）年説が有力である。『信長記』の成立が十年ほど古いことが立証され、これにより『信長記』の史料性を担保する論者もいるが、成立年の早い遅いは史料の内容を担保するものではない。

同書は広く読まれたが、創作なども含まれており、儒教の影響も強い。太田牛一の『信長公記』と区別するため、あえて『甫庵信長記』と称することもある。そもそも『信長記』は、太田牛一の『信長公記』を下敷きとして書いたものである。しかも、『信長公記』が客觀性と正確性を重んじているのに対し、甫庵は自身の仕官を目的として、かなりの創作を施したといわれている。それゆえ、『信長記』の内容は小説的ながらのおもしろさで、江戸時代には刊本として公刊され、『信長公記』よりも広く読まれた。現在、『信長記』は創作性が高く、史料としての価値は劣ると評価されている。

『綿考輯錄』に記す光秀の誕生年

『綿考輯錄』では、光秀が五十七歳で没したという。したがって、誕生年は大永四年（一五二四）になろう。『綿考輯錄』には若き頃の光秀の姿がたびたび描かれているが、信頼に足る史料なのだろうか。『綿考輯錄』は安永年間（一七七二～一七八一）に完成した、細川藤孝（幽斎）、忠興、忠利、光尚の四代の記録である。編者は、小野武次郎である。熊本藩・細川家の正史と言っても過言ではない。これまでの研究によると、忠利、光尚の代は時代が下るので信憑性が高いかもしれないが、藤孝（幽斎）あるいは忠興くらいの時代になると問題になる箇所が少なくないと指摘されている。それは、なぜだろうか。

その理由は、『綿考輯錄』を編纂するに際しておびただしい量の文献を参照しているが、巷間に流布する軍記物語なども材料として用いられているからである。たとえば、先に取り上げた『明智軍記』は、その代表だろう。『総見記』などの信頼度の低い史料も多々含まれている。『綿考輯錄』の参考書目を見ると、多くの史料類や編纂物が挙がっているが、玉石混交なのは明らかである。

『総見記』は『織田軍記』などともいい、遠山信春の著作である。貞享二年（一六八五）頃に成立したという。甫庵の『信長記』をもとに、増補・考証したものである。史料性の低い甫庵の『信長記』を下敷きにしているので、非常に誤りが多く、史料的な価値はかなり低い。今では顧みられない史料である。加えて、『綿考輯錄』は細川家の先祖の顕彰を目的と

していることから、編纂時にバイアスがかかっているのは明らかである。この点は、大名の家譜類では避けられない現象である。つまり、『綿考輯錄』は扱いが難しい書物であり、光秀の記述については慎重になるべきだろう。細川家の正史だから、正しいという保証はないのである。

結論を言えば、光秀の誕生年については、おおむね永正十三年（一五一六）から享禄元年（一五二八）の間とくらいしか言えない。しかも、「二次史料に拠る限り」という留保付きであり、今後、光秀の誕生年をうかがい知る一次史料の出現を待つしかないだろう。

明智氏の出身地

明智氏の出身地については、二つの説が有力視されている。一つは岐阜県恵那市明智町であり、もう一つは岐阜県可児市広見・瀬田である。互いに「明智」の名を冠していることから、非常にややこしいことになっている。

前者には明知城址（恵那市明智町）があり、城内には光秀学問所の跡に建てられた天神神社、あるいは光秀産湯の井戸の跡が残っている。近隣の龍護寺に伝来する光秀の直垂など、光秀にまつわる史跡や遺物があることから、現在も「光秀祭り」が催されている。ただし、光秀の先祖が岐阜県恵那市明智町の出身とするのには、難があると指摘されている。実際、恵那市明智町は、遠山明智氏の出身地といわれている。

遠山明智氏は藤原北家利仁流の流れを汲み、十三世紀の半ば頃、遠山景朝が明知城に本拠を築いたという。武将が城を築いたというのは、おおむね伝承に近いものが多く、後述する明智城も同じである。この景朝こそが、遠山明智氏の祖である。戦国期に至ると、遠山氏は織田信長に与して、武田信玄に敵対した。元亀三年（一五七二）、遠山景行の明知城などが信玄に攻撃されると、景行は戦いのなかで落命した。

景行の嫡男・景玄も同じく亡くなつたので、遠山明智氏の家督は利景（景玄の弟）が継いだ。ところが、利景は明知城に在城することなく、徳川家康に近侍した。結局、利景のもとに明知城が戻ってきたのは、慶長五年（一六〇〇）九月の関ヶ原合戦後だったという。明知城の歴史を見る限り、一貫して遠山明智氏が支配しているのが明らかで（一時期を除く）、光秀の先祖の姿を一次史料で確認することはできない。岐阜県恵那市明智町は遠山明智氏ゆかりの地であって、光秀の出身とされる土岐明智氏に結びつけ

るのは難しいといえる。

一方、岐阜県可児市広見・瀬田には、かつて石清水八幡宮の所領・明智荘という荘園があった。今も明智城址が残っており、同城は付近の地名から長山城とも称されている。一般的には、こちらが土岐明智氏の本拠とされている。もう少し具体的に概要を確認しておこう。

『美濃国諸国記』（作者不詳。十七世紀中後半成立）によると、康永元年（一三四二）三月に土岐頼康の弟・頼兼が明智城を築いたという。頼兼が明智の始祖で、彼自身は明智次郎あるいは長山下野守と称された。『太平記』などによると、土岐氏の一族に長山遠江守なる人物があらわれ、その存在は一次史料でも裏付けられる。『園太暦』文和二年（一三五三）三月二十六日条には、土岐頼康の弟として頼基（=長山遠江守）の名が見える。長山氏は頼基のことを示すようである。

頼基と頼兼とでは実名が異なり、官途も頼基が遠江守、頼兼が下野守となっており、一致していない。二人が同一人でないのは明白である。『太平記』には土岐明智次郎頼兼があらわれるので、彼が長山下野守とみなされた可能性もある。『太平記』にあらわれる土岐一族は、ほかに土岐明智三郎、土岐明智下野入道、土岐明智兵庫助がいるが、系譜上の位置付けは不明である。いずれにしても、『美濃国諸国記』の記述には不審な点が多いといえる。

光秀のことについて語る。『明智氏一族宮城家相伝系図書』などの記述によると、光秀は父の光綱が亡くなつてから、叔父の光安（宗寂）を後見人として明智城に入り、美濃の戦国大名・斎藤道三の配下にあったという。『明智軍記』や『美濃国諸国記』にも、同様のことが書かれている。ところが、弘治二年（一五五六）四月、道三が長良川合戦で子息の義龍に討伐されると、道三に与していた光秀の立場はまずくなつた。同年八月、光秀は義龍の攻撃を受け、九月になると自害さえ考えたという。しかし、宗寂は光秀の自害を思い止まらせ、子息・光春らと明智城を脱出し、越前国へ逃亡したのである。その後、光秀は牢人生活を余儀なくされた。やがて、越前に赴いた光秀は朝倉氏に仕え、その後は義昭の配下に加わる。

先の『明智氏一族宮城家相伝系図書』などの逸話の根拠は不詳であるが、史実とはみなし難いといえるのではないだろうか。道三に仕えていたこと、義龍の攻撃を受けたことなどは重要な事象だが、一次史料では確認できない。

以上のように、明智氏に関する系図や軍記物語の

記述を見る限り、かなり混乱している状況がうかがえる。それらの記載だけでは、光秀の生年、出身地などを知るのは、ほぼ不可能なのである。可児市広見・瀬田が土岐明智氏の本拠であることは首肯できるが、光秀が明智城に在城していたかは不明といわざるを得ない。つまり、光秀が土岐明智氏の系譜に連なるのか否かは、はっきりと明言できないのである。

『立入左京亮入道隆佐記』の記述

光秀の生涯を語るうえで重要な史料として、『立入左京亮入道隆佐記』がある。この史料は、禁裏御倉職の立入宗継（隆佐）が見聞した出来事等の覚書を集めたもので、七世の孫・中務大丞経徳が書写・校訂したものである。成立年は不詳である。覚書とは当事者が晩年に自身の備忘を目的として作成した文書なので、二次史料に相当する。

『立入家系図』によると、経徳は宝暦五年（一七五六）に誕生し、文政七年（一八二五）に亡くなったという。となると、『立入左京亮入道隆佐記』の成立年は、おおむね十八世紀後半から十九世紀初頭の範囲に想定されるのではないかだろうか。同書には、天正七年（一五七九）に光秀が丹波を平定し、信長から丹波一国を与えられたことを「惟任日向守（明智光秀）が信長の御朱印によって丹波一国を与えられた。時に理運によって申し付けられた。前代未聞の大将である」と記している。理運にはさまざまな意味があるが、この場合は「良い巡り合わせ、幸運」くらいの意味で捉えてよい。理運によって丹波一国を与えられたので、前代未聞の大将だったのである。立入宗継にとっては、光秀が名門土岐氏の相当な地位にあったとはいえ、丹波一国を受けられたことは驚倒すべき印象を持ったと推測される。

同年、光秀は八上城を落し、波多野秀治ら三兄弟を捕縛した。光秀は波多野三兄弟を安土城に連行し、磔刑に処した。一連の手法に対して、宗継は「前代未聞」と感想を漏らしている。この場合は、磔刑が「前代未聞」なのだろうか。続けて、宗継は光秀について「美濃国住人とき（土岐）の随分衆也」と記録し、信長によって「惟任」姓を与えられ、惟任日向守を名乗るようになったと記している。光秀の榮達ぶりを示すものである。この場合の随分衆とは、土岐氏の流れを汲む、高い地位にあったことを示している。随分には、「身分が高い」という意味が含まれている。高い地位というのは、土岐明智氏が奉公衆だったことを示している可能性が高い。解釈によっては、土岐氏の重臣だったとみなすこともできよう。

光秀が随分衆だったことは、隆佐が明確な根拠をもとに書いたものなのだろうか。残念ながら、宗継が光秀の経歴をどこまで知っていたかは不明である。隆佐は光秀を「随分衆」と言い切っているが、実際には光秀の経歴を詳しく知らず、風間に拵って記した可能性が高い。ただ、隆佐は土岐明智氏が土岐氏の流れを汲む、名門の一族だったことをどこかで聞いて知っていたかもしれない。『立入左京亮入道隆佐記』の記述をもって、光秀が土岐明智氏の出身であるとするケースもあるが、史料の性質を考えると慎重にならざるを得ない。「美濃国住人とき（土岐）の随分衆也」という言葉が独り歩きしていることは、注意すべきだろう。

奉公衆としての土岐明智氏

光秀の出身とされてきた土岐明智氏とは、いったいどのような一族だったのだろうか。もう少し詳しく探ることにしよう。土岐明智氏は、室町幕府の奉公衆の一員でもあった。改めて、各番帳（奉公衆などの名簿）に記される土岐明智氏の面々を確認すると、次のようになる。

- ①『文安年中御番帳』—土岐明智中務少輔【外様衆】。
- ②『常徳院御動座当時在陣衆着到』—土岐明智兵庫助（玄宣）、土岐明智左馬助（政宣）【四番衆】。
- ③『東山殿時代大名外様附』—土岐明智中務少輔（政宣）【外様衆】、土岐明智兵庫頭（玄宣）【四番衆】。

土岐明智氏には、「兵庫助（頭）」家と「中務少輔」家の二系統に分かれていたのだろう。玄宣は兵庫助を経て兵庫頭に任官し、政宣は左馬助から中務少輔に任官する家格だった。それゆえ中務少輔の政宣は、三番衆から外様衆へと昇格を果たしている。なお、玄宣と政宣は連歌会で活躍していたが、両者の血縁家系は不明である。政宣については、『尊卑分脈』などの系図に記載されている。

『尊卑分脈』には、「光」字を冠した明智氏が登場するので、光秀との関係を想定することもあるが、慎重になるべきだろう。繰り返しになるが、光秀の父の名が史料によって異なっており、一次史料で確認できないのだから、安易に考えるべきではない。いずれにしても、土岐明智氏と光秀をつなぐ根拠は乏しい。立入宗継が土岐明智氏が室町幕府の奉公衆であったことを知っていたならば、信長に取り立てられ、大いに軍功を挙げた光秀を「随分衆」として評価したことでも考えられる。何か明確な根拠があつて、「土岐氏の随分衆」と書いたわけではなく、光秀が明智と称しているので、土岐明智氏と関連付けた可能性がある。

『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』の明智氏

土岐明智氏が室町幕府の奉公衆だったことに関する、「明智」なる人物が『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』に「足軽衆」として記載されており、注目を集めている。『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』も、奉公衆などの名簿である。この点に関して、もう少し触れることにしよう。『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』は、かつて足利義輝の時代の奉公衆などの名簿と考えられていた。しかし、近年の研究により、前半部分が義輝段階のもので、後半部分が義昭段階のものであることが明らかになった（黒嶋・二〇〇四）。

同書の後半部分の作成時期は、永禄十年（一五六七）二月から同十一年五月の間であると指摘されている。永禄八年五月、義輝は三好三人衆の襲撃を受けて殺害され、当時まだ僧侶だった義昭は奈良興福寺の一乗院を脱出し、越前国の戦国大名・朝倉氏の庇護を求めた。その頃に書かれたものである。この史料に拠って、光秀が義輝に仕えていたという論者もいるが、現時点ではその可能性は極めて低いとされている。先に示したように、史料が前半と後半に分かれしており、「明智」の名が載っているのは義昭の時代に限定されるからである。

足軽衆とは単なる兵卒ではなく、将軍を警護する実働部隊と考えてよいであろう。ただし、その身分は奉公衆らの面々と比較して、高くなかったのは明らかである。というのも、彼ら足軽衆は名字のみしか記されていない者も多く、おおむね無名の存在ばかりである。以下、その面々について分析がなされているので、参考にして考えてみよう（早島・二〇一四）。

義輝の時代から足軽衆として仕えていたのが、一ト軒と沢村の二人である。二人の出自については不明である。一ト軒は俗人でありながら、永禄十二年一月に南禅寺（京都市左京区）の塔頭・竜華院領を競望したという史料がある（「鹿王院文書」）。珍しい姓でもあり、同一人物であろうか。残念ながら、沢村氏については関連する史料が見当たらなかった。

三上氏は、政所執事の伊勢氏の家臣だった。政所は、足利家の財政や家政を担当する職である。この三上氏は、秀興のことではないだろうか（「鷹川家文書」）。山口甚助は実名を秀景といい、かつては公家の葉室家に仕えていたという（『言継日記』）。『言継日記』には甚助が「武家御足軽衆」と書かれており、義昭に仕え公家や信長との連絡役を務めていた。

野村越中守は実名を貞邦といい、永禄八年六月に武井夕庵とともに鷹川貞栄らに書状を送っている

（「鷹川家文書」）。内容は義輝が横死したのち、伊勢虎福（貞為）の上洛に賛意を示したものである。当時、夕庵は美濃・斎藤氏に仕えていたので、野村越中守も斎藤氏に仕官していた可能性は高いと考えられる。永禄四年二月に斎藤氏配下の日祢野備前守らと連署した書状が残っているので、ほぼ間違いないと思われる（『永禄沙汰』）。

この野村越中守は、斎藤氏配下の同名家臣と別人であると否定する向きもある。ところが、斎藤氏に仕えていた野村越中守と同一人ではない、という根拠を示していない。斎藤氏の滅亡後、何らかの経緯を踏まえて義昭に仕えた可能性が高いのではないだろうか。

薬師寺は、弼長のことである。薬師寺は細川氏の配下にあり、かつて摂津国守護代を務めていた。柳本は秀俊といい、同じく細川氏の旧臣だった。二人は一貫した反三好派として行動しており、かつては足利義輝に仕えていた。二人が連署した禁制も確認できる（「東寺百合文書」）。秀俊には父あるいは兄弟と思しき秀久なる人物があり、訴訟関連を扱っていたことが判明する（「大徳寺文書」）。二人が義輝の没後、義昭に仕えていたことは明らかで、実務官僚的な側面もあった。以上の面々以外の足軽衆については、わからなかった。少なくとも足軽衆といわれる面々は身分の低い者が多く、寄せ集めという感が否めないところである。

足軽衆だった光秀

では、足軽衆に名を連ねる「明智」については、どのように考えるべきであろうか。「明智」には実名が書かれていないが、当該期に明智姓の者が光秀以外に候補がないことを考慮すると、やはり光秀とみなさなくてはならないだろう。光秀の初見文書が確認できるのは、永禄十二年二月二十九日である（「陽明文庫所蔵文書」）。『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』の後半部分の成立から、一・二年を経ている。光秀の存在を確認できる史料としては、永禄十一年に比定される六月十二日付の『織田信長書状』がある（「横畠文書」）。従来、この史料は特に年次比定されていなかったが、永禄十一年である可能性が高い（谷口・二〇一四）。

ただ、大きな疑問が残るもの事実である。先述したとおり、土岐明智氏は奉公衆や外様衆を務める名門の家柄だった。将軍の直臣である。そのような土岐明智氏が足軽衆に加わっているということは、大いに不審であるといわざるを得ない。『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』によると、奉公衆は一番か

ら五番まで編成されているので、普通ならば「明智」も奉公衆に加わっていないとおかしいように思える。

そうなると、これまでの光秀は奉公衆や外様衆を務めた土岐明智氏を出自とすると考えられてきたが、足軽衆という身分差を考慮すると素直に信じるわけにはいかない。光秀を名門・土岐明智氏に繋げるにはあまりに材料不足であり、当時の明智氏は土岐明智氏とは関係なく、まったくの無名の存在であったと考えるのが妥当といえるのではないだろうか。ただ、光秀の家臣には美濃の出身者が多いので、美濃を出自とするのは妥当と思える。

つまり、光秀は美濃国出身だったかもしれないが、途中で家が断絶した土岐明智氏の名を勝手に用いている可能性が高い。先述のとおり、土岐明智氏は途中で家が断絶した状態にあった。系譜上で、こうした操作をすることは珍しくない。たとえば、福岡藩の黒田家は『黒田家譜』で近江佐々木氏の庶流・黒田氏の流れを汲むと主張しているが、明確な根拠はない。おそらく、途中で滅亡した黒田家の系譜を作成し、自称したのだろう。では、光秀と義昭は、どの時点でつながったのであろうか。

義昭の越前行きと信長の状況

義昭は、越前・朝倉氏のもとに滞在したことがあった。永禄八年（一五六五）五月、足利義輝が三好三人衆（三好長逸・三好宗渭・岩成友通）らに自害に追い込まれると、当時、奈良・興福寺の僧侶だった弟の義昭（覚慶）は幽閉されたものの、同年七月に脱出した。当初、義昭が身を寄せたのは、近江国甲賀郡の土豪・和田惟政である。和田氏はもともと六角氏に仕えていたが、惟政の父・惟助（宗立）の頃には義輝に仕官していた。

同年十一月、義昭は近江国野洲郡矢島（滋賀県守山市）に移ったが、六角氏が三好三人衆の調略によって不穏な動きを見せた。身の危険を感じた義昭は、翌永禄九年八月に矢島を発って、若狭の武田氏のもとに身を寄せていく（『多聞院日記』）。当時の若狭武田氏の当主は義統が務めていたが、国内は内乱状態が続いており、とても頼りがいがなかった。義統に見切りをつけた義昭は、越前の朝倉義景を頼るべく、同年末に一乗谷（福井市）に入ったのである。

実は、本当に義昭が頼りにしていたのは、尾張の織田信長と越後の上杉謙信だった。二人は義輝の時代に上洛した経験があり、謁見を果たしていた。なかでも信長は、義輝が横死した永禄八年の段階で、早くも上洛の意思を示していた。義昭は将軍に就任することを表明して以降、信長や謙信の支援を得る

ため、頻繁に連絡を取った。特に、信長は本拠が京都から近いだけに、大いに期待したはずである。義昭の謙信に対する交渉役は大覚寺義俊（義昭の母方の叔父）が担当し、信長に対する交渉役は細川藤孝が務めた（藤孝の補佐役は和田惟政）。

永禄八年に尾張の統一を果たした信長は、同年末には藤孝を通して、義昭に上洛の意思を伝えていた（「高橋義彦氏所蔵文書」）。ところが、この頃の信長は美濃の斎藤龍興との関係が悪化しており、早急な対応に迫られていた。信長が上洛するには、斎藤氏と和睦を結ぶ必要があったのである。その間を取り持ったのが義昭であり、実働部隊が藤孝だった。上洛を急ぐ義昭にとって、和睦交渉の仲介を行うことは当然のことだった。

永禄九年二月以前から、藤孝は信長と龍興の間を取り持ったと考えられ、おおむね同年四月には両者の休戦協定が成立した。義昭は協定の成立を大いに喜び、藤孝と惟政に手紙を送り、信長の上洛を心待ちにした様子がうかがえる（「和田文書」）。信長の上洛が具体性を帯びてきたのは、同年六月のことだった。その後、信長の上洛計画は現実的な動きを見せる。

同年七月、義昭は直江景綱（謙信の家臣）や若狭の武田彦五郎に対し、出陣を促した（「上杉家文書」など）。信長と龍興の和睦が成ったこともあり、信長が尾張などの軍勢を率い、いよいよ上洛の動きを見せたからだった。『多聞院日記』によると、信長が義昭を推戴し上洛するのは、同年八月二十二日を予定していたと記されている。その根拠は、大覚寺義俊（近衛尚通の子）が大和の国人・十市氏に伝えたことを聞いたものだった。

しかし、上洛を心待ちにしていた義昭の期待は、見事に裏切られた。信長は同年八月二十二日に上洛をすることなく、同年八月二十九日に美濃へ攻め込んだのである。信長と龍興との和睦を取り持った義昭にとって、信長の行動は青天の霹靂だった。結局、信長の上洛はご破算になり、義昭は上杉謙信を頼るべく計画を変更したと推測されている。

永禄九年九月八日、若狭を発った義昭は、越前の敦賀（福井県敦賀市）に移った。義昭が敦賀に滞在したのは、謙信の上洛を期待したことだったという。その後、義昭は謙信に宛てて、出馬を期待する旨の御内書などを送ったが、謙信が上洛して義昭を支えることはなかった。結局、義昭は一乗谷に朝倉氏を頼ったのである。永禄八・九年には義昭を推戴して上洛するとの機運が盛り上がり、信長と謙信が応じる気配を見せたが、最終的に頓挫してしまったのである。失意の義昭は、永禄九年末頃に一乗谷の

朝倉氏の庇護を求めたが、義景が上洛に積極的だったかはよくわからない。この頃、越前で、義昭が邂逅したのが光秀だったといわれている。

光秀は越前・朝倉氏に仕えたのか

義昭が上洛のために奔走していた頃、すでに明智光秀は越前の朝倉義景に仕えていたという。光秀が朝倉氏に仕えたとされる根拠史料は、先述した後世の編纂物『明智軍記』『綿考輯録』である。以上の史料に基づき、ごく簡単に経緯などを触れておこう。光秀は父を失ってからのち、各地を遍歴していたという。弘治二年(一五五六)に訪れたのが越前国であった。光秀は越前国に留まり、義景から五百貫文の知行で召し抱えられたといわれている。光秀は義景から命じられるままに鉄砲の演習を行い、その見事な腕前から鉄砲寄子百人から預けられたという。光秀の軍事に対する高い才覚は、義景に評価されたのだ。大抜擢といえよう。

以上が、光秀が義昭に仕えるまでの流れである。ただ、問題なのは、光秀がそれだけの人物でありながらも、朝倉方の一次史料や記録類に一切登場しないことである。朝倉氏の重臣といってもいいくらいなので、非常に不審な点である。さらに、根拠となる『明智軍記』や『綿考輯録』は、史料としての問題点が非常に多い。光秀が越前と深い関係を有していたとの指摘もある。『武家事紀』所収の(天正元年)八月二十二日付の光秀書状(服部七兵衛宛)に基づき、一時期光秀が越前で生活していた根拠とされる。内容は「この度、「竹」の身上について世話をいただいたこと、うれしく思っております。恩賞として百石を支給します。知行を全うしてください」というものである(現代語訳)。

この史料からは、残念ながら光秀が越前にいたことを示す内容とは読めない。この史料は、単に光秀が「竹」なる人物の世話をしてくれた恩賞として、服部七兵衛に百石を与えたものである。そもそも「竹」なる人物は不詳であり、光秀との関係もわからない。この史料は越前朝倉氏を討伐した関係で服部七兵衛に発給されただけで、少なくとも光秀が越前にいたという証拠にはならないだろう。

光秀が越前にいたことを示す史料としては、『遊行三十一組 京畿御修行記』天正八年一月二十四日条に光秀の記述がある(橋・一九七二)。この史料は、天正八年(一五八〇)七・八月に遊行第三十一代の同念が東海から京都・大和を遊行(修行僧が説法教化と自己修行を目的とし、諸国を遍歴し修行すること)したとき、随行者が記録した道中記で、信頼で

きる史料であると評価されている。そこには光秀について「惟任方(明智光秀)はもと明智十兵衛尉といい、濃州土岐一家の牢人だったが、越前の朝倉義景を頼みとされ、長崎称念寺(福井県坂井市)の門前に十年間住んでいた」と書かれている(現代語訳)。

この史料を読む限り、光秀が美濃の土岐氏の一族で牢人だったこと、朝倉義景を頼って越前を訪れ、長崎称念寺の門前に十年間住んでいたことが判明する。長崎称念寺は福井県坂井市に所在する時宗の寺院で、数多くの武将が帰依したという。実のところ、光秀と長崎称念寺との伝承は、ほかにもいくつか残っている。『明智軍記』には、光秀が美濃から越前を訪れた際、妻子を長崎称念寺の所縁の僧侶に預けたと記している。所縁というほどだから、光秀は以前から越前と何らかのかかわりがあったのだろうか。その間、光秀は諸国をめぐり、政治情勢を分析したというのである。廻った国は五十余国に及んだというが、怪しげな話である。

また、光秀が長崎称念寺の近くで寺子屋を開き、糊口を凌いでいたとの伝承すらある。牢人が寺子屋を開いた逸話としては、長宗我部盛親の例がある。慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦で敗北した盛親は、京都で寺子屋を開いた。ほかにも挙げるとキリがないが、光秀と長崎称念寺の逸話を載せる地誌類は多いものの、いずれも裏付けとなる史料がない。また、越前における光秀関係の史跡もあるが、同様である。

なぜ一乗谷に住まなかったのか

『遊行三十一組 京畿御修行記』における、光秀が長崎称念寺にいたという点、地元の口伝などに基づいた記録と考えられる。記述内容が後世の聞き書きなのは、たしかである。したがって、同史料に基づき、光秀が越前にいたことの証左とするには疑問が残る。そもそも朝倉氏の家臣であるならば、なぜ本拠の一乗谷ではなく、長崎称念寺の門前に住んでいたのか。

光秀の居住場所は、もうひとつの説がある。一乗谷から峠を一つ越えた福井市東大味には、明智神社がある。神社は光秀を祭神として祀っており、光秀の屋敷址も残っているが、実際は小さな祠に過ぎない。ここは一乗谷に近いが、朝倉氏の家臣は一乗谷に集住していたのだから、単なる伝承ではないのかと疑問が残る。朝倉家において、光秀の処遇はよくなかったのか。

話を史料のことに戻すと、『明智軍記』卷一の成立には、時宗関係者のかかわりがあったと指摘されて

いる（土田・一九八四）。すでに天正八年の段階において、時宗関係者の間で光秀が越前に在国していたという説が流布していたのかもしれない。あるいは、光秀は長崎称念寺と何らかの深い関係があったのだろうが、その可能性があるとするならば、朝倉氏滅亡後のことである。その際、光秀は越前支配の一端を担っていた。

いずれにしても、光秀は越前に住んで朝倉氏の庇護下にあった程度の話で、仕官したとは言えないかもしれない。朝倉氏滅亡後、光秀が越前支配に携わったので、それがもとで伝承が生まれた可能性がある。したがって、光秀が朝倉義景に仕えたという説には大きな疑問があり、この点を信頼できない史料に拠って鵜呑みにすると極めて危険である。仮に、光秀が越前に在国していたにしても、朝倉氏に本当に仕えていたのかは極めて疑問である。

藤孝と光秀との関係

『明智軍記』には、藤孝と光秀との邂逅についても触れられている。藤孝と光秀は、同じ信長の配下にあって入魂の関係だった。藤孝の子・忠興と光秀の娘・玉は、夫婦だった。まず、藤孝について述べておこう。藤孝は天文三年（一五三四）の生まれで、父は幕臣で申次衆の三淵晴員、母は將軍・足利義晴の側室（清原宣賢の娘）である。天文八年、將軍・足利義晴の命令によって、和泉半国守護家の細川元常の養子になった。そして、天文十五年に將軍・足利義藤（のちの義輝）から「藤」字を与えられ、藤孝と名乗つたのである。

藤孝は幽斎と言われるが、それは雅号であり、出家してからは法名の玄旨を用いるのが正しい。藤孝は古今伝授（『古今和歌集』の秘伝の解釈を授かること）を受けた和歌の名手であり、教養人でもあった。藤孝と光秀の邂逅についても一次史料で確認できず、『綿考輯錄』や『明智軍記』などの記述を頼るしかない。藤孝が義昭とともに越前を訪れたのは、永禄九年末である。仮に、光秀が越前に滞在していたとするならば、二人が出会ったのは永禄九年末以降のことになろう。『光源院殿御代當參衆并足輕以下覺書』によると、藤孝は室町幕府の御供衆に列していた。軽輩の足輕衆の光秀よりも、はるかに身分は高かったといえる。

光秀は藤孝と会うなり、「このまま越前にいても朝倉氏は當てにならない。尾張・美濃を領する織田信長は今にも近江を併呑する勢いである。信長を頼るべきである」と述べ、熱心に勧めたという（『綿考輯錄』）。光秀は諸国を回遊しており、あらゆる情報に

通じていたように描かれている。ただ、義昭はこれまで信長と謙信にたびたび出陣を要請していたのは、先述のとおりで、光秀に指摘されるまでもない。現在では、義昭が最初から朝倉氏を當てにしていなかったことが指摘されており、実に疑わしいエピソードである。

この逸話を見る限り、当時、朝倉氏の厚い信任を得ていた光秀は、藤孝と対等の関係にあったかのような印象を受ける。しかし、光秀の死後の諸記録によると、決してそうではなかった様子がうかがえる。光秀と藤孝の関係を示す史料としては、『多聞院日記』天正十年六月十七日条に「（光秀は）細川藤孝の中間だったのを（信長により）引き立てられた。光秀は中国征伐（毛利氏征伐）の際に、信長の厚恩により派遣された。しかし、（光秀は信長の）大恩を忘れ、曲事（けしからんこと。この場合は信長を急襲したこと）をしてかした。天命（光秀が横死したこと）とはこのようなことだ」と書かれている（現代語訳）。

『多聞院日記』は、奈良の興福寺多聞院の僧侶・英俊が書いた日記である。奈良は京都にも近く、京都の公家などから情報提供を受けていたようである。同史料は一次史料であるが、伝聞を書き留めたこともあり、誤りも少なからずあると評価されている。ただ、間違えた際は、記事にその旨を記している。

この記述を見ると、光秀は藤孝の中間だったという。中間とは侍身分のなかでも下層に属し、さまざまな雑務を担っていた。仮に光秀が土岐明智氏の出身であったなら、とうてい考えられないほどの低い身分である。そのような光秀は、せっかく信長に登用されたのに、本能寺の変で恩を仇で返すような真似をした。当時にあって、いかなる事情があったとはいえ、「主殺し」は容認されていなかったようである。英俊は光秀の中間という身分について、明確な根拠をもとに書いたわけではないだろう。当時の人々の間では、光秀はもともと藤孝の中間だったという風聞が流れていたので、それを書き留めたに過ぎないと思われる。ただし、後述するとおり、光秀が藤孝に仕えていた可能性は、高いと考えられる。

『日本史』の記述

ポルトガルからやって来たイエズス会の宣教師のルイス・フロイスは、その著『日本史』のなかで、光秀について興味深いことを述べている。要約すると、①光秀は高貴な出自ではなかったこと、②信長の治世の初期には、細川藤孝の配下にあったこと、③光秀は才略、深慮、狡猾さにより、信長の寵を受けることになったこと、の三点に集約される。①②

を見ると、『多聞院日記』の記述と同じく、光秀がとても名門の土岐明智氏の出自とは思えない。③を見ると、光秀は類稀なる軍事的などの才覚によって、信長に抜擢され重用されたと考えられる。

②の「信長の治世の初期」がいつの時期か不明であるが、普通に考えるとおおむね上洛した永禄末年頃か、義昭を追放した天正元年（一五七三）ということになる。しかし、信長の上洛の時期ではなく、単に信長が家督を継承した時期の頃と解するならば、天文末年以降の状況を指すのかもしれない。つまり、藤孝が足利義輝に仕えていた頃に想定され、光秀は幕臣の藤孝に仕える下級の侍だったということになろう。

フロイスの『日本史』の史料性については、大きく評価が分かれる。信憑性が高いという評価もあれば、キリスト教の信仰や理解を尺度にしているので、一定のバイアスがかかっているとの指摘もある。ただ、この場合は『多聞院日記』にも伝聞ながら中間だったこと、信長に引き立てられたという記事があるので、信用してもよいのではないだろうか。私なりに考えてみると、義昭一行が越前に入った際、藤孝が何らかの形で光秀と面識を得た。光秀の優れた才覚を見込んだ藤孝は、足軽衆に光秀を加えるよう、義昭に意見具申したのではないだろうか。こうして、光秀は義昭あるいは藤孝の配下に加わったと推測される。

身分が低かった光秀

光秀の織田家中における立場を示す記述は、『日本史』のほかの箇所にも記されている。同書は、光秀の立場について「殿内にあって彼はよそ者であり、外来の身であったので、ほとんど全ての者から快く思われていなかった」と記している。「よそ者」「外来の身」とあるので、光秀が信長の譜代の家臣でないのはたしかである。この史料もまた、光秀が信長に仕えるまで、身分が低かったことをうかがわせるものがある。「ほとんど全ての者から快く思われていなかった」という記述は、後述するような光秀の大抜擢を快く思っていないことを示唆しているように思える。そして、この場合の「よそ者」「外来の身」とは、光秀が義昭にも仕えていたこと、あるいは藤孝の配下にあったことも含まれているのかもしれない。

光秀の前半生を語るうえで重要なことが、光秀が家中に発した「家中軍法」の中にある（「尊經閣文庫所蔵文書」）。天正九年（一五八一）六月、光秀は家中に「家中軍法」を発した。内容は十八ヵ条から成り、

戦場や行軍中に守るべきことや、与えられた石高に対して負担する軍備などが列挙されている。これ自体が珍しいものであるが、注目すべきは「すでに瓦礫のごとく沈んでいた私を（信長が）召し出され、さらに多くの軍勢を預けてくださった」という結びの言葉である（現代語訳）。少なくとも光秀が苦しい前半生を送っていたことは間違いないと考えられるが、光秀の「軍中家法」は疑問視する向きもあるので、要検討史料である。

『当代記』は光秀について「一僕の者、朝夕の飲食さへ乏かりし身」と書いており、生活が苦しかったことをうかがわせている。一僕とは下男、召使いなどを意味しており、中間よりもはるかに低い身分である。江戸時代初期には、光秀の身分の低さや貧しさが広まっていたのだろうか。注意しなくてはならないのは、豊臣秀吉が百姓の俸を出自としながらも、信長の配下で大出世を遂げたことである。前半生が不明であることも含めて、信長に登用されたことが二人の共通点である。

ここまで長々と明智光秀の前半生（信長に登用されるまで）を書いてきたが、それらを要約すると次のようになろう。

①光秀は土岐明智氏の出身ではなく、美濃の土豪クラスではなかったか。

光秀が土岐明智氏の出身であるかについては、極めてその可能性は薄いといえる。ただ、美濃の出身である可能性は高いだろう。ここまで取り上げた史料からは、土岐明智氏の出身であると読み取るのは困難である。光秀が明智を姓とした理由は不詳である。実際は、中途で家系が途絶えた名門の土岐明智氏の出身であると、勝手に名乗った可能性が高い。光秀は、美濃に本拠を置いた土豪クラス程度ではなかったか。

②光秀は越前・朝倉氏に仕えた可能性は低い。

光秀が越前の朝倉義景に仕えた可能性は、極めて低いと考えられる。二次史料に書かれているほど厚遇されていれば、一次史料にあらわれても不思議はない。朝倉氏の本拠の一乗谷に居住していたのではなく、少し離れた長崎称念寺に住んでいたという伝承があるくらいで、これは後年に越前支配に関わったときのものだろうか。

③光秀は藤孝に仕え、同時に義昭の足軽衆に登用された可能性が高い。

光秀が細川藤孝に仕えていた可能性は、極めて高いといえるかもしれない。もともと光秀は藤孝に仕えており、同時に義昭の足軽衆に加えられていた。のちに信長から登用されたほどなのだから、この頃

から才覚があったと考えられ、義昭の足軽衆に取り立てられたのだろう。そして、義昭が信長と結んで上洛して以降、光秀は徐々に信長に重用されるようになったのではないだろうか。

【主要参考文献】

稻葉継陽「明智光秀論」(熊本県立美術館編刊『細川ガラシャ』二〇一八年)

井上優「淡海温故録」の明智光秀出生地異伝と現地伝承について(『研究紀要(滋賀県立琵琶湖文化館)』三五号、二〇一九年)

木下聰「明智光秀は美濃土岐明智氏出身なのか」(渡邊大門編『考証 明智光秀』東京堂出版、二〇二〇年)
早島大祐『明智光秀 牢人医師はなぜ謀反人となつたか』(NHK出版新書、二〇一九年)

村井祐樹「幻の信長上洛作戦 出せなかつた書状／新出「米田文書」の紹介をかねて」(『古文書研究』七八号、二〇一四年)

山田貴司「明智光秀口伝の医術書 「針薬方」の古文書学 一見えてくる若き日の学びー」(『西日本文化』四九五号、二〇二〇年)

拙著『明智光秀と本能寺の変』(ちくま新書、二〇一九年)

拙著『光秀と信長 本能寺の変に黒幕はいたのか』(草思社文庫、二〇一九年)

拙著『本能寺の変に謎はあるのか？ 史料から読み解く、光秀・謀反の真相』(晶文社、二〇一九年)

以上



[第1回 渡邊 大門氏 資料]

講座丹波学「明智光秀の出自をめぐって」

◎概要

明智光秀の前半生は、不明な点が実に多いと言えます。光秀が市場に登場するのは、おおむね永禄十一年（一五六八）頃ですが、それまでの動向は不明です。明らかなのは、永禄十一年から、本能寺の変で亡くなる天正十年（一五八二）までの晩年の動向に過ぎません。

光秀の出自は、美濃の名門・土岐氏の庶流である土岐明智氏であると言われていますが、こちらも確固たる史料で裏付けられるわけではありません。近年では『針薬方』の奥書きに基づき、光秀が医術を心得た浪人武将だった、あるいはもともと越前朝倉氏に仕えていたなどの説までも提起されています。

この報告では、光秀の前半生に関する史料を検討し、それらの可否について考えてみたいと思います。

◎項目

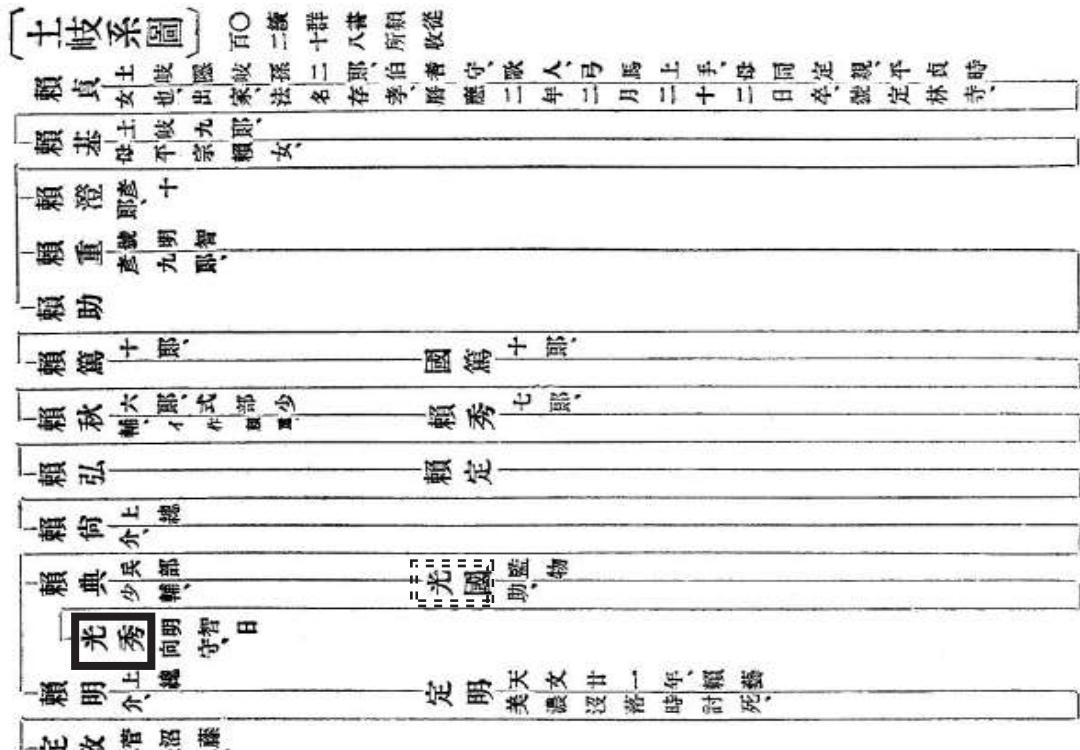
- 一 はじめに
- 二 光秀は土岐明智氏の出身なのか
- 三 光秀と近江の関係
- 四 光秀と越前の関係
- 五 おわりに

◎主要参考文献

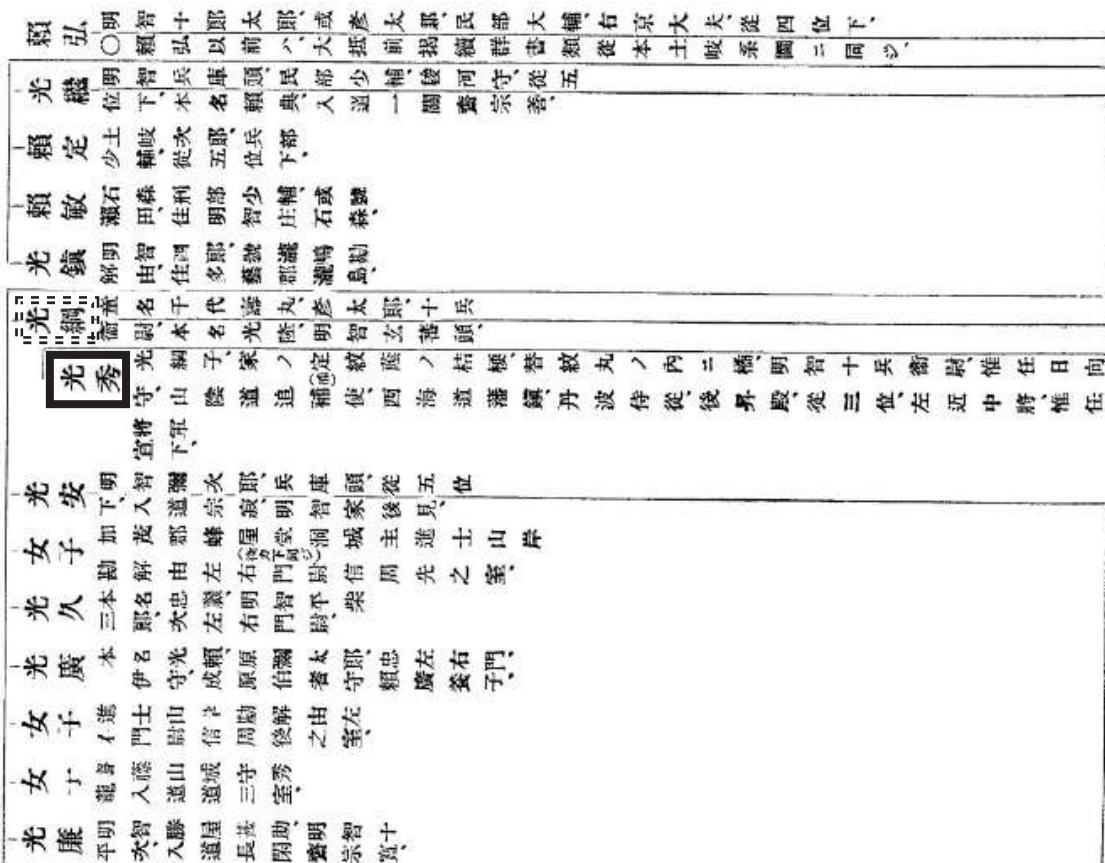
- 稻葉繼陽「明智光秀論」（熊本県立美術館編刊『細川ガラシャ』一〇一八年）
- 井上優「淡海温故録」の明智光秀出生地異伝と現地伝承について（『研究紀要（滋賀県立琵琶湖文化館）』三五号、一〇一九年）
- 木下聰「明智光秀は美濃土岐明智氏出身なのか」（渡邊大門編『考証 明智光秀』東京堂出版、一〇一〇年）
- 早島大祐「明智光秀 宅人医師はなぜ謀反人となつたか」（NJK出版新書、一〇一九年）
- 村井祐樹「幻の信長上洛作戦 出せなかつた書状／新出「米田文書」の紹介をかねて」（『古文書研究』七八号、一〇一四年）
- 山田貴司「明智光秀口伝の医術書 「針薬方」の古文書学 ━見えてくる若き日の学び━」（『西日本文化』四九五号、一〇一〇年）
- 拙著『明智光秀と本能寺の変』（ちくま新書、一〇一九年）
- 拙著『光秀と信長 本能寺の変に黒幕はいたのか』（草思社文庫、一〇一九年）
- 拙著『本能寺の変に謎はあるのか？ 史料から読み解く、光秀・謀反の真相』（晶文社、一〇一九年）

◎明智家の系図

〔土岐系圖〕



〔明智氏一族宮城家相傳系圖書〕



女子	堀 宗	堀 田	堀 佐	孫 達	守	左	右	門	元	正	入	種 道	室
女子	明 智	内智	膳 家	正代	惟	之	長	母	道	室	之	宝	臣
某	宮 城	舍 兵	人	兵									
女子	中 監	中 將	家 忠	左 爭	將								
光 後	名 章	光 岩	春 岩	丹 干	代	三	官	桑	田	平 大	周 明	智 左	馬 五 力
女子	丹 波	右 國	柏	原	原	源	城	主	定	柴 田	山 城	主	石 本
光 景	三 明	宅 智	孫 次	十 邦	耶 邦	八 號							
女子	八 隆	耶 任	藤 家	原 臣	利 露	次 藤	大						
女子	門 賀	十 邦	近 邦	左 室	右 室								

光秀 享祿元年戊子八月十七日生於石津郡多羅云云多羅ハ進士家ノ居城也或ハ生於明智城共云云母ハ進士長江加賀右衛門尉信連ノ女也名ヲ美佐保ト云傳曰光秀實ハ妹聟進士山岸勘解由左右門尉信周之次男也信周ハ長江信連ノ子也光秀實母ハ光綱之妹也進士家ハ於濃州長江家依領郡上郡長江ノ庄也稱北山之豪家云云明智光綱家督相承而取結妻縁后既經八年之春秋然共生得病身而不設一子齡及四十因ヲ爲其

父光綱之質慮光秀誕生之時其儘取迎之爲養子相讓家督因光秀成光綱之子然而以叔父兵庫頭光安入道宗寂爲後見住其本城弘治二年丙辰九月明智落城後暫浪人仕足利義昭公後仕織田信長天正十年壬午六月十三日死於城代見小栗柄生害年五十五歲

明智系圖													
賴 典	兵 部	少 补	從 五	位	下	鴻	服	○	賴 典	以	前	ハ	
前	指 摘	御 聖	青 烟	從	本 土	岐	系	圖	二 同	ジ			
光 隆	明 智	左 薩	頭、妻 武 田 義 純	妹、幼 名 彦 太 邦	天 文	十							
一 歲	到 同	十四 歲	乙 巳	土 岐 一 族	敗 北	之 鶴	戰 死						
光 秀	名 明	智 十 兵 領	後 號 催 任 日 向 守	童									
信 敏	簡 章	非 坊 成	養 子 郎	後 有 行	謂	世 人	呼	鬼	太 邦	天 文	十		
康 秀	宅 漢	平 產 三	後 邦	改 三	宅	長 開	馬 期	妻 聲	守	後	改 大	順 邦	都
女 子	菅 沢	三 宅	大 邦	入 邦	贈	正 長	定	盈 盈	和 人	呼	慶	慶	都
女 子	櫻 井	康 井	七 公	監	再 物	家	弟	妻	大 世	十			
女 子	櫻 井	忠 川	信 田	澄 七	兵	妻 一							
女 子	守 順	忠 川	與	妻 一									
女 子	定 順	守 順	伊 井	妻 一									

女子 川勝守、丹波
 僧玄琳寺洛陽妙心
 安古丸天正十一年六月十三日于山崎合戰討死。
 僧不立蟻東峨眉天音龍川寺邊居於落
 女子 井戸三郎十一年六月十三日于山崎合戰討死。
 十內改箭左馬助、伊賀秀貢定本城自害。
 自然死於死同
 內治麻呂
 光秀 享祿元歲戊子三月十日于濃州多羅城誕生、母武田義統妹、彦太郎幼稚時、齋藤山城入道、三見之可爲萬人將稱有人相、世人共云云成長後不違、常學文道、得射御劍術妙、鎌薙刀之達人也、雖有多文載之譽略。
 內治麻呂 母伊賀國柘植城主喜多村出羽守保光女、天正十年壬午正月朔日、於江州坂本城誕生、明智內治麻呂於園城寺鎮守新羅社、有社參議當氏先祖新羅三郎義光任社參古例、神樂催馬樂等町嘒行之。
 明智正統系圖、并當家傳來之舊譜者、去天正壬午夏于江州志賀城因介焚

失、吾累葉折枝木、不知華實榮枯熙也、子茲余適雖生弓馬家、捨家業欣出離、居住洛陽妙心寺塔頭、視彼形勢寔以當氏之家鑑、於此時永絕事有悲猶餘、自往古傳來系圖之寫、舊書有數卷、予其中粗選之述略編二卷、其所謂者慈父光秀尊靈五十廻忌、爲追福修善、乃至類孫讓與之者也。

于時寛永八年六月十有三日

妙心寺塔頭六十五歲

喜多村彌平兵衛殿○續舊書從本

系圖纂要 明智十
七世

光繼、
兵衛尉、
十

光安、
明智、
安

光久、
明智、
大右衛門、
長閑入道、
天正十
六年六月十四討死于坂本、六十

光忠、
二郎、
次右衛門、
天正十年六月二十日於二條被

光近、
明智、
十郎、
左衛門、

光春、
明智、
於坂本、
左馬助、
天正十六年四月十四討死于坂本、四十六

光秀	明智 智 十 兵 衛 主 坂 本 惟 任 日 向 守 朝 士 朝 信 長 公 召 仕 使 封 丹 波 國 山 城 主 坂 本 惟 天 正 十 六 一 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
女	關齊 於藤 五同 主 坂 本 惟 天 正 十 五 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
女	助明 明智 光智 智 左 兵 衛 主 坂 本 惟 天 正 十 六 一 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
女	助明 明智 光智 智 左 兵 衛 主 坂 本 惟 天 正 十 六 一 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
女	忠 後 死 妻 光 忠 次 妻 古 衛 主 坂 本 惟 天 正 十 六 一 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
女	虎 郷 子川 亂 死 妻 忠 自 中 大 興 坂 主 惟 天 正 十 六 一 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
女	誠 田 七 登 寶 室 兵 主 坂 本 惟 天 正 十 六 一 、 賦 信 長 公 而 山 崎 合 戰 敗 軍 走 苦 集 滅 造 、
光慶	十母 兵妻 木 勤 解 正 十 由 左 衛 門 範 照 女 明 智 四 智 定 賴 ○ 筒 井 系 順 慶 又 爲 古 子 阿 自 古 然 ト ア リ 二 郎 、
乙壽丸	

〔若州觀跡錄〕或曰、明智光秀ハ若乃小濱鍛冶冬廣カ次男ナリシカ、幼少ノ時ヨリ鍛冶職ヲ嫌ヒ、兵法ヲ好江戸ニ赴キ、佐々木家ニ仕ヘ、明智十兵衛ト名ツク、或時佐々木ヨリ、尾州織田家ヘ、僕者ニ参リシヲ、信長彼カ立フマニヨク、言語分明ナルヲ見玉ヒ、佐々木家ヘ所望有テ、是ヨリ後、信長ノ家人トナリ、次第ニ大祿ヲ給リ、明智日向守ト號セシ、光秀ノ素性ヲ人知ラス、丹州龜山ヲ領スルノ時、冬廣ヲ招キ寄多ク太刀ヲ作ラシメテ、家人ニ與フ、ヨツテ丹波ニ冬廣道具今ニ多シ、此時ノ冬廣ハ、光秀ノ甥ナリト云、光秀ノ助力ヲ以テ受領シ、若狭大掾藤原冬廣トナリシ、代々五良左衛門、五郎右衛門ト名ツク、元ハ鎌倉ノ明廣ヨリ出タリト云々。

◎同念『遊行二十一組 京畿御修行記』

天正七年（一五七九）

正月廿三日御行事成就し七条へ御帰寺。同廿四日坂本惟任日向守へ六寮被^レ遣、^レ南都御修行有度之条筒井順慶へ日向守一書可^レ有之旨被^レ申越。惟任方もと明智十兵衛尉といひて、濃州土岐一家率人たりしか、越前朝倉義景頼被^レ申長崎称念寺門前に十ヶ年居住故念珠にて、六寮旧情甚に付て坂本暫留被^レ申。

*遊行上人・同念の書。天正八年に成立。天正六年七月一日に伊豆下田を出发し、天正八年三月に大和当麻寺に至るまでの紀行文。

◎『立入左京亮入道隆佐記』

天正七年十二月十六日五時、村井長門守奉行、けいこの衆、越前之大名衆也、
佐々藏助殿 金森五郎八殿 前田又左衛門殿 村井事次 村井長門守内衆
以上警固衆三千警固候
丹波國惟任日向守、以御朱印一國被下行、時に理運被申付候、前代未聞大將也、坂本城主志
賀郡主也、多喜郡高城波田野兄弟、坂にて被送刻、於路次からめどり、安土へ馬上にからみ
つけ、つゝをさしほたしをうちはたのおどいはたのものに被上候、前代未聞也、
天正七年六月十日京都を遁也
美濃國住人ときの隨分衆也 明智十兵衛尉
其後從上様被仰出 惟任日向守になる
名譽之大將也、弓取ひせんしてのむべき事候、

◎『永禄六年諸役人附』

足輕衆。	三上。
山口勘助。	移飯。
一ト軒。	
澤村。	野村越中守。
内山彌五太兵衛尉。	丹彥十郎。
長井兵部少輔。	藥師寺。
柳澤。	久藏主。
森坊。	明智。

◎『針薬方』（『米田家文書』）

右一部明智十兵衛尉高嶋田中

籠城之時口伝也 本ノ奥書如此

此一部より沼田勘解由左衛門尉殿大事

相伝於江州坂本写之

永禄九拾廿日 貞能（花押）

ニキリクタシ 留度時

一、ハツ 一、イワウ 水ニテ手ヲヒヤシ

一、カンキヤウ 一、カンセウ カンセウヲセン

ジテ手ヲアラ

ウ也

犬上郡

(中略)

左目 此處ニ明智十左衛門居住スト云、明智ハ本国美濃ノ者ニテ土岐ノ成頼ニ属セシカ、後ニ成頼ニ背テ浪人シ当国に來リ、六角高頼ヲ頼ミ寄ケル處、屋形曰明智ハ土岐ノ庶流旧家也トテ扶助米ヲ与テ、一二三代モ此處ニ居スト云、息十兵衛光秀ニ至テ、器量勝レタル者ニテ越前ヘ立チ越朝倉ノ家ニ仕ソコトヲ望ム、其節往来ノ道中ニテ川流ノ大黒天ヲ拾ヒ人ニモ語ラスノ秘シ置キシカ、好身ノ者共ノ取持ニテ朝倉殿ヘ目見相調テ、義景ヨリ一ノ十貫ヲ賜リ屋敷モ押領シテ後、近處ノ諸士取持ノ人々等ヲ祝儀ニ呼登ノ參会ノ上ニ、彼拾タル大黒天ノコトヲ語リケレハ衆人皆目出度コト也ト祝、明ノ智聞テ川流ノ大黒ヲ拾ヒ何分ノ幸ヤアルト聞及玉フト云ヘハ、人々云ケルハノ大黒ヲ拾ヘハ千人ノ頭ヲ持ト古今云習セリ、然レハ貴所ハ追付御取ノ立物大将ニナリ玉ハント云、衆人皆退散ノ跡ニ十兵衛獨言シテ曰、吾ノ千人ノ頭ハ全ク望ニアラス、信仰シ頼ムトモ千人ニ限ラハ誣ナシト、又川ヘ流シテノ朝倉家ヘハ本国ヨリ尋求ラルゝ間賊リ度由ヲ申シ、暇ヲ乞直ニ尾弼ヘノ行信長公ニ属シ段々立身シテ、惟任日向守ト改メ丹波一国ニ当国志賀ノ郡ヲ添賜リ大身トナレリ、兼テハ更ニ逆意ハアサリシヲ、不慮ノ思立出テノ甲忍武田家ヲ語ラヒケル處ニ、勝頼ニ滅亡故存念相違シタル由甲ノ陽軍鑑ニモ見ヘタリ、然処其年五月、家康公穴山梅雪ヲ御同道ニテ上洛ノ時、光秀ニ馳走役ヲ仰付ラル、其馳走ノ支度不ノ宣トテ躋居タル光秀ヲ足ニテ踏玉フト云、光秀思ヤウ、扱ハ我逆意ヲ知テ如此ナルヤト覺悟シテ早速逆心シケルト也、然レトモ大恩ヲ請ケナカニテ天理ニ背キタルコト故一人モ与力加勢スル大名モナケレハ、昔ノ旧キ好身ヲ尋当國ノ先ノ方共ヲ頼ミケレトモ外ハ一人モ同心セス、多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路ノ守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守六人ハ運尽テ同心シ、山崎ノノ一戦ニ没落シ皆零落ニ及ケル、此中ニ小川土佐守、池田伊予両人ハ理リアノリテ秀吉公ニ降参シテ相続ナレトモ終ニハ両家共ニ断絶ス

32 明智光秀判物写

(国立公文書館所蔵「武家事記」三五)

今度、竹身上之儀付而御馳走之段、令祝着候、為恩賞
百石宛行候、全可有御知行候、恐々謹言、

明智十兵衛尉

天正元
八月廿一日

光秀

服部七兵衛尉殿

以上

(神田孝平氏所藏文書) 三

そくろしく候て憚入存候、御志計候、

昨今ハ懸御目快然此事候、就其我等進退之儀、御暇申上候處種々御懇意之儀共過分忝存候、こりくにゆくすべ難成身上之事候間直ニ御暇を被下、
おしらをもこそけ候様ニ御取成頼入存候、次此くら作よて候由候て可然
おより給置候間、進入候御乗習ニ御用ニさてられ候ハ、畏入存候。}

（印）

明十兵

（印）

（印）

曾兵公人々御中

光秀

(古簡雜纂) + 一

下京壇底分地子錢兩季ニ貳拾壹貫貳百文爲合力造之候、公儀御取成以下
頼入候付而如此候、別而御馳走肝要候、恐々謹言、

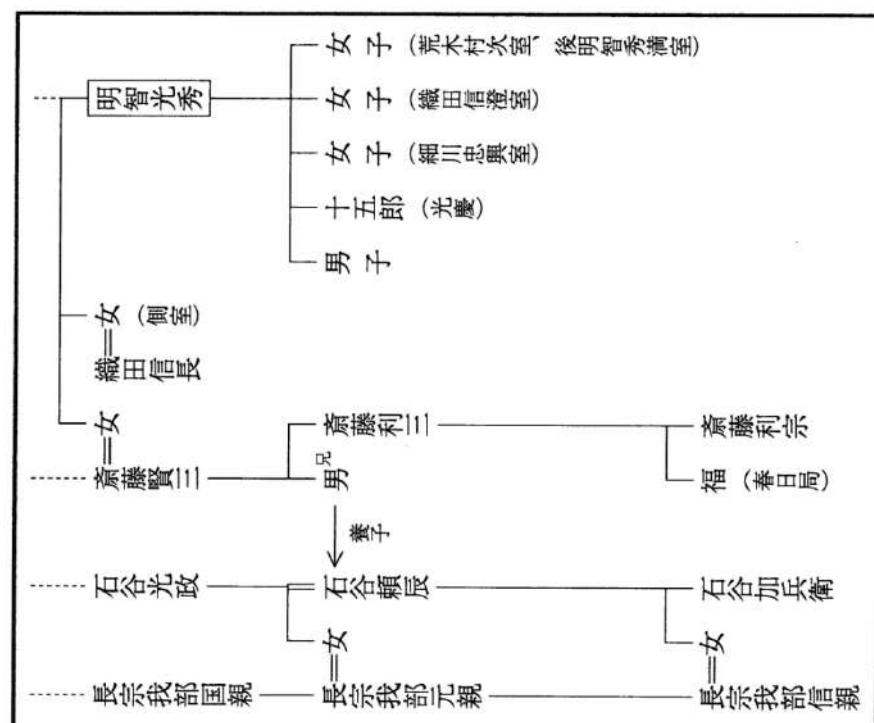
明智十兵衛時

元龜二十二月廿日

光秀(花押)

曾我兵庫頭殿御宿所

光秀關係人脈図



第2回 赤井氏・荻野直正と 明智光秀・織田信長・足利義昭との関係

小山工業高等専門学校 非常勤講師

山田 康弘

はじめに



ただいまご紹介に預かりました、山田康弘と申します。お手元にレジュメが配られていると思います。レジュメは全部で3枚ございます。

さて、私は、戦国時代

の足利将軍について研究をしております。足利将軍と言いますと、現在、NHKで放映されています大河ドラマ「麒麟がくる」で非常に詳しく描かれています。ご覧になっている方はお分かりかと存じますが、「麒麟がくる」では、第13代将軍足利義輝（あしかが・よしてる）や、その弟である最後の将軍、足利義昭（よしあき）がでできます。そして、その活躍が取り上げられています。

これまでの大河ドラマでは、足利義輝が取り上げられることはほとんどありませんでした。私の知る限りでは、1回出てきたくらいです。それも、義輝が殺されてしまう、というシーンが少し放映されてそれでおしまい、という程度だったと思います。一方、足利義昭のほうは、これまでの大河ドラマでは信長との関係でしばしば登場していました。ただ、多くの大河ドラマでは「信長はヒーロー」とされています。そのため、ヒーローの信長に刃向かった義昭は「バカ将軍」といった描かれ方がされてきました。

ところが、今回の「麒麟がくる」では、義昭は評価の高い人物として、つまり実像に近い姿で描かれています。これは、戦国時代の足利将軍を研究している私としては、うれしい限りです。

さて、本日は、レジュメに書いたとおり「赤井氏・荻野直正と明智光秀・織田信長・足利義昭との関係」についてお話をします。

具体的には「丹波国（たんばのくに）、とりわけ現在の丹波市あたりは、戦国時代はどのようなことになっていたのか?」、「中央の足利将軍家や織田信長、信長の重臣であった明智光秀は、戦国期の丹波国にどうかかわっていたのか?」、「戦国期丹波国のあることを知ることは、現代の人びと、とりわけ丹波市やその周辺にお住いの人たちにとって、どのような「意味」があるのか?」といったことについて、お

話していこうかと思っております。

ようするに、戦国時代の丹波国について、あれこれお話をさせていただこう、というわけです。

なお、丹波国は京都の近くにあります（今の京都府中部と兵庫県北東部）。また、室町時代から戦国時代にいたるまで、足利将軍家の重臣であった細川（ほそかわ）氏という大名の領国でもありました。そのため、丹波国は、京都=中央の政治情勢の影響を非常に強く受けました。したがって、丹波国についてあれこれ知るためには、中央の政治情勢を知る必要があります。そこで、本日のお話では、室町～戦国時代における中央情勢について詳しく説明いたします。

第1章 丹波赤井氏が京都政界で活躍す

それでは、早速、第1章「丹波赤井氏が京都政界で活躍す」に入っていきましょう。

今から約700年前、足利尊氏（あしかが・たかうじ）が武家の棟梁になりました。それまでは、鎌倉幕府が天下を治めていたわけですが、後醍醐（ごだいご）天皇によって鎌倉幕府は滅ぼされます。その後、後醍醐天皇による親政は2年で崩壊し、代わって足利尊氏が武家の棟梁として天下を治めました。

その後、15世紀中頃、8代将軍であった足利義政（よしまさ）の時代に「応仁の乱」が勃発します。この乱は11年間も続き、途中で年号が「応仁」から「文明」に変わりました。そこで、研究者はこの乱のことを「応仁・文明の乱」と呼んでいます。さて、応仁の乱については「将軍義政が政治に全く関心が無かったために起きた」などと言われています。皆さんもご承知のように、義政は芸術に關心が高く、例えば、正式名称を慈照寺と言う、あの有名な「銀閣寺」を造ったりしています。このように義政は非常に芸術には關心があったのですが、政治にはあまり關心が無かった、そのために応仁の乱が起きたのだ、などと言われているわけです。しかし、これは事実ではありません。

義政は政治に高い關心をもち、積極的に政治に取り組んでいました。そして、將軍としての権力を強化しようとして、大名たちをさかんに抑圧していました。しかし、そのために義政の政治は有力大名たちの反発をくらいました。そして、結局義政は、大名たちに権力を奪われてしまします（この事件を「文正（ぶんしょう）の政変」といいます。応仁の乱の前年に起きました）。義政は少しやり過ぎたんですね。この結果、大名たちが権力を握ることになったのですが、その後、大名たちは二つに分かれ、細

川勝元（ほそかわ・かつもと）と山名宗全（やまな・そうぜん）という二人のボスをいただいて派閥抗争を始めてしまいました。これが、応仁の乱なのです。

ところで、「この応仁の乱から戦国時代は始まるのだ」としばしば言われています。でも、実は研究者の間では「いつから戦国時代が始まるのか」という点については意見が一致していません。これは、何をもって戦国時代の始まりとすべきなのか、はっきりしないからです。私もよくわかりません。でも、「戦国時代はいつから始まるのか」ということが不明確だと話しくいので、今日の講演ではとりあえず、「応仁の乱以降を戦国時代とする」ということで話を進めさせていただきます。

この応仁の乱の結果、京都は焼け野原になります。でも、応仁の乱によって足利将軍家がすぐに滅亡したわけではありません。乱後も、実に100年間にもわたって将軍家は続きました。この間、7人の将軍たち——義尚（よしひさ）、義稙（よしたね）、義澄（よしずみ）、義晴（よしはる）、義輝（よしてる）、義栄（よしひで）、義昭（よしあき）が登場します。私はこの7人の将軍たちを主として研究しています。

今日、彼ら戦国時代の将軍たちについては、よく「大名に対する影響力を完全に失い、また、重臣の傀儡（かいらい。あやつり人形のこと）になり果てていた」などと言われます。しかし、これも正しくはありません。戦国期の将軍は、各地に割拠する大名（戦国大名）たちに対し、なお一定の影響力を持っていたのです。また、将軍は決して重臣の傀儡になっていたわけでもありませんでした。

例えば、戦国時代の史料を見ると「将軍がさまざまに裁判を、自分できちんと判断して裁いていた」という事例が数多く認められます。このように将軍は、誰かの「あやつり人形」になっていたわけではなかったのです。ちなみに、今も高校の日本史教科書には「応仁の乱後、足利将軍は無力になり、傀儡になってしまった」と書かれていますが、それは完全に誤りなのです。

さて、このような戦国時代の将軍を支えていたのは、有力大名の細川氏でした。細川氏というのは足利将軍家の一門で、「管領（かんれい）」という、将軍家重臣筆頭の役職を畠山（はたけやま）氏や斯波（しば）氏とともににつとめる、という家でした。その領地は畿内地方に広がっており、この丹波市のあつた丹波国も、細川氏の領地でした。

戦国時代の前半、この細川氏の当主だったのが、細川高国（たかくに）という人物です。彼は非常に教養が高い武将で、10代将軍である足利義稙（よし

たね）に仕え、重臣として将軍を支えました。ところで、この高国の領国である丹波国で、永正17年（1520年）2月にちょっとした事件が起きます。当時、丹波国の氷上郡には、天皇（後柏原天皇。ごかしはらてんのう）の領地がありました。そこが、地元の武士に侵略された、というのです。

このことを伝える貴族の日記には、次のように書かれています（『守光公記』永正17年3月12日条）。「丹波国氷上郡の栗作（今の丹波市山南町）にある天皇の領地を、赤井兵衛大夫が侵略した。そこで天皇は『丹波国は細川高国の領地であるから、高国に対し、この件について善処するよう申し付けよ』とお命じになった」というのです。

ここで「赤井兵衛大夫」という人が出てきます。天皇の領地を奪ったという武士ですね。皆さんもよくご承知の通り、現在の丹波市には赤井氏という豪族があり、室町～戦国時代に活躍しました。実は、この赤井氏がはじめて記録に登場するのが、今あげた史料なのです。このことは最近出版されました、高橋成計さんの著書『明智光秀を破った丹波の赤鬼～赤井直正と城郭～』に詳しく書かれています。是非、お読みいただければと思います。

さて、細川高国は先ほども申しましたように、10代将軍の義稙を支えていました。しかし、高国は次第に義稙と対立するようになります。そして、ついに義稙を追放し、かわりに将軍家一族の足利義晴（よしはる）を新将軍として擁立しました。大永元年（1521年）のことです。このあと高国は将軍義晴を支え、権勢をふるいます。もっとも「権勢をふるった」と言いましても、高国が将軍を傀儡（かいらい）にしてしまったわけでは決してありません。

こうした中、高国は大永6年（1526年）7月に一人の家臣を殺します。それは、香西元盛（こうざい・もともり）という武士で、「香西が敵に内通している」と聞かされた高国は、香西を殺してしまったのです。すると、これを知って柳本賢治（やなぎもと・かたはる）、波多野種通（はたの・たねみち）が激怒しました。この二人は、香西と同じく高国の家臣で、一説によると、香西・柳本・波多野の三人は名字が異なりますが兄弟だった、といいます。ですから、柳本と波多野の二人は「香西が高国に殺された」と聞いて、怒ったのです。二人は、丹波国に大きな勢力をもつ豪族でもありました。そこで二人は丹波国で、主君である高国に反乱を起こします。

これを知った高国は、柳本・波多野の二人を討つため、京都から丹波国に大軍を差し向けていました。しかし、この軍隊は、あえなく柳本らによって大敗を

嘆してしまいました。実は、高国は一流の文化人でしたが、戦争はあまり得意ではなかったのです。

さて、柳本と波多野の二人は、この勝利で勢いに乗りました。彼らは大永7年正月、大軍を率いて丹波国を出撃し、高国のある京都まで攻め込んだのです。その際、柳本と波多野は、細川晴元（ほそかわ・はるもと）という人物と手を組みました。晴元というのは細川氏の一族で、高国とはライバル関係にあつた有力武将です。この細川晴元は、四国地方に大きな勢力を持っていました。柳本・波多野は、このような晴元と手を組んで丹波から京都に迫り、晴元のほうは四国から船で大阪に渡り、西から京都に迫りました。

この結果、京都にいた細川高国は、たちまちピンチになりました。それゆえ、彼はついに京都を脱出し、將軍義晴を奉じて近江国（おうみのくに。滋賀県）に逃げ出しました（大永7年2月）。なお、この近江国は六角（ろっかく）氏という大名が支配していました。高国はこの六角氏と仲が良かったので、六角を頼ったのです。

こうして細川高国は京都を失いました。しかし、彼はこれで意氣消沈したりはしませんでした。高国は、このあと近江国内で勢力を蓄え、反撃に打って出たのです。この結果、高国は京都を奪い返すことに成功しました（大永7年10月）。

だが、高国と対立する柳本と波多野らも負けていません。彼らは、高国に奪い返された京都を取り戻そうと、すぐに反撃に出ました。すなわち、柳本と波多野は地元である丹波国の武士たちを動員し、京都に攻め込んだのです。次の史料は、その時のありさまを伝えている貴族の日記の一節です（『二水記』大永7年11月16日条）。

「大永七年十一月十六日、柳本そのほか（が）丹波国人（を）引率して出張すと云々。長坂口の上山、そのほか龍安寺等（の）山、所々（に）篝を焼く。」

これによりますと「柳本らが、丹波の国人（こくじん。有力豪族のこと）を率いて京都に迫り、京都の北の出入り口である長坂や、龍安寺の山にかがり火をたいている」とあります。

ところで、ここに出てくる「丹波の国人」の中に、丹波市を本拠とする豪族、赤井氏もいたらしいのです。それは、次の史料からわかります（『言継卿記』大永7年11月16日条）。

「大永七年十一月十六日、長坂より柳本・赤井等（が）出で候とて、篝を焼き候。京中はや（=早）々々、來たり候おわんぬ。」

これによれば、「長坂より柳本や赤井の軍勢が、京都に出てきて篝火（かがりび）をたいている。彼らは京都市街に進攻している」とあります。ここに「赤井」とありますね。この史料からは、赤井氏が柳本氏らと連携して京都に突撃していた、ということがわかるのです。どうやらこの時、赤井氏は主君である細川高国にそむき、柳本や波多野らと連携していました。

このことは、次の史料からも確認できます（『二水記』大永7年11月18日条）。

「大永七年十一月十八日、早朝、柳本・波多野・赤井等、数千人（が京都へ）入洛し、即ち、下京法華堂に陣す。」

これには「柳本・波多野・赤井らの軍勢、数千人が京都へ入り、下京の法華堂に布陣した」と書かれています。やはり赤井一族は、柳本や波多野らと手を組んで京都に進撃し、細川高国と戦っていたようですね。

なお、この史料には、赤井氏が柳本や波多野らと並び称されて書かれています。ここからは、赤井氏が柳本や波多野と同じくらいの「相当な有力者」と認識されていたことがうかがわれます。

もう一つ史料をあげましょう（『言継卿記』大永8年正月10日条）。

「大永八年正月十日、赤井か衆（が）近衛・勘解由小路・中御門・春日の室町を破るべしと申す。」

ここには「赤井の者たちが、京都の近衛・勘解由小路・中御門・春日の室町に進攻した」とあります。ここからも、赤井一族の者たちが京都で活躍していましたことが分かります。

さて、このように赤井一族は、柳本賢治や波多野通に味方し、主君だった細川高国にそむいて京都に進撃したのです。つまり赤井氏は、歴史の表舞台で活躍していたわけです。大したものだといつてよいでしょう。

この結果、細川高国は苦しくなり、ついに京都から再び近江に逃げ出しました。大永8年（1528年）

5月のことです。柳本・波多野・赤井方が勝ったわけですね。

このあとこの3氏のうち、柳本賢治が、次第に京都やその周辺で大きな勢力をふるうようになっていきます。彼は、今の大坂府や奈良県にも攻め込み、有力な大名になっていくのです。もしこのままいけば、柳本賢治はひょっとしたら、後の織田信長のような「天下人」になっていたかもしれません。そうなれば、柳本と連携していた赤井一族も、どこかの国を治める大名になっていたことでしょう。

しかし、柳本賢治は惜しいことに、この直後に暗殺されてしまいました。享禄3年（1530年）6月のことです。暗殺したのは、宿敵である細川高国が放った刺客だったといいます。ちなみにこの高国も、翌年にライバルの細川晴元と戦って大敗し、殺されてしまいました。この結果、畿内を支配することになったのは細川晴元です。彼は、高国に代わって細川氏の当主となり、丹波国をはじめとする細川領国を支配することになりました。そして赤井一族は、この晴元の家臣として、このあと生きていくのです。

第2章 萩野直正の登場

細川晴元は12代将軍の足利義晴（よしはる）、次いでその子の13代将軍義輝（よしてる）の重臣として支えました。ところが、晴元は次第に力を失っていきます。その原因是、家来である三好長慶（みよし・ながよし）と対立したことになります。晴元は、三好と激しく戦いあいました。しかし武運なく、天文22年（1553年）8月に三好に大敗を喫し、ついに京都から近江国に逃げました。

このとき将軍義輝は、細川晴元のほうに味方して、三好とは敵対していました。そのため、義輝も京都にいられなくなり、晴元と一緒に近江国に逃げました。その後、義輝は近江の朽木（くつき）というところに落ち着き、ここで5年もの亡命生活を送ることになります。なお、義輝が朽木に落ち着いたのは、こここの領主である朽木氏が将軍家の家臣だったからです。ちなみに、この朽木氏の子孫が江戸時代に福知山城主だった朽木氏です。私は昨日、福知山城の天守閣に行ってきたのですが、「麒麟がくる」の影響からか、城内の展示物は明智光秀に関するものばかりで、朽木氏についてのものはあまりなかったですね。

さて、こうして三好長慶は、主君の細川晴元や将軍義輝を京都から近江に追い落とし、畿内地方を掌握しました。しかし、この体制は長続きしません。それは、義輝と細川晴元が三好に対して反撃に出た

からです。

永禄元年（1558年）、義輝と晴元は三好に対して兵をあげ、近江から京都に攻め込みました。この結果、三好との間で激しい戦いが繰り広げられました。しかし、なかなか決着がつきません。そこで、義輝と三好長慶は和解することになりました。すなわち、義輝は「三好長慶を重臣として取り立てる」ことになり、一方、三好は「義輝を將軍として認め、忠節を尽くす」ということになったのです（細川晴元は、これを機に隠居した）。

このあと、義輝は三好から軍事的に支えられ、將軍としての地位を安定化させていきます。一方、三好もまた義輝を政治的にいろいろと利用していきます。こうして、義輝と三好は互いに協力し補完しあっていました。なお、「麒麟がくる」では「三好長慶が義輝を迫害し、これを傀儡（かいらい）にしていた」かのように描かれています。でも、これは史実ではありません。三好と義輝は仲が良く、協力していました。

ところが、このあと義輝と三好の関係は次第にギクシャクしていきます。

それは、三好一族に不幸が相次いだからでした。三好長慶をはじめ、主だった人たちが次々に死んでしまったのです。長慶の亡きあと三好氏の当主には、長慶の甥にあたる三好義継（よしつぐ）という人がなりましたが、彼はまだ年齢が10代半ばの少年だったこともあり、三好氏の力は急速に衰えていきます。

一方、義輝のほうは將軍としての地位を着々と固めていました。彼は、戦っている大名たちに和平を呼びかけ、戦いを止めさせるなど、將軍としての存在感を内外に示していました。しかし、力が衰えつつあった三好氏にとって、このような義輝は脅威に映りました。そのため、義輝と三好は次第に関係がギクシャクしていくのです。たとえば、三好は、義輝の娘を人質に取ったりしています。このことは、いかに三好が義輝を恐れていたかが分かります。

こうした中で事件が起きました。

永禄8年5月19日のことです。この日、三好氏の当主である三好義継（よしつぐ）は、家臣の松永久通（まつなが・ひさみち。松永久秀の子）と一緒に京都の將軍御所を襲い、義輝を殺してしまったのです。ちなみに明日の「麒麟がくる」では、この將軍義輝暗殺シーンが放映されるようです。どのように描かれるのか、今から楽しみですね。

なお、義輝は「剣豪將軍」で有名です。「剣術が強かった」というわけですね。『足利季世記（あしかがきせいいき）』という史料には、義輝は三好に襲われた際、

激しく抵抗し、「畠に何本も刀を刺しておき、刀が折れるごとに、刺してある刀に取り替えて戦い、何人の敵を斬り倒した」とあります。実際、義輝は奮戦したようですが、「剣豪だった」というのは残念ながらフィクションです。よく「義輝は剣豪である塙原ト伝（つかはら・ほくでん）の弟子だった」などと言われることがありますが、これも史実ではありません。ちなみに、義輝は名刀を何本も持っていましたが、これは「戦うため」ではなく「大名たちへの贈答用」です。

ところで、三好義継たちはなぜ将軍である義輝を殺してしまったのでしょうか。実は、その理由はよくわかつていません。

この頃、三好一門は、長慶をはじめ有力者が相次いで亡くなつたこともあり、力が衰えていました。そうして三好にとって、義輝は脅威でした。しかし、主君である将軍を殺せば、世間から非難され、「世間を敵に回す」ということになります。それは、三好にとって不都合なことでした。にもかかわらず、なぜ義輝を殺してしまったのか？これは今も謎です。

なお、よく「戦国時代は下剋上（げこくじょう）の時代だ。だから、もし主君に力がなければ、家来は主君を殺してもかまわなかつたのだ」などと言われますが、これは間違いです。

この時代、次のような言葉がよく使われていました。それは、「親子は、現世（この世）だけの関係だ。夫婦は前世と現世の関係だ。そして主従の関係は、前世、現世、そして来世にわたる永遠の関係なのだ」というものです。ここからは、戦国時代においても「主従の関係は、夫婦や親子の関係以上に、とても大事なものだ」とされていたことが分かります。したがって「家来が主君を殺すのはダメなこと」だったのです。もし家来が主君を殺せば、その家来は「極悪人」とされ、世間を敵に回すことになりました。

世間を敵に回すと、味方する者がいなくなります。ご承知の通り、「麒麟がくる」の主人公・明智光秀は、主君の織田信長を殺してしまいました（本能寺の変）。だから本能寺の変のあと、光秀のもとには味方が集まりませんでした。「麒麟がくる」では、細川藤孝（ふじたか）が登場します。彼の息子は、光秀の娘（「ガラシャ夫人」で有名です）と結婚していたのですが、本能寺の変後、細川藤孝は光秀から「協力してほしい」と頼まれても拒否しています。

さて、こうして将軍義輝は三好によって殺されました。

この時、義輝の弟である足利義昭（よしあき）は奈良にいました。奈良で僧侶をし、「覚慶（かくけ

い）」と名乗っていたのです。なお、足利將軍家では、生まれた男子は「跡継ぎ以外は僧侶になる」ということになっていました。これは、後継者争いを避けるためです。室町～戦国時代では、まだ「長男が跡継ぎになる」と決まってはいませんでした。そのため、兄弟の間で跡継ぎをめぐって争いが起きやすかった。そこで将軍家では、「後継ぎ以外の男子はすべて坊さんにする」とされていたのです。ちなみに、将軍家に生まれた女子は、基本的に尼さんにさせられました。

それゆえ、義昭も次男だったので幼くして僧侶になり、奈良の興福寺（こうふくじ）で暮らしていました。そんな折、義昭のもとに「兄の將軍義輝が三好に殺された」という知らせが届いたのです。義昭は「自分も殺されるかもしれない」と思い、すぐに奈良を脱出して近江国（滋賀県）に逃げました。兄義輝が殺された二か月後、永禄8年（1565年）7月のことです。そして、義昭は全国の諸大名に「兄のカタキである三好を討て」と命令したのです。

これに応じた武士がいました。これこそが、丹波赤井氏の一族、荻野直正でした。

直正は、享禄2年（1529年）に生まれたと言われています。先ほど紹介した高橋成計さんの本によれば、直正の父は、赤井一族の赤井時家という人だったそうです。直正はこの赤井時家の子として生まれ、幼少の頃に、黒井城（丹波市）城主の荻野氏のもとに養子に入った、と言われています。そしてその後、直正是天文23年（1554年）、養父を殺して荻野氏当主・黒井城主になったと言います。

この荻野直正が、永禄8年、義昭から下された「三好を討て」という命令に応じ、丹波国で挙兵したのです。

この頃、畿内地方はまだ三好氏の支配下にあり、丹波国は三好の重臣である松永久秀（まつなが・ひさひで）の弟、松永長頼（ながより）が支配していました。なお、この長頼は、当時「内藤宗勝（そうしょう）入道」と名乗っていました。丹波国の名族である内藤氏を継ぎ、また、髪を剃って出家していたからです。荻野直正は、この内藤宗勝入道にすぐさま襲いかかりました。

そして、直正はなんとこの内藤を、たちまち攻め滅ぼしてしまうのです。時に永禄8年（1565年）8月2日のことでした。

次にあげた史料は、当時、義昭に味方していた大覺寺門跡の義俊（ぎしゅん）が（永禄8年）8月5日付で上杉謙信に出した書状の一部です（『上越市史』別編1・227頁、468号）。

「丹州の儀も、去る二日（に）荻野（=荻野）惣右衛門尉（=直正）手前において、内藤備前守そのほか七百余人（を）討ち捕り候。一国平均に成り申し候。」

これによれば「荻野直正が内藤宗勝ら七百人を討ち捕り、丹波一国を平定した」とあります。なお、直正がなぜ義昭の「三好を討て」という呼びかけに応じ、内藤宗勝を討ったのか、その理由は判然としません。ただ、内藤宗勝（松永長頼）は、もともと丹波とは関係のない武士でした。つまり、内藤宗勝は、荻野直正ら丹波生まれの者からみれば「外来の進駐軍」だったわけです。そこで、直正は内藤宗勝に反感をもち、義昭の呼びかけに応じてこれを討つことにしたのかもしれません。

さて、こうして荻野直正は丹波一国を掌握しました。すると、丹波の有力武士である柳本氏・波多野氏も直正に協力しました。次の史料は、そのことを物語っているものです（『多聞院日記』永禄8年10月8日条）。

「永禄八年十月八日、丹州は、波多野（の）身内、柳本（が）赤井方（=荻野直正）へ裏返り、一円（三好の）敵に成り、すなわち、長坂口へ出でると云々。」

これによりますと「丹波国では、波多野氏の身内である柳本氏が三好を裏切り、荻野直正へ味方した。その結果、丹波国はすべて三好の敵になった。丹波の者どもは長坂口（京都の北の玄関口）に進んでいる」とあります。

第1章でお話したように、これより40年ほど前、赤井氏（荻野直正の実家）と柳本氏（柳本賢治）・波多野氏（波多野稙通）は力を合わせ、旧主である細川高国に歯向かい、京都で大暴れしました。その三氏のトリオが、ここに40年ぶりに復活したのです。

さて、この三氏の軍勢は、長坂口にまで殺到しました。ここを抜けば、三好が支配する京都です。もし荻野直正らがこの時、三好を追い払って京都を占領し、近江国に亡命中の足利義昭を京都に招いて將軍とする、なんてことになっていたら、歴史は大きく変わっていたことでしょう。ひょっとしたら直正は、後の織田信長のごとく「天下人」になっていたかもしれません……。

しかし、現実はそう甘いものではありませんでした。三好が反撃に出たからです。三好氏の重臣、松

永久秀は「丹波で、弟の内藤宗勝（松永長頼）が荻野直正らに討たれた」と知って怒り、精銳部隊を京都に送り込みました。そのため、荻野直正らは京都に入ることができなかったのです。その後、松永久秀と荻野直正らは対立し、にらみ合いました。ところが、しばらくしてこの両者は手を組むのです。どういうことでしょうか。

三好氏は、三好長慶亡きあと、甥の三好義継が当主となり、重臣の松永久秀と三好三人衆（三好長逸・三好宗渭入道・岩成友通）が協力しあって支えていました。ところが、永禄8年11月に松永久秀と三好三人衆が大げんかし、仲間割れしてしまったのです。三好三人衆は松永久秀を猛烈に攻めました。その結果、松永久秀は次第に三人衆に押されていました。そこで松永は、これまで敵対していた荻野直正ら丹波の武士たちと手を組むのです。次の史料は、そのことを示しているものです（『言継卿記』永禄10年7月27日条）。

「永禄十年七月二十七日、丹州より柳本・波多野・赤井等<松永彈正少弼方>人数<四千ばかりと云々>、西岡へ出でると云々。」

ここには「松永彈正少弼（=久秀）方となった柳本・波多野・荻野直正らの軍勢四千ばかりが、丹波国より出撃し、西岡（京都の西郊外）にまで進んできている」とあります。荻野直正らは、今度は松永久秀方として京都に進出し、三好三人衆と戦ったのでした。



さて、松永久秀は、荻野直正らを味方にするだけでなく、近江国で亡命生活を送っていた足利義昭や、この義昭を支持していた尾張国（おわりのくに。今の愛知県）の大名、織田信長とも手を組みました。しかし、三好三人衆はとても強く、松永や荻野直正

らは京都周辺で苦戦します。

これに対し、三人衆のほうは勢いに乗り、第14代将軍として足利義栄（よしひで）を擁立しました（この義栄は義輝・義昭の従兄弟にあたります）。さらに三人衆は、近江国の大名である六角氏（ろっかくし）とも連携しました。この結果、近江六角氏は「三人衆に味方する」、つまり「14代将軍義栄を支持する」ということになったわけです。するとこのことを知つて、近江に亡命中の義昭は恐怖しました。「私は義栄のライバルだ。だから私は六角に殺されるのではないか」と心配になってきたわけです。そこで、義昭は近江国を逃げ出し、北陸の越前国（えちぜんのくに。今の福井県）に移りました。当地の大名である朝倉義景（あさくら・よしかげ）を頼ったのです。

「麒麟がくる」では、この朝倉義景をユースケ・サンタマリアさんが演じていますね。朝倉義景は、自分を頼ってきた義昭を保護しました。なお、「この頃、明智光秀が義昭に出会い、その家来になった」と言われています。でも、これが史実なのかどうか、さっぱりわかりません。明智光秀の前半生はまったく不明です。前回の渡邊大門先生の講座でもお話をあつたと思いますが、明智光秀がどこで、何年に生まれたのか、また、どこで何をやっていたのか、今のところわかりません。

もっとも、貴族や大名、あるいはその重臣の家にでも生まれない限り、「生まれも育ちもわからない」というのはごく普通のことでした。豊臣秀吉だって、その前半生は謎のままであります。

さて、ここで明智光秀が登場してきました。次に、この光秀と、荻野直正との戦いについて述べていきましょう。

第3章 明智光秀との戦い

越前に移った義昭は、しばらくここで過ごしていましたが、永禄11年（1568年）7月に織田信長に招かれ、岐阜にいたします。この頃、信長は尾張だけでなく美濃国（みののくに。今の岐阜県）も掌握し、大大名になっていました。そこで、信長は義昭を招き、義昭を旗頭にして「京都進出をはからう」としたのです。

そして、信長は永禄11年（1568年）9月、ついに義昭を奉じて上洛戦を開始しました。信長軍は怒涛のごとく進撃します。そして、三好三人衆と手を組んでいた近江六角氏を倒すや、たちまち京都に突入しました。さしもの三好三人衆も、信長軍にはかなわなかったわけですね。三人衆は、京都を捨てて逃げ出しました。そこで、信長は京都・畿内を占領し

ます。そして、義昭を第15代の将軍につけることに成功しました（14代将軍の義栄はこの直前に病死した）。時に永禄11年10月18日のことでした。

さて、信長と義昭は、こうして三好三人衆を追い払って京都・畿内を占領すると、互いに協力し合いながら政治を進めていきました。よく、この間の信長と義昭については「信長が義昭を傀儡（かいらい）にしていた」などと言われることがありますけれど、それは事実ではありません。二人は、互いに足りないところを補完しながら協力し合って政治をおこなっていました。

こうした中、明智光秀は一応、義昭の家臣ということになっていましたが、信長の部下にもなっています。つまり光秀は、将軍義昭と信長という二人の主君をもつたわけですね。「主君が二人もいるというのは、おかしいじゃないか」と思われるかも知れませんが、当時はこういうことが時々あったのです。ただ、光秀は、義昭よりも信長に近い立場にありました。たとえば、信長が京都に上ってくると、しばしば光秀の家を宿舎にしています。これは、信長から相当信頼され、近い立場にあったことを物語っています。「麒麟がくる」では、光秀は、義昭の家臣という形になっていますが、事実上、信長の家臣と考えたほうがいいかと思います。

さて、信長が三好三人衆を畿内から追い払ったので、これまで三人衆と戦っていた松永久秀は、信長・義昭によって大和国（今の奈良県）の大名に取り立てられました。また、松永と一緒に三人衆と戦った荻野直正も、黒井城をはじめとする丹波国内の領地・城を安堵されたと考えられます。なお、直正の実家である丹波赤井氏は元亀元年（1570年）、丹波国のうち氷上郡、天田郡、何鹿郡の3郡を信長によって領土とされています。皆、出世したわけですね。

しかし、この安定も長くは続きませんでした。信長と義昭が対立していくからです。

元亀4年（1573年）、信長は義昭と激しく対立し、ついに義昭を京都から追放してしまいました。この時、明智光秀は信長につきます。光秀は、これまで形式的には「将軍義昭の家臣」という立場でした。しかし、ここで完全に義昭から離れ、信長の家臣になるわけです。ちなみに「麒麟がくる」では、光秀の友人として細川藤孝が出てきます。彼は、将軍義昭の側近だったのですが、この時、やはり義昭から離れ、信長の家臣になっていきます。こうして、義昭は多くの家臣たちに見捨てられ、京都から紀伊国（きいのくに。今の和歌山県）に没落していきました。

さて、信長は義昭を追放すると、このあと政敵（朝

倉義景や浅井長政ら)を次々に倒して、畿内地方全体を支配していくようになります。信長の勢力は拡大し、とくに天正3年(1575年)には大きく飛躍しました。

すなわち、この年の5月には「長篠(ながしの)の戦い」で、信長は甲斐国(かいのくに。今の山梨県)を本拠とする大大名の武田勝頼(たけだ・かつより)を打ち破りました。また8月には、越前国(えちぜんのくに。今の福井県)で大きな力を誇っていた一向一揆(いっこういっき。浄土真宗の門徒たち)を殲滅し、10月には大坂本願寺(浄土真宗の本山)を降伏に追い込みます。さらに11月には、信長は天皇から「権大納言(ごんのだいなごん)」と「右近衛権大将(うこのえごんのたいしょう)」という、極めて高いランクの官位をもらいました。これは、かつて鎌倉幕府を開いた源頼朝がもっていた官位です。

こうして信長は「天下人」の地位に着々と近づいていきました。ところが、このように信長の勢力が大きく拡大した天正3年、荻野直正は信長に反旗をひるがえしてしまうのです。一体、どうしてでしょうか。

天正3年当時、荻野直正の本拠地である丹波国は、信長の命令によって明智光秀が治めていました。ですから、直正は明智光秀に従っていたと考えられます。ところが、直正はこの明智光秀と戦うことになるのです。なぜ、そのようなことになったのでしょうか。それは、次にあげた手紙から分かります(これは、八木豊信という人が毛利氏の部将である吉川元春に送った手紙。(天正3年)11月24日付。出典は『吉川家文書』93号)。

「信長へ、出石・竹田より連々懇望たるによつて、惟任日向守(は)丹波に至つて乱入し候。即ち、荻悪(=荻野悪右衛門直正)(は)竹田表より引退せられ、黒井城(に)楯籠られ候。彼の城の廻りにおいて十二~三ヶ所、相陣付け置かれ候。この内、近きは城々(「城の」カ)尾崎一陣、執り堅められ候。兵糧等相続くべからず候間、来春は一途たるべき様、風聞候。丹波国衆過半残るところ無く、惟日一味に候。」

この手紙には、次のようなことが書かれています。すなわち、天正3年秋、荻野直正は、近所の大名である山名(やまな)氏と対立し、山名の城である出石城や竹田城を攻撃していた。この結果、ピンチになった山名氏は、信長に「荻野直正に攻められてい

る。助けてほしい」と救援を要請した。これを受けた信長は、山名氏に「わかった」と承知し、家臣の明智光秀に対して「荻野直正を討て」と命令した。そこで光秀は直ちに、荻野直正を討伐すべく出陣した。すると、これを知った荻野直正は、自分の居城である黒井城に立てこもった、というのです。

また、この手紙の後半部分によれば「明智光秀は、直正の立てこもっている黒井城の周囲に12~13か所もの陣地をつくり、城を完全に包囲している。これでは城内の兵糧もいずれなくなるだろうから、春までには黒井城は陥落するだろう。丹波国内の武士たちは、ほとんどが明智光秀に味方している」とあります。荻野直正は、強大な力をもつ織田信長を敵にしてしまい、明智光秀によって居城の黒井城を完全に包囲されてしまった、というわけですね。直正、大ピンチです。

ところが、ここで思いがけないことが起きます。

丹波国の有力武士である波多野氏が、なんと明智光秀を裏切り、荻野直正に味方したのです。次の史料は、このことを示す当時の記録です(『兼見卿記』天正4年正月15日条)。

「天正四年正月十五日乙酉、丹州黒井の城(は)荻野悪右衛門在城なり。旧冬以来、惟任日向守(=明智光秀)(が)取り詰め(て)在陣なり。(しかし)波多野(が)別心せしめ、惟日(=惟任日向守)在陣、敗軍せしむと云々」。

これによりますと「天正3年冬以来、明智光秀は黒井城を包囲し、城主の荻野直正を攻めていたが、天正4年正月、波多野氏が明智光秀を裏切って荻野に味方したので、明智光秀の軍は総崩れになった」とあります。

なぜ、波多野氏がここで荻野直正に味方したのか、その理由はよくわかりません。ただ、第1章や第2章でもお話したように、これまで波多野氏は、赤井氏(荻野直正の本家)や柳本氏らと仲が良く、しばしば一緒に京都などに出陣していました。そうした「つながり」があったからかもしれません。また、明智光秀は当時、信長の命令で丹波を治めていましたが、光秀にせよ信長にせよ、丹波國の人間ではなく、彼らはいわば「外来の進駐軍」だったわけです。そうした者に対する反発が、丹波生粋の武士である波多野氏にあったのかもしれません。

いずれにせよ、丹波の荻野直正や波多野氏は、ここで織田信長に明確に反旗をひるがえすことになり

ました。しかし、何度も言いますが、信長はとんでもない強敵です。これに勝てるのでしょうか？

すると、ここで新たな事態が起きます。前に述べたように、將軍義昭は信長と対立して敗れ、京都を追われて現在の和歌山県に逃げました。その義昭が、信長に反撃を仕掛けたのです。すなわち天正4年（1576年）2月、義昭は、中国地方の大大名である毛利（もうり）氏のもとに駆け込み、毛利氏に「信長を討て」と命じたのでした。これを受け、毛利氏は立ち上がります。毛利氏だけではありません。義昭の信長追討令を受け、武田勝頼（たけだ・かつより）や上杉謙信（うえすぎ・けんしん）、大坂本願寺といった有力大名たちが次々に立ち上がりました。この結果、「信長包囲網」が形成されていくのです。

これを知った荻野直正らは「信長包囲網に加わろう」と決意します。そのことを示しているのが、次にあげた史料です。これは、荻野直正と同盟していた石川弥七郎という武士が、毛利氏の部将である吉川元春に送った手紙です（天正4年5月19日付。出典は『吉川家文書』88号）。

「未だ申し通せず候といえども、啓上せしめ候。仍て、公方様（=將軍義昭）御供奉のため、火急御出馬あるべき趣（を）伝え承り候。我らの事（は）連々、信長に対し遺恨のみに候。この刻み、幸いに候條、荻野悪右衛門尉（=直正）・赤井刑部少輔（=幸家）（と）相談し、随分忠功いたすべき心素に候。当國の面々（も）異儀なく候。御出張次第、その覚えを成すべく候。拙者の儀、毎篇、荻悪まで申し送るにつき、また御内証申し聞き候間、愚札を捧げ候。」

ここには、次のようなことが書かれています。「初めてお手紙を差し上げます。さて『毛利殿が將軍義昭様を奉じ、信長打倒の兵をあげた』と聞きました。私は、信長に対して恨みがあります。そこで『またとない機会だ』と思い、荻野直正・赤井幸家（=直正の弟）と相談し、毛利殿に協力したく思います。丹波の武士たちも皆、同意見です。毛利殿が御出馬してきたら、きっと協力をいたします」というのです。

こうして荻野直正らは、毛利氏らによって形成された「信長包囲網」に加わることになりました。直正らはこれまで、丹波国で信長（の重臣である明智光秀）と孤独に戦っていたわけですが、ここで、毛利氏をはじめとする強力な仲間を得たわけですね。

しかし、信長はやはり強かった……。このあと、「信長包囲網」は次第にジリ貧になっていきます。これは、包囲網を形成していた毛利氏をはじめとする大名たちが、互いにうまく協力しあえなかつたのが一因です。彼らは「できれば自分はあまり戦わず、他の者たちにやってもらいたい」、「他の者たちは、私にだけ仕事を押し付け、サボるんじゃないだろうか？」と疑いあい、団結できなかつたんですね。また、包囲網を形成していた大名たちは、互いに本拠地が何キロも離れていました。そのため、互いにうまく連絡を取り合えなかつたのです（当時は、電話もスマホもインターネットも、何もありませんでしたので）。

この結果、「信長包囲網」はきちんと機能せず、包囲網を形成していた大名たちは次々に信長に倒されていきます。こうした中、丹波で信長に対して奮戦していた荻野直正は病を得、天正6年（1578年）3月に病死してしまいました。これを見た明智光秀は「チャンスだ」と考え、大軍を動員して黒井城を猛攻しました。城兵たちは果敢に抵抗しましたが、大黒柱だった荻野直正を失ったことからついに敗北し、黒井城は陥落してしまいました。天正6年8月のことです。この直前には、波多野氏も明智光秀に降参し、この結果、丹波国は信長・明智光秀が完全に掌握することになりました。

おわりに

さて、本日は「戦国時代の丹波国、特に現在の丹波市あたりは戦国時代ではどのようなことになっていたのか？」、そして「中央の足利將軍や織田信長、明智光秀は、戦国期の丹波国にどう関わっていたのか？」といったことについてお話をできました。最後に、ポイントのところを簡単にまとめておきましょう。

第1章「丹波赤井氏が京都政界で活躍す」では、戦国時代の前半に注目しました。この頃、丹波国をはじめとする畿内地方は、有力大名の細川高国が治めていました。しかし、この高国に反対する人びともいました。そして、丹波の有力武士であった赤井氏は、同じ丹波の武士である柳本氏や波多野氏と協力して「高国に反対する人びと」の一員として高国と戦い、京都にまで兵を進め、華々しく活躍したのでした。ここでは、そうしたことを紹介してきました。

次いで第2章「荻野直正の登場」では、戦国時代の後半をとりあげました。この頃、中央=京都では、兄である13代將軍義輝を三好氏に殺されて復讐にもえる足利義昭の一派と、三好氏との争いがありまし

た。その中で、丹波赤井氏の一族たる荻野直正は、義昭一派のほうと手を組み、当時丹波国を支配していた三好氏の重臣、内藤宗勝入道を討ち果たしたのです。この第2章では、そういったことを説明しました。

最後の第3章「明智光秀との戦い」では、戦国時代末期に注目しました。この頃は織田信長が「天下人」の道を駆け上っていました。これに対し、周辺の大名たちは「信長包囲網」を形成し、信長に対抗していました。そうした中で、荻野直正は「信長包囲網」に参加し、丹波支配を進める信長の重臣、明智光秀と戦いました。しかし武運なく、荻野直正は病死し、ついに赤井・荻野氏は明智光秀に倒されてしまった。このようなことを、第3章ではお話をいたしました。

では、こういった「戦国時代の丹波のこと」を現代に生きる私たちが知ることに、何か意味があるのでしょうか。過去の事実を知ることに、何かメリットがあるのでしょうか。

「過去を知るのは楽しい。娯楽が得られるじゃないか」と言う人がいます。たしかに、昔のことについて、いろいろ知るのは楽しいですよね。でも、楽しさを追求するだけなら、歴史小説や歴史ドラマ、たとえば大河ドラマ「麒麟がくる」でもいいわけです。本日、私がお話したのは歴史学の成果に基づいた「事実」です。でも、それよりも歴史小説やドラマのほうが断然おもしろい。よく「事実は小説より奇なり」などといいますが、あれはウソです。小説のほうがおもしろい。

それにもかかわらず、過去の事実、戦国時代のあれこれの事実を学ぶことに、どのようなメリットがあるのでしょうか？よく「過去の事実を知ることで教訓が得られるんだ」という人がいます。たしかに、教訓を得られることもあるかもしれません。でも、戦国時代というのは今から500年も昔です。すなわち、現代とはあまりにも時間的にかけ離れているわけです。それゆえ、戦国時代は今とはいいろいろ点で違います。そうした戦国時代のあれこれが、本当に現代に通用するような教訓になりうるのでしょうか。私は、かなり疑問だと思うのです。

あるいは「過去を知ることで未来が見通せるのだ」という意見もあります。しかし、本当に未来がわかるのでしょうか？未来は、過去⇒現代という一直線上の先にあるわけではありません。というのは「偶然」という要素が入るからです。だから、いくら過去を学んでも、あるいは現代を知っても、未来を見通すことはできません。その証拠に、去年の今頃、

誰が「コロナ禍」を予測できたでしょうか。誰もいません。人間は、未来を見通すことはできないのです。

では、過去を学ぶことにはどんな意味があるのでしょうか？一体、今から500年も昔の戦国時代のいろいろな事実を知ることに、どんなメリットがあるのでしょうか？

私はこう考えます。「過去の事実を知ることは、私たちが生きている現代を知ることになる」ということです。私たちは現代に住んでいます。そのため「現代のことは十分に知っている」と思ひがちです。しかし、現代は私たちにとってあまりにも「当たり前」なので、私たちは現代の本当の姿がなかなか見えないのでしょう。

でも、自分が生きている現代について、実はよく見えていない——これは危険なことです。そこで、過去を知り、過去と現代とを比較していくのです。そうすれば、私たちにも現代が見えてきます。だから、過去を知ることには意味がある、メリットがあるのであります。

そこで皆さんにお願いがあります。本日、お話しをいたしました戦国時代の丹波市と、現代の丹波市とを比べてほしいのです。そうすれば、日ごろ「当たり前」すぎて意識すらしていなかった、現代の丹波市のあれこれが、いろいろと見えてくるだろうと思います。多くの「気づき」を得る「きっかけ」になるだろうと思います。ただの山だ、と思っていたのが城跡で、丹波赤井一族や荻野直正やその部下たちがかつて活躍していたのか……ということを知れば、皆さまがお住いの丹波市に一層愛着がわいてくるだろうと思います。

よく「歴史学は、過去を学ぶ学問だ」と言われます。でも、これは大間違です。歴史学は単に「過去の事実を明らかにし、過去を学ぶだけ」の学問ではありません。過去を知り、それを現代と比較することによって、私たちが生きている現代をよりよく知る、そのような学問なのです。そのことを強調して、私のお話を終了させていただきます。

ありがとうございました。

【第2回 山田 康弘氏 史料】

赤井氏・荻野直正と明智光秀・織田信長・足利義昭との関係

はじめに

<本日はどのような話をするのか?>

◆丹波国——とりわけ現在の丹波市辺りは、戦国時代はどのようなことになっていたのか?。そして、中央の足利将軍家や織田信長、信長の重臣であった明智光秀は、戦国期の丹波国にどうかかわっていたのか?。さらに、戦国期丹波国のあるこれを知ることは現代の人びと——とりわけ丹波市やその周辺にお住いの人たちによってどのような「意味」があるのか? こういった問題を考えていきたい。

◆◆◆

◆丹波国は京都に近く、また、足利将軍家の重臣、細川氏(細川本家)の領国でもあったので、京都・中央の政治情勢の影響を受けた。したがつて戦国丹波を知るには、中央の政治情勢を知なくてはいけない。

⇒そこで本日は、戦国前期～末期にかけての京都・中央の政治情勢を眺めつつ、戦国時代の丹波国、とりわけ今丹波市周辺を本拠としていた有力武士たち——赤井氏や荻野直正の活躍ぶりを述べていく。

○第1章……戦国前期の中央政治を眺めつつ、今丹波市を本拠としていた有力武士・赤井氏の活躍を語る。

○第2章……戦国後期の中央政治を眺めつつ、丹波における荻野直正の活躍ぶりを語る。

○第3章……戦国末期の中央政治を眺めつつ、明智光秀と荻野直正ら丹波武士たちとの戦いを語る。

第1章

丹波赤井氏が京都政界で活躍す

◆14世紀(今から600年ほど前)、足利尊氏が出て武家の棟梁になる。以後、足利将軍家が天下を差配す。

◆しかし15世紀ごろ、8代將軍足利義政の時代に「応仁の乱」(1466年～77年)が勃発した。

⇒足利將軍に従っていた大名たちが派閥抗争を始めた。大名たちは東西両軍にわかれて争った。

⇒この応仁の乱から「戦国時代」と呼ぶ。

◆◆◆

◆応仁の乱後、足利将軍家は力を次第に低下させていったが、すぐに滅亡したわけではなかった。応仁の乱以降も、約100年間も命脈を保ったのだ(9代將軍義尚から15代將軍義昭まで、7人の將軍が出た)。

⇒「応仁の乱後、將軍は無力になってしまった」とか「將軍は重臣の傀儡(=あやつり人形)になってしまった」などと、しばしばいわれる。しかし、すべて間違い。

⇒將軍は戦国時代においても、各地の大名たちにそれなりの影響力を保っていた。また、誰かの傀儡になることなく、たとえば自分で「裁判」などを実施していた。

◆◆◆

◆さて、こういった戦国の將軍たちを支えていたのが、重臣の細川氏だ。

⇒細川氏には、本家と分家とがあり。細川氏本家は、畿内のいくつかの国(丹波国や攝津国、山城国など)を領国とする大名であった。

◆戦国時代の前期、この細川本家の当主だったのが、細川高国だ。

⇒高国は、細川氏の分家から本家当主になった人。教養が高く、一流の文化人であった(ただし、戦争はあまり得意ではない……)。彼は戦国前期、將軍足利義種の重臣として、將軍家を支えていた。

◆◆◆

◆こうした中、戦国前期の永正17年(1520)に、細川高国の領国、丹波国でちょっとした事件が起つた。

⇒丹波国氷上郡に、朝廷(当時は後柏原天皇)の領地があった。そこが、地元の武士に侵略されたのだ。

⇒このことを記す、当時の貴族の日記には以下のようにあり。

⇒「丹波国氷上郡内の栗作(丹波市山南町)にあった朝廷の領地を、赤井兵衛大夫が違乱をしているという。そこで天皇は「丹波国を領国とする細川本家の当主、細川高国に対し、この件を善処するよう申し付けよ」と仰せになった」(『守光公記』永正17年3月12日条)。

⇒この「赤井兵衛大夫」こそ、現在の丹波市あたりを勢力圏としていた赤井氏だという。上の史料は、赤井氏の存在がはじめて確認できる史料だ(高橋成計著『明智光秀を破った「丹波の赤鬼」～荻野直正と城郭～』神戸新聞総合出版センター、2020年)。

⇒当時、丹波国氷上郡には、赤井氏や荻野氏などの有力豪族たちが、丹波国主である細川高國のもとで勢力を競っていた。

◆◆◆

◆さて、細川高国は、重臣として將軍義種を支えていた。しかし、義種と次第に対立す。そこで細川高国は、將軍義種とまとを分かち、かわりに足利義晴を12代將軍とした(大永元年(1521))。

⇒以後、細川高国は、將軍義晴の重臣筆頭として権勢をふるった(ただし、

義晴を傀儡化したわけではない)。

⇒ところが、大永6年(1526)7月にこの細川高国を思わぬハブニングが襲つた。

⇒高国は重臣の香西元盛を殺害した。すると、これに怒った重臣の柳本賢治(波多野植通ら)が、高国に対して反乱を起こしたのだ。柳本・波多野は大永6年10月、丹波国で「反高国」の兵をあげた。

●「この香西・柳本・波多野の三人は兄弟で、丹波の波多野氏出身」という説あり。

⇒そこで、細川高国はこの反乱を鎮圧すべく、丹波国に大軍を差し向けて。しかし、高国が差し向けた軍勢は、丹波であえなく大敗してしまった(大永6年11月)。

⇒すると、「反高国」の柳本や波多野らは勢いに乗り、丹波から細川高国のある京都に迫った(大永7年正月)。また柳本・波多野らは、細川一族の細川晴元と手を組んだ。

⇒細川晴元というのは、細川高国のライバルで、阿波國(徳島県)を本拠にしていた有力武将だ。晴元は「ライバル・高国を倒すチャンスだ」として柳本・波多野と手を組み、四国から畿内に攻め上った。

細川高国(細川本家当主) × 細川晴元(高国のライバル) + 柳本・波多野ら

⇒この結果、京都の細川高国は、丹波の柳本・波多野ら、および細川晴元に攻められることに。

⇒細川高国はこの状況に耐えられず、大永7年2月13日、ついに將軍義晴を奉じて京都から近江国(滋賀県)に逃げ出した。

◆◆◆

◆しかし、このあと細川高国は勢力を盛り返し、ふたたび京都を奪い返した(大永7年10月)。

⇒そこで「反高国」の柳本賢治・波多野植通らは、すぐさま反撃に打って出た。丹波の有力武士たちを率いて京都に突入したのだ(大永7年11月)。次は、そのことを伝える示す史料である。

「大永七年十一月十六日、柳本そのほか、丹波国人(を)引率して出張すと云々。長坂口の上山、そのほか龍安寺等(の)山、所々(に)篝を焼く」(『二水記』同日条)。

(訳) 大永7年11月16日、柳本賢治らは、丹波の国人(=有力武士たち)を率いて京都に突入したという。彼らは(京都市街北)の長坂口の上の山や、龍安寺などの山などに篝火をたいている。

⇒この「丹波国人」の中に、赤井氏もいたらしい。次の史料はそのことを示している。

「大永七年十一月十六日、長坂より柳本・赤井等(が)出で候とて、篝を焼き候。京中はや(=早)皆々、來たり候おわんぬ」(『言継卿記』同日条)。

(訳) 大永7年11月16日、長坂口より柳本・赤井らが(京都に)出てきて、篝火をさかんに焼いている。京都市街に早くも皆、来ていると/or>

⇒ここで注目されるのは「赤井」とあることだ。赤井氏も、柳本らと連携して京都に突撃していたのだ。すなわち、赤井氏も、細川高国にそむいて柳本らと連携したのだ。この点は別の史料からも確認される。

「大永七年十一月十八日、早朝、柳本・波多野・赤井等、数千人(が京都へ)入洛し、即ち、下京法華堂に陣す」(『二水記』同日条)。

(訳) 大永7年11月18日、早朝に柳本・波多野・赤井ら数千人が京都へ入り、下京法華堂に陣を構えた。

⇒赤井勢は、柳本・波多野らと下京に布陣して、細川高国と戦っていたのだ。

⇒京都の貴族の日記に、赤井氏が柳本や波多野と並称されていることは、赤井氏は相当の有力者だったか。

⇒なお、赤井勢は大永8年(享禄元年)になっても京都に在陣し、細川高方と戦っていた。

「大永八年正月十日、赤井か衆(が)近衛・勘解由小路・中御門・春日の室町を破るべしと申す」(『言継卿記』同条)。

(訳) 大永8年正月10日、赤井勢が「近衛や勘解由小路、中御門、春日の室町を破壊する」と申している。

◆このように、柳本・波多野、それに赤井といつた丹波勢は、細川晴元(高国のライバル)を主君としてあおぎつつ、宿敵の細川高国と京都で戦つた。

⇒この結果、細川高国は次第に劣勢になり、ついに京都を捨て、ふたたび近江国へ逃げ出した(享禄元年(大永8年)5月14日)。

⇒柳本・波多野・赤井ら丹波勢の大勝利だ。このうち、柳本賢治の威望が高まる。

⇒柳本賢治は勢いに乗り、各地を制覇する。享禄元年9月には大和国(奈良県)を制圧し、さらに11月には河内国(大阪府)にも侵攻し、享禄2年11月には攝津国(大阪府)にも攻め込んだ。

◆ところが、柳本賢治は享禄3年6月29日、細川高国の方に放った刺客によって暗殺されてしまった。

⇒リーダーを失った丹波の武士たちは、中央で活躍する機会をつかめないことになった。

⇒このあと細川本家は、細川晴元が、勢力を低下させた細川高国にかわって当主になった。そして細川本家の領国である丹波国も、晴元の支配下に置かれた。

第2章 萩野直正の登場

◆こうした中、享禄2年（1529）に萩野直正が生まれたという。父は、赤井時家という。
⇒直正は、幼少期に赤井氏の近隣豪族、萩野氏（黒井城主）のもとに養子に入ったという（高橋2020年）。

◆さて、このころ丹波国は、細川本家の当主となった細川晴元が差配していた。

⇒晴元は、12代将軍足利義晴を支え、次いで13代将軍足利義輝にも仕えてこれを支えた。

⇒しかし、細川晴元は次第に、重臣の三好長慶と対立していった。

⇒そして天文22年（1553）8月、細川晴元は、三好長慶に

大敗し、將軍義輝とともに近江国に逃亡した。

⇒この結果、細川本家の領国である丹波国や攝津国（大阪府）、山城国（京都府）といった地域は、三好長慶が実質的に差配することになった。

⇒そしてこのうち丹波国は、三好長慶重臣である松永久秀の弟、松永長頼が受け持つことに。長頼は、丹波の名族である内藤氏の名字を称し、「内藤宗勝入道（蓬雲軒）」と号した。

◆このような中、天文23年（1554）に萩野直正は養父を殺害し、萩野氏当主になったという（高橋2020年）。

⇒当時、丹波国は内藤宗勝入道の管下にあったから、萩野直正も宗勝の配下に入ったと思われる。

⇒しかしその後、萩野直正は、この内藤宗勝入道を討ち果たすことになる。どうしてか？

◆先に述べたように、細川晴元と將軍義輝は、天文22年に三好長慶と戦って敗れ、近江に逃亡していた。

⇒しかし、永禄元年（1558）、細川晴元と將軍義輝は、三好長慶と和解して帰京した。

⇒この結果、三好長慶と將軍義輝は、連携して天下を差配することになった（細川晴元は隠居）。

⇒ところがこの直後、三好一族に次々に不幸が襲った。すなわち、これまで三好長慶を支えていた三人の弟（三好実休入道・安宅冬康・十河一存）がすべて死んだうえ、三好長慶の唯一の男子・三好義興も病死してしまったのだ。さらに永禄7年（1564）には、三好長慶自身も病死してしまった。

⇒このあと三好一門は、長慶の甥にあたる三好義継が継承したが、三好義継はまだ若く、有力者を失った三好一門の勢威は低下気味になっていた。

⇒一方、三好と連携する將軍義輝は、將軍としての地位を着々とかためていた。

⇒將軍家の家臣たちを統制し、各地の大名たちに呼びかけて戦いをやめさせようとするなど、將軍としての存在感を示していたのだ。

⇒このような將軍義輝に、三好一門は警戒した。それゆえか、永禄8年（1565）5月19日、三好一門の当主三好義継と、その重臣の松永久通（久秀子）は京都の將軍御所を攻撃し、將軍義輝を殺してしまった。

◆さて、將軍義輝殺害当场、義輝の弟であった足利義昭は、奈良で僧侶をしていて（法名「覺慶」）。彼は、兄が殺されるとの危険を感じ、7月28日に奈良を脱出して近江国（滋賀県）へ向かった。

⇒そして義昭は、このあと織田信長をはじめ、各地の大名たちに「兄義輝のカタキである三好を討ちたので協力せよ」と呼びかけていった。

⇒一方、義昭に味方する大覚寺義俊（義昭の母方の叔父）は、このころ京都周辺で「義輝のカタキである三好を討つべし」として反三好の運動をすすめていた。

⇒そして、この運動に、丹波の萩野直正も応じたのだ！

⇒萩野直正は、義昭・大覚寺義俊に味方し、丹波国を差配していた三好方の内藤宗勝入道（松永久秀の弟）を猛攻。そして、ついに永禄8年8月2日に内藤らを討ち果たした。

⇒次の史料はこのことを示すもので、大覚寺義俊が上杉謙信に送った書状の一節だ。

「丹州の儀も、去る二日（に）萩野（＝萩野）惣右衛門尉（＝直正）手前において、内藤備前守そのほか七百余人（を）討ち捕り候。一国平均に成り申し候」（永禄8年）8月5日付、大覚寺義俊書状。『上越市史』別編1・227頁、468号）。

（訳）丹波国は、去る（永禄8年）8月2日に萩野直正が自前で内藤勢を打ちやぶり、700人も討ち取って丹波一国を掌握した。

⇒なぜ、萩野直正が義昭方（大覚寺義俊）に味方し、三好方の内藤宗勝入道を討ったのか、その理由は不明。

⇒ただ、内藤宗勝入道は三好の重臣である松永久秀の弟であり、丹波の萩

野直正からみれば「部外者」「進駐軍」。そこで直正はこれを討つか。

◆こうして萩野直正は義昭派=反三好派になった。このような萩野直正に、丹波の有力者である波多野氏や柳本氏も合力し、三好の支配する京都に迫った。次は、そのことを伝える史料だ。

「永禄八年十月八日、丹州は、波多野（の）身内、柳本（が）赤井方（＝萩野直正）へ裏返り、一円（三好の）敵に成り、すなわち、長坂口へ出でると云々」（『多聞院日記』同日条）。

（訳）永禄8年10月8日、丹波国は、波多野の身内の柳本が三好から裏返って赤井方（＝萩野直正）になり、すべて三好の敵に成了った。そして、丹波勢は京都の北の玄関口、長坂口に迫りつつある。

⇒これより約40年前の大永・享禄年間、波多野・柳本・赤井トリオは京都で武命をはせた。それがまた復活した形になったのだ。しかし、三好はこれに黙ってはいなかった。三好重臣の松永久秀は、ただちに精銳部隊を京都に派遣し、波多野・柳本・赤井（萩野直正）の京都進行を阻止した（『多聞院日記』永禄8年10月18日条）。

◆この結果、波多野・柳本・赤井の京都侵攻は、三好方（松永久秀）によって挫折させられてしまった。しかし、事態はさらに急変していく。永禄8年11月、三好氏が二つに分裂したのだ。

⇒すなわち、三好の重臣である三好三人衆（三好長逸・三好政康・岩成友道）と、同じ三好重臣の松永久秀が対立し、大ケンカを始めたのである。この結果、三好は【三好三人衆】×【松永久秀】に分裂した。

⇒この争いは三好三人衆が優勢で、次第に松永久秀を圧倒していった。そこで三好三人衆は、畿内をほぼ制すると、第14代将軍として足利義栄（義輝・義昭兄弟の従兄弟）を擁立した。

⇒そのため当時、近江国に滞在していた足利義昭は「三好三人衆が攻めてくるかも……」と身の危険を感じ、近江から越前国（福井県）に下って朝倉氏（朝倉景義）を頼った（永禄9年8月末）。

◆「このころ、明智光秀が義昭に仕えた」といわれるが、詳細は不明だ。

◆光秀の出自（生まれ）も不明。ただ、光秀程度の武士の出自が不明なのは、不思議ではない。

⇒さて、こうして畿内では將軍義栄を擁した三好三人衆がますます勢力を誇り、松永久秀はじり貧状態に。

⇒しかし、松永久秀もしぶとい！三好氏当主である三好義継を味方に引き入れ、三人衆に激しく抵抗した。

⇒さらに松永久秀は、今度は尾張国（愛知県）の織田信長や、信長が支持する足利義昭と手を組んだ（松永の宿敵、三好三人衆は14代将軍義栄を支持していたので、松永は、義昭や信長と手を組んだのだ）。

⇒そのうえ松永久秀は、少し前まで敵対していた波多野・柳本・赤井（萩野直正）のトリオとも手を組んだ。次は、そのことを示す史料である。

「永禄十年七月二十七日、丹州より柳本・波多野・赤井等く松永弾正少弼方人數少く四千ばかりと云々」（『言継卿記』同日条）。

（訳）丹波国より、松永久秀方の柳本・波多野・赤井（萩野直正）等、四千人ばかりの軍勢が、京都西郊外の西岡まで進撃してきているという。

⇒こうして、畿内では二つの陣営ができあがつていった。

◆三好三人衆（三好重臣） 松永久秀・三好義継（三好氏当主）
14代将軍・義栄 × 織田信長・足利義昭

萩野直正ら丹波衆

⇒しかし、三好三人衆は強い！畿内では松永や萩野直正らは次第に苦戦していった。

第3章 明智光秀との戦い

◆このような状況のもと、織田信長が足利義昭を奉じて、永禄11年（1568）9月に上洛戦争を開始した！

⇒信長・義昭軍は強い！三好三人衆をたちまち追い払い、畿内を掌握したのだ。

⇒この結果、永禄11年10月18日、足利義昭は信長の力で第15代将軍となつた。

⇒義昭や信長に味方していた松永久秀は大和国（奈良県）の大名になり、萩野直正もその地位を安堵か。

⇒丹波国は信長が差配することに。そして萩野直正の実家である赤井氏当主、赤井忠家は元亀元年（1570）に信長から丹波国の中郡（氷上郡・天田郡・・鹿郡）を安堵されたという（高橋2020年）。

◆しかし、安定した状況は長くは続かなかつた。元亀4年（1573）2月、将軍義昭が信長から離反したのだ。

⇒この結果、将軍義昭は信長によって京都を追放されてしまった。

◆このとき、明智光秀は将軍義昭を見捨て、信長に鞍替えした。

⇒このあと、信長が畿内全体を差配していった。そして信長は、丹波国を重臣の明智光秀にまかせた。

⇒その後、信長はますます力を増大させた。とくに天正3年（1575）は大

第3回 近江時代の明智光秀

城郭談話会 会員

福島 克彦



今年度の講座「丹波学」では、各先生が山崎の合戦や丹波攻めなど、さまざま角度から明智光秀について取り上げ講義されます。今回、私は近江時代の光秀の話をします。

よろしくお願いします。

明智光秀という人は、美濃の出身だと言われていますが、明智光秀の美濃の時代の確実な史料は残っていません。明智光秀に関する文書は170以上確認されていますが、すべて永禄11年9月以降の文書です。大河ドラマ『麒麟がくる』の前半が終わりましたが、あの内容は光秀に関する確実な史料によるものではなく、あのときこの場所にいたとかというお話をドラマの中で描かれていますが、全部、本当かどうかわかりません。もう一つ、光秀の年齢ですが、本能寺の変の後、山崎の合戦で死ぬのは、『明智軍記』では55才、『当代記』では67才となっています。また、『兼見卿記』によると、濃州に親類がいたと書いてあります。濃州とは美濃の国のことです。明智の親戚筋が美濃の国にいたということはまず間違いないだろうと思います。ただ、本人が美濃の出身だったかというと、現在、いろいろと議論されているところです。今、大河ドラマ『麒麟がくる』では、越前にいたころを放映していますが、『京畿御修行記』という同念上人の日記によりますと、明智十兵衛というものが越前朝倉義景にお願いし、長崎称念寺門前に10年間住んでいたという記述があります。このことから越前に住んでいたのは確かだろうと思われます。また、大河ドラマ『麒麟がくる』にも出てくる細川藤孝が明智光秀を仲間として引き立てたということが書かれています。細川藤孝は足利氏の家臣であったことから、何らかの形で足利義昭に従っていた細川藤孝にも明智光秀は関わりを持ち頭角を現していくことになったのだろうと思います。

最近、近江国については、『針葉方』という史料が見つかりました。この史料の中に明智十兵衛が高島田中という城で籠城していたときに朝倉氏の様々な薬草に関することが確立したと書かれています。あ

の薬はどんな製法で作るのかといったことであります。米田貞能という人が永禄9年（1566年）にこの史料を書き写しています。このことから、足利義昭が將軍のときです。近江の田中城で明智光秀は籠城していたわけですから、当時、一人前の武将になっていたことがわかります。この田中というのはどこかと言いますと、滋賀県の高島郡（高島市）というところです。京都の東北で、琵琶湖湖畔の町の坂本の北の湖の近くになります。しかし、まだ、十分に検証されていないので、今後、より一層検証する必要があると考えます。早い段階から近江に光秀が関わっていたと考えられるのではないかと考えます。これらのことから、光秀は越前や近江に関わっていたということがわかりました。

明智光秀は、この後、足利義昭について、美濃の織田信長に助けを求めて行くことになります。信長といいますと、ご存じのとおり尾張の国を治めていましたが、斎藤龍興を追い出し美濃の国を治めます。そして、この美濃の国に入ってきた足利義昭を信長が助けるということになります。その後、永禄11年（1568年）9月、信長は義昭を奉じて上洛します。明智光秀も一緒に上洛することになります。ここで、やっと、明智光秀は政治の表舞台に立つことになりました。

以上のとおり、明智光秀は織田信長にとって、外様的な武将です。他家から入ってきた武将ですし、信長の地元、尾張の国の武将ではありません。光秀は外様的な意味合いが強かったと思います。当時、信長にとって將軍義昭との関係はたいへん大事なものでした。そして、その調整役として明智光秀が義昭のもとで活躍していたわけです。ちょうど義昭と信長の間で中間的な存在だったと思います。

当時、足利將軍の周囲を固めていた奉公衆の家臣団がありました。ちょうど親衛隊みたいなものです。大河ドラマ『麒麟がくる』にも出ていますが、三淵とか細川といった者たちです。その後、明智光秀もその奉公衆という役回りをしています。また足利義昭のもとでは武士的な仕事もしています。一方、信長の家臣としては奉公衆的な役割を果たしています。奉公衆というのは、役人的な業務をする人をいいます。京都にはお寺とか神社がありますが、それらとの調停に関する仕事もありました。所領や土地問題などで争いが起きたときなどは、こういった奉行と言われる人達が、その問題を調べたりして信長に伝え決裁を受けて実行します。光秀は將軍義昭のもとでは警備、信長のもとでは奉行として活躍したと思われます。今後、『麒麟がくる』でも放映される

と思いますが、永禄13年1月23日の条書ということが起きます。これは、将軍義昭の権力を制約するという内容のものです。この頃の光秀は、まさに、将軍義昭と信長のどちらにも信頼されているような中間的な存在でした。

さて、この後ですが、明智光秀は滋賀郡を経営していくことになります。滋賀郡は京都に近く、大津より北にあり琵琶湖の西岸に位置します。ここは、比叡山を越えると京都です。京都盆地のすぐ近くということで、また、京都に隣接する琵琶湖の湖岸ということで、たいへん重要な地域ということになります。

永禄13年、信長は、近隣の大名に「天下静謐」のため禁中の修繕を求めるが、この「天下」という言葉は、全国の全体を指すのか、近畿地方・京都周辺を指すのか、近年、研究が進められています。天下を静かに治めることは、将軍にとって、たいへん大事な役です。そこで、地方にいる大名に京都に上洛し将軍に挨拶しなさいと信長は求めます。これに対して近畿地方のいろいろな武将が第15代将軍に挨拶に行きますが、一乗谷にいた朝倉義景は京都に行きませんでした。それに対し、信長は立腹し、越前の朝倉氏を攻めます。しかし、この攻めている最中に朝倉氏と親しかった滋賀県北部の浅井長政が信長を裏切れます。信長の妹であったお市の方が浅井氏には嫁いでいますので、浅井氏は信長と親しかったはずですが、それ以上に親しかった朝倉氏と手を組み、信長に対抗します。永禄13年6月、信長と朝倉・浅井の戦いとして、姉川の合戦というのがありました。ここで、信長は朝倉・浅井氏を破ります。しかし、9月になると、大阪の本願寺や三好氏が朝倉・浅井氏と連携して信長と足利義昭を攻めます。話がややこしくなって恐縮ですが、朝倉氏は大阪の三好氏と連携して信長を挟み撃ちにして戦います。これを志賀の陣と言います。信長の最大の危機となりました。大河ドラマ『麒麟がくる』では関白二条晴良という人が仲介し朝倉氏と信長の対立をなんとか和睦に持ち込みます。

さて、この頃、比叡山延暦寺は浅井氏、朝倉氏に味方し、信長を苦しめました。これが翌年の比叡山の焼き討ちにつながっていきます。比叡山延暦寺が朝倉氏に味方したため朝倉氏の力は弱まらず信長を苦しめました。その結果、翌年の比叡山の焼き討ちを敢行します。このころ、光秀の勞もあり、将軍義昭と信長は仲が良好な状況でした。また、光秀は近江志賀郡を任せられることになります。

最初、明智光秀は大津市にある宇佐山城を任せられ

ます。この城は、大津を見渡すことのできる山のてっぺんにありました。石垣がしっかりと立派なお城です。光秀は、ここを最初の拠点にしていきます。その後、比叡山焼き討ちがありましたが、この比叡山延暦寺の門前町である坂本の湖岸にお城を造ります。現在では、石垣などの遺跡が残っており、大津市教育委員会が復元していますが、その規模などはわかりにくい状況です。ただし、この地に坂本城があったのは確かです。門前町の坂本ですが、比叡山の麓にあり、下坂本と上坂本に分かれています。

元亀2年(1571年)、信長は、比叡山延暦寺が朝倉氏と手を結んで攻めてくると困るので、光秀に近江の国衆の切り崩しを命じます。近江というところは、多くの集落にそれぞれの国衆(土豪)がいるところでした。また、彼らは延暦寺や浄土真宗の門徒に協力していました。明智光秀は、画策によりこの状況を切り崩し、信長に寝返らせていくことをします。信長についた方が得であるということを画策していくわけです。史料2がそのことを示しています。この史料は、明智光秀から和田秀純へ宛てた手紙で、大津市の歴史博物館に寄託されています。宛名が「和源殿」と書いてありますが、この「和源殿」というのが和田秀純のことです。明智光秀の書いた長文の手紙です。坂本のすぐ北にある雄琴の領主である八木を味方につけてほしいとお願いしたところ、八木は味方するかしないか悩んでいるみたいであったが、結果、八木が光秀の宇佐山城に入ることを伝えてきたので光秀は感涙を流したいへん喜んだという内容です。近江の土豪が延暦寺と縁を切ってくれたことについて、明智光秀がたいへん喜んでいるということです。以上のとおり、信長になびいた人もいたし、比叡山方についた人もおり、地元の国衆たちは悩みました。八木がすぐに味方してくれなかつたので、国衆がなかなか味方してくれなかつたが、光秀自身が判断し乗り出すことで、やっと味方してくれるようになり涙が出てしまったということです。また、ギリギリまで延暦寺に味方し裏切ったものの口を塞ぎたいという国衆たちの悩んでいる様子が書かれており、悩み抜いている彼らに寄り添った書き方の手紙の内容となっている。こういったことから、光秀は国衆たちの心を掴もうとしていた様子がよくわかります。

八木をはじめとした国衆の者たちが味方するようになりましたので、信長は比叡山の焼き討ちを行っています。坂本の町もかなり燃えたと考えられます。この後、光秀は坂本地区に城を築いていきます。元亀3年、閏正月、坂本城は完成します。

明智光秀は、坂本城でこの天守を造っていきます。最初にこのことを始めたのは、足利義昭です。ちょうどこの頃、京都上京で義昭が御所を作ります。

『麒麟がくる』では向井理さんが演じている足利義輝が殺される場面がありました。実際にはたくさんの方々がいたはずですが、ドラマでは、ひとりぼっちで戦い敵に囲まれ殺されてしまいます。実際には、足利義輝は周りの味方と一緒にになってかなり奮戦しました。優しくて気の弱そう感じでドラマでは描かれていますが、実際はふくらしているという足利義輝の肖像画が残っています。本当の義輝は怖いという印象を与える武将だったようです。義輝の弟であった義昭も同じ御所に入り、光秀も坂本に天守を造りました。その後、細川藤孝が勝龍寺に、信長が安土に城を築きました。以上のとおり、信長も將軍義昭や細川藤孝について、琵琶湖のほとりに城を築いていきます。滋賀県北部地方を船で攻めるために、また、琵琶湖周辺にいる様々な国衆を味方に引き入れていこうとしてこのような城を築いていったのでしょうか。

その後、信長と義昭が京都で戦うことになります。そのとき、朝倉義景は將軍義昭を助けにいこうとしますが失敗します。それは、この頃、琵琶湖の北部地方である志賀郡に信長が複数の城を持っていたので、朝倉義景は京都に向けて南下することは無理だと判断したからだと言われています。また、このことを信長はたいそう喜んだと言われています。

坂本城に入りました明智光秀はこの坂本という町を大事にし、城の周辺に城下町を設けました。

次に史料3『中書家久公御上京日記』という史料がありますが、皆さんと一緒にこれを見ていきたいと思います。

これは、島津家久の旅日記です。島津家久という人は島津家の当主だった島津義弘の弟です。天正3年に旅した際に書かれたものです。この時代、伊勢詣などの際に旅日記がたくさん書かれています。現在でも、街道を歩きながら、私が街道周辺の城の説明をしますと皆さん面白がっていましたが、この家久の旅日記はたいへん面白いものです。信長が軍勢を率いて京都に上洛する様子を見ていた人が「あれが信長だ」と言ったことが、この旅日記に書かれています。信長が馬上でうたた寝している場面も書いてあり、とても面白いです。ドラマに出てきそうな場面ですね。また、戦いから戻ってくるのに鎧を身につけていることに驚いたと書いています。実は、九州の武将は戦争から凱旋するときには、雨が降っていたとしても服を脱いで凱旋します。鎧を身につ

けて凱旋する様子から、戦国時代の戦争には地域差があることを日記で書いています。このことも、本当にたいへん面白いことです。そして、里村紹巴に京都の案内を受けています。近年、京都に行きますと外国人に地元の観光案内ボランティアの人が京都のことを説明しています。それと同じようなことが行われていたんですね。

坂本の話に戻します。天正3年（1575年）5月14日、島津家久は坂本にやってきて宿屋に泊まっているとき、明智光秀に誘われ坂本城に行きますが、そのときの様子についてもこの日記に書かれています。小船とかではなく立派な船がやってくる家があるのに驚いた様子や屋根の上から酒を飲みながらその様子を眺めている場面が描かれています。船の上から光秀の坂本城を見学できることも書いています。これらのことから坂本城は琵琶湖の近くにあった城だったということがよくわかります。また、このことは坂本城の城下町に水郷みたいな水路があったということを示す史料になると思います。

史料3の後半は次の日の5月15日の日記です。

明智光秀が、島津家久の会食の場を作ってくれたということを書いています。また、光秀にお茶席に案内されたが、家久は茶の湯の作法のことはわからないので湯を所望したと書いてあります。庭の竹を敷いてお酒の席を設けたという話や葦の紐を編みその紐で魚を捕まえ食べさせてくれ喜んでいるという話も出でています。織田信長の武田勝頼との長篠合戦の陣立てについて、光秀が気にしているという話も出でています。これは織田信長が武田勝頼を破ったという戦いです。その戦いの最中なので、このような時期に自分だけ酒の席にいるのはいかがなものかと述べて、その席には顔を出さなかったようです。これらのことから、光秀は信長に対する忠誠心が強かったということがわかります。もう一つは光秀には自分なりのルールがあり、そのルールに基づいて行動していた様子がこのことから伺えます。この後、島津家久は坂本城を見学します。そして、城の蔵に薪が積み重ねてあるのを見てびっくりしたとあります。こんなに燃料となる薪をたくさん貯蔵していることに驚いたわけです。さらに、家久が宿に戻ると光秀から贈り物が届いていたと書いてもあります。

この史料から、明智光秀が、会食の場を設け、プレゼントを贈るなどいろいろなことをして、島津家久をもてなそうとしていたことがわかります。つまり、光秀が気遣いと言いますか相手を喜ばそうとすることができる人物であったということです。

この頃、明智光秀は京都の代官になり大名として

の仕事もしていますし、武将としても活躍しています。

天正 10 年、安土城で徳川家康にもてなすための料理を出すよう織田信長に命じられました。このことから、光秀は、おもてなしについてもたいへん詳しい人物であった考えられます。とても多彩な能力を持った人物です。

光秀について、この後のことをお話していきたいと思います。史料 4 は奥村源内に宛てた明智光秀の書状です。これは、滋賀県の高木叙子先生が紹介されたものです。

天正 3 年、この書状は、大雑把に説明すると、「明智光秀が築城した坂本から琵琶湖をはさんだ対岸に近江八幡という町があり、当時の地名は津田といいます、坂本と船で行き交っていたこの町のことで聞きたい」と書いてある、明智光秀が奥村源内に宛てた書状です。このことからわかるとおり、光秀という人は、他者の所領であってもいろいろな地域について、一生懸命、情報収集していたことがわかると思います。

もう一つ、吉田社の小姓与次事件というのがあります。これは、現在の京都大学のある所に吉田山という山があり、その山の吉田社の小姓与次が姿を隠すという事件です。この事件を明智光秀と親しかった吉田兼見という人物が『兼見卿日記』という日記に書き残しています。日記の中には光秀について詳しく書かれています。

この事件について説明します。

天正 7 年 2 月 22 日、兼見自身が譜代契約した、つまり雇っていた小姓の与次という若い人物が、兼見のもとから姿を消して逃げてしまったという事件があったということです。この男、与次は志賀郡の雄琴の出身だということで、多分、その地に隠れているのではないかと兼見が問題視するわけです。また、この地を治めているのは明智光秀がありました。そこで、兼見は明智日向守光秀のもとを訪ねまして、小姓の与次を探してほしいとお願いしました。兼見は契約を結んだにもかかわらず、逃げてしまったので怒っていました。兼見は契約書一式を持参して光秀に説明したので、光秀も納得し、与次という人物の探索をすることを兼見に約束しました。当時、明智光秀は、すでに丹波攻めをしている頃で、とても忙しい状況にありました。光秀のもとで雄琴の代官だった大中寺という人と川野藤介という人が与次を捕まえて連れてきたということです。兼見はたいへん怒っており、勝手にいなくなつたと

いうことで成敗してやると言っていたのですが、光秀の部下であった代官の 2 人が命だけは助けてやってほしいとお願いしまして、兼見は代官の言葉を受け入れ、命を助けることになったということです。この事件があった頃、光秀は丹波八上城攻めの最中で丹波にいたため、お願いしていた与次を捕まえてくれてお世話をしたという札状をつかわしたということです。

以上のことから、この日記の内容は、この頃、明智光秀が近江の志賀郡というところで、信長のもとで、領主みたいな仕事をしていた証拠であります。行方不明になっていた人を探し、しかも、見つけ出すことができたということですから、これらのことから考え、光秀は、この地域に密着して、この地域を治めていた様子がよくわかります。吉田兼見は江州に領地を持つ家であると書いていることからも、この地が光秀の領地であるという認識が吉田兼見にもあり、光秀に与次の探索をお願いしたということです。つまり、志賀郡の雄琴は光秀の領地だと認識されていたということです。この史料は、光秀の坂本、志賀郡の支配というのがかなり進んでいた証拠です。

よって、この当時、明智光秀は、坂本の支配と京都の代官としての仕事の両方をやっていたのであります。その後、京都の代官として仕事は途中で終わりまして、その次に出てくるのが丹波攻めです。天正 7 年には八上城の波多野氏を攻略し、黒井城も攻め落とします。丹波を完全に征服するわけです。

明智光秀は、現在は亀岡市という名前になっています丹波亀山と、もう一つは福知山に拠点としての城郭を構えます。このようにして、丹波地域の北と南に、ちゃんと城を構えて拠点としたわけです。天正 7 年から、光秀は、京都を挟んで近江志賀郡とその反対側の丹波地域を治めていることになります。そうした中、一旦、戦が終わり平和になった後も、光秀は坂本城や亀山城の普請を推し進めます。さらには、福知山城を築き、周山城とか黒井城も普請をどんどん続けています。なかでも坂本城は、対外的な戦が続いていたにもかかわらず、城の拡張を行っています。

史料 5 は、天正 9 年 12 月 4 日、明智光秀が定めた家中法度の写しです。この史料について、お話を進めています。

まずは、この写しの読み下し内容を説明すると次のとおりです。

明智光秀が丹波にいるお百姓さんを坂本につれていき、坂本城の石垣普請の仕事を手伝わせるという

ようなことがこの頃ありました。お百姓など田んぼで働いている人達は屈強で暑さにも強いです。そこで、このようなお百姓さんを集めまして、強制的に坂本へ連れて行くといったことがあったようです。丹波の人を坂本の手伝い普請させ、終わったら丹波へまた帰って行くということが行われていたということです。このようなことが天正8年、9年頃にかけて行われていました。

今見ていただいている史料の②を見てください。

ここに、この丹波と坂本の通り道について書いてあります。丹波の方から行くときには、紫野、大谷あたりから白河を通り、京都に行くというルートをとったようです。京都の町の北西のあたりに船岡山という山がありますが、この山のすぐ北側が紫野と呼ばれていた地区です。丹波から京都に登っていく際のルート、長沢街道というルートがありますが、この紫野の周辺はこのルート上にあります。このルートだと、京都の中心地を通らずに白河を通り、坂本、現在の大津に出て行くことができます。帰り道の汁谷という所は、現在の大津から国道1号線で入っていく所、坂本から大津市逢阪を越えて京都に入していく所です。だいたい、このルートをたどり丹波から坂本城の石垣普請に動員され連れて行かれました。そして、坂本でお手伝いの仕事をして、また丹波へ帰っていくということです。以上のとおり、このルートは京都を迂回するようになっていることがわかります。

次に史料5の③で「洛中洛外、遊興見物停止之事」と書いています。これは、丹波の人達が明智光秀の命により坂本城の石垣普請に行くときに、「せっかくだからついでに京都でお寺などを見物しよう」ということにならないようにするために、光秀が遊興見物を禁止したということです。京都の近くに行くので、みんな見物に行きたがるのを光秀が禁止したことです。光秀が、坂本城の石垣普請に行く丹波の人達を、洛中にだけは入らせないように京都の周辺を通り、丹波と坂本を往復させたということです。

当時、織田信長の周辺には、信長に特に取り立てられた部将たち、宿老たち、柴田勝家、羽柴秀吉、滝川一益、丹羽長秀、そして明智光秀がいます。また、それとは別にお側衆であった森蘭丸など直属の武士がいます。当然、光秀の命を受け坂本城の石垣普請を行っている百姓が途中でこれらの部将の家来と出くわすことがあります。そのとき、ちゃんと挨拶をすればいいのですが、ちゃんとできなかつたらどうしようかということが史料に書かれています。戦国時代や江戸時代初期、相当なレベルにあった武将の

家来同士の喧嘩があり、果たし合いになることがありました。光秀は、こういったことを防ぐためにも③のルールを作ったのではないかと考えます。

次は、史料5の④の部分についてです。「御座所分に対し頗る程近くにより」と書いています。御座所というのは信長のいる場所という意味です。つまり、その御座所で、「ゴタゴタ」や「いざこざ」が起こつたりしたならばとても困るので、そのようなことがないようにという法令を出しているわけです。信長は信長で、自分のそばでそのようなことがないように言っています。以上のことから、その信長の言葉を踏まえて、自分でこのようなルールを決めて物事を進めていくという実直な明智光秀の様子がわかります。明智光秀は織田信長を強く意識していたということです。

最近の織田信長の研究では、信長が領地をたいへん大きく広げ全国統一を進めていたわけですが、信長自身がすべてを決めていたかどうかという問題が議論されています。羽柴秀吉や柴田勝家といった有力部将たちが、それぞれ巨大な権限を握っていたのではないかという議論です。柴田勝家は北陸で、羽柴秀吉は中国方面で、権限を持ちながら前線で戦っていたということです。一方、当時、明智光秀は近畿地方で戦いをしています。その近畿地方には信長がいる信長のお膝元なので、光秀は信長を強く意識してこういった法律を出したわけです。光秀以外の信長の部将は、京都にいないので、それぞれが治めている所で法的なことを決めています。困ったことに、本当は信長が決めなければいけないのに、それぞれの部将が信長を超えて、武将自身が決めているわけです。しかし、明智光秀の場合は、すぐそばに信長がいますから、法律を作ったが、やっぱり信長を立てなければいけないと考えていたということです。その結果、法律の最後に「堅く申し付けるべし」という表現になったと考えられます。まだまだ、たいへんだった当時の信長の状況から見ると、信長と光秀の間の関係はかなり深まっていたのだろうと考えられます。逆に言いますと、信長は自分で独断的に法律を作ったり、また、官僚制度を構築したりできなかったのだろうかという疑問が湧いてきます。当時、それだけ明智光秀とか羽柴秀吉の権力が強かったということだと思われます。明智光秀は志賀郡という場所、信長の側近くにいて、丹波も治め、戦も強く活躍していたことがよくわかると思います。

明智光秀は、法律を作ったりする他に人夫や兵を差し出させるもととなる土地の情報を集めています。土地の所有、知行の情報をすべて把握して、普

請にかかる人足や兵役を課す人数を算出することができました。このような経過を辿り、権力の握り方について光秀はちゃんとわかってきていました。だんだんと、光秀は、気をつかったりするような人物から命令を出す人物になっていきました。

最後に、史料6、明智光秀書状「真田家文書」を見てみることにします。

これを見ますと、志賀郡という自分の以前からの領地と丹波地域の両方を一体的に統治しようとしていた様子がよくわかると思います。この時期になりますと、明智光秀は、領地の住民に言うことをきかすために、かなり高圧的になっています。人夫を無理やり動員するための文書を出すなどといったことから、このことがわかります。以前には、周囲に気を配りながら領地経営をしていましたが、特に、土地の主、国衆たちをまとめあげて味方にしていた時代から、やや強圧的なっていった光秀の変化が見て取れます。天正8年ぐらいから天正9年ぐらいにかけて、光秀はガラッと変わっていきます。

その頃、信長が飾り物のような存在となって、実際には、光秀が実務的なことをすべて行っているといったことを人から聞くに及び、光秀自身が織田政権の屋台骨を支えているのは自分であると多分思ったのではないかでしょうか。そのことがもとで、織田信長と明智光秀の対立が生まれてきたのではないかと思います。

天正10年6月2日、本能寺の変が起こり、明智光秀は織田信長を倒します。

その後、信長を倒した光秀は、現在の滋賀県である近江、特に彦根の周辺の国衆たちを味方に引き入れ、山崎の合戦を戦います。本能寺の変では丹波衆が主体となって信長を倒したのですが、天正10年6月13日の山崎の合戦では、近江衆である阿閉、池田、後藤、多賀、久徳、小川などが参加していることが太閤記に出てきます。丹波衆では、並河氏以外の7人の武将たちが参加したと言われていますが、詳細はわかっていません。

結局、山崎の合戦で、明智光秀は羽柴秀吉に勝つことができず、敗れていきます。そして、山中で殺されていくことになります。その結果、光秀の近江の支配も丹波の支配も終わっていくことになり、この両方の地域を、その後、羽柴秀吉がすべて奪っていきます。つまり、丹波地域に羽柴秀吉が入り、丹波の支配を進めていくわけです。

最近の研究で、明智光秀の丹波における家臣たちが秀吉のもとで活躍するということがわかってきています。そういう意味では、明智光秀が目指して

いた道と羽柴秀吉の目指していた道はかなり近かつたのではないかと思っています。そこで、明智光秀研究というものを領国経営といった視点からもう一回、見直すのがいいのではないかと思う次第です。

今日は、光秀の近江の国時代と丹波の国時代の様子を説明させていただきました。

ご清聴ありがとうございました。



【第3回 福島 克彦氏 資料】

近江時代の明智光秀 20201010 丹波の森公苑 城郭談話会 福島 克彦

はじめに

天正10年(1582)6月2日、本能寺の変 主君織田信長を倒す。

同年6月13日 山崎合戦で羽柴秀吉に敗れ、山科で殺害される。67歳(『当代記』)。

近江時代の光秀(志賀郡・京都代官時代→滋賀郡・丹波支配時代)

1 光秀の出自とその飛躍

(1)美濃出身

光秀文書 約170点確認できる。ほぼすべてが永禄11年(1568)9月の織田信長・足利義昭の上洛以降である。『明智軍記』「五十五年ノ夢」辞世の句→享年五五歳/『当代記』→六七歳。そうであれば永正12年(1515)頃に生まれた。光秀には「濃州親類」があり、それが山王社敷地に「新城」を築いた際、不快なことが起こるため、地鎮の祈念を依頼した(『兼見卿記』元亀3年12月)。

(2)越前に住む

同念上人『京畿御修行記』(寛永7年<1630>筆写)

「惟任方もと明智十兵衛尉といひて、濃州土岐一家牢人たりしが越前朝倉義景を頼み申され、長崎称念寺門前に十ヶ年居住」

『光源院殿御代当参衆并足軽以下衆覚』(『永禄六年諸役人引付』)「足軽衆」に「明智」がいる。

「細川ノ兵部太夫(藤孝)カ中間ニテアリシヲ引立之」(『多聞院日記』天正10年6月17日条)

(3)近江との関わり

[史料1]『針葉方』

(前略)

一、同付薬 セキソ散 越州朝倉家之薬也

巴(芭)蕉ノ巻葉霜 スイカツラ霜 黄檗霜 山桃実 同皮各霜

(中略)

右一部、明智十兵衛尉高嶋田中籠城之時、口伝也、本之奥書此の如し、

此一部、沼田勘解由左衛門尉殿より大方相伝え、江州坂本に於いてこれを写す、

永禄九拾廿日 (米田)貞能(花押)

(後略)

→永禄9年10月に筆写された。永禄8年以前に光秀が近江田中城(高島市)に籠城している。朝倉氏による薬剤開発。京都上洛以前から籠城を指揮するような武将となっていた。

田中城は、後に対浅井の拠点となり、光秀も入城している。

(4)織田信長との接触

永禄11年7月頃、信長、越前の義昭らを招聘。この頃、光秀も信長と接触か?

永禄11年9月、織田信長は足利義昭を奉じて上洛。

以後、光秀は信長の家臣団(奉行衆)、室町幕府奉行人らと京都周辺の政務、治安を担当。

義昭と信長の中間的な存在でもあり、永禄13年1月23日の条書(『成瀬堂文庫所蔵文書』)。

將軍義昭の権力を制約

2 光秀の志賀郡経営

(1)志賀の陣から比叡山の焼き討ちへ

永禄13年頃、義昭、信長は禁中の修理、將軍の「御用」、「天下静謐」のため、畿内・近国の武家に「参洛」を求める(『二条宴乗記』)。越前の朝倉義景は従わざ→同年4月、信長の越前攻め、突然近江北部の浅井長政が朝倉方へ寝返る→6月に姉川合戦、朝倉・浅井軍退却→9月大坂本願寺、三好氏と朝倉・浅井が連携、朝倉・浅井軍が湖西路を南下、信長・義昭を挟撃(志賀の陣)→朝倉・浅井軍、山門(延暦寺)の後援を受け「青山」に陣取る。信長と対峙→11月、信長の堅田攻めが失敗→12月、両軍の和睦。山門と信長の対立はぐくぶる。

元亀2年(1571)1月より信長が部将たちを近江南部の城に配置。

→光秀には近江志賀郡を与え、宇佐山城(大津市)に入らせた。

[史料2]9月2日付、和田秀純宛、明智光秀書状(『和田家文書』)(以下、読み下し)

(猶々書)

尚以て、てつほうの玉葉一箱參り候、筒之事ハ路次心元なく候間、之を進せず候、八木帰られ候時遣わすべく候、返々愛宕權現へ今度之忠節、我等に対し候てハ無比之次第候、入城之面々よく名をかきしるし候て来られるべく候、又堅田よりの加勢之衆、両人衆の親類衆たるべく候か、左候共、此方への忠節あさからさるよし、よく申し届けらるべく候、又此方加勢之事、三人之内に一人づゝ人数を副へ、かわり/\ニ置くべく候間、その分別かん用(簡要)候、万々目出度き推量あるべく候、八木に對面候て満足、書中には申し得ず候、以上、

(本文)

御折辱拝閲せしめ候、当城へ入らるる候由尤も候、誠に今度城内之働き古今有間敷儀に候、①八木方にあひ候てかんるい(感涙)をなかし候、兩人覺悟を以て大慶施面目迄に候、加勢之儀、是又兩人好次第に入れ置くべく候、鉄砲之筒并玉薬之事、勿論入れ置くべく候、②今度之様躰、皆々兩人をうたかひ候て後巻なとも遅々の由候、是非なく次第に候、人質を出候上にて、物うたかひを仕候へは報果次第に候、石監・恩上江罷り上る候時も、うたかひの事をはやめられ候へ之由、再三申し納め候つる。案之ことく別儀なく候て、我等申し候通、あひ候て一入満足し候、次でをさなき(幼き)ものゝ事、先登城之次二同道候て上げらるべく候、其間八木は此方に逗留たるべく候、弓矢八幡、日本国大小神祇我々うたかひ申ニあらす候、③皆々くち々々に何歟と申し候間、其くちをふさき度候、是非共両人へハ恩掌之地遣わすべく候、望之事きかれ候て、越されるべく候、仰木之事は是非共なてきりニ仕べく候、頓て本意たるべく候、又只今朽木左兵衛尉殿、向より越され候、昨日志村の城□□ひしころしこさせられ候由、雨やミ次第、長光寺へ御越候て、惣人数□□□□□謹言、

明十兵

九月二日 光秀 (花押)

和源殿

この書状の6日後に焼き打ちが起こる。光秀が着実に土豪の切り崩し政策を進めていた。

- a 土豪懐柔の難しさ→味方の説得も必要性、後巻、鉄砲・火薬の支給の遅れ
- b 感涙を流す、疑う者の口を塞ぎたい→土豪の立場にたつ書き方

(2)坂本築城と琵琶湖の掌握

- ・元亀3年(1572)閏正月6日、光秀、琵琶湖沿岸に坂本城を築く。いた。同年12月に「城中天主作事」(『兼見卿記』)。洛東の土豪たちが、光秀の与力に入る。
- ・光秀は浅井方を水陸両面から攻撃し、7月24日には堅田(大津市)の猪飼昇貞とともに「囲船」と呼ばれる軍船で、湖北の漁村や竹生島を大筒や鉄炮で攻撃(『信長公記』)。
- ・元亀4年(1573)、義昭が信長と対立、朝倉・浅井と手を結ぶ。

2月14日、光秀、朝倉・浅井軍の南下を木戸(大津市)で食い止める(『革嶋文書』)。さらに蜂起した堅田の町を囲船で湖上から攻撃して、これを制圧した。

朝倉・浅井軍の南下で、かつての元亀元年の戦いのように「青山」に陣取るのではないかと人々は噂した(『尋憲記』)。信長は先年(元亀元年)の義景出勢の時は高島郡・志賀郡の「此方之城宇佐山一城」のみだったが、今は「城々堅固ニ申付候上者、輒ち出馬候ハん事不実ニ候」と述べている。志賀郡に複数の城を持っているため、義景の南下は無理だろうと分析した(『細川文書』)。光秀の志賀郡統治は、信長に評価されていたことになる。

2月の堅田の戦い→18人の「討死之輩」の供養米寄進状を送る(『西教寺文書』)。

- ・堅田の土豪猪飼昇貞を麾下に置く→琵琶湖の水運や漁業を統轄していた土豪であり、織田権力もその実力を見込んでいた。光秀の配下になった後も、琵琶湖における権限が維持され、独立性を持った与力ともいべき存在。

昇貞の嫡男である半左衛門秀貞は、天正8年(1580)に「明知半左衛門」と名乗り、茶会に参席する。「片田之いか牛事」(『津田宗及茶湯日記』2月4日条)。

光秀は天正3年7月に朝廷から賜姓を受けて「惟任日向守」と称した後、服属した土豪に明智名字を付与する事例が散見される。

[史料3]『中書家久公御上京日記』天正3年(原文) 薩摩島津家久の旅日記

5月14日

(前略)

から崎の一松一見し、①坂本の町に一宿し、五月雨の晴方ほど有て、月隈なく湖水に移風、時雨になと申あへり処ニ、其うしろに舟さし著、明智殿參会有へき由有之間罷出、紹巴・行豊など同舟、其儘明智殿城を漕まハリみせられ候、其舟ハたゞミ三重敷計の家を立られ候、面白くて其板ふきの上に登り、猶廻る盃あくことなくこそ、当舟よりおり、明智殿へ同道にて舟の内みせられ候、

5月15日

(前略)

明智とのより、城へ来るへく申され候へ共、斟酌候へは、麓に明智との下候てめしたへさせられ候、当座の衆、紹巴・明智殿・行豊・堺衆大炊助・拙者ともに五人、当種々の会尺、②座ハ四帖半、茶をと候へ共、茶湯の事不知案内にて候まゝ、唯湯をと所望申候、さて庭の竹一むらの陰に蓮を敷、それにて御酒肴有ニ、朝倉の兵庫助といへる人々かゝり候、敷返、それよりよし生々とて水海の鮒・鯉・むつ・はへなどを蘆の中へ紐にてよせ、軽而竹あめるすをまろくたて、其中にて魚をくみあけ候へハ目さましき事也、③さて明智殿ハ織田との東国の陣立の程なれハ、なくさミのかたハ如何とて来られず候、さて其より風呂の前に舟捍付候へハ、明智とのさし出られ、風呂にてさうめん、始の鮒・鯉など肴にて酒肴、当紹巴発句、四方の風あつまりて涼し一松、脇明智殿、浜辺の千鳥ましるかるの子、拙者第三と候へ共、斟酌いたし罷立候、其より和田玄蕃(惟長)など同心候て、④亦城の内一見、さて城のたくハハ、其々の倉、薪などまと積置候事、言の葉におよハす候、さて舟に乗、明智殿いとまこひ仕、元の宿のうしろに舟おし著、少やすらふところに、明智殿より紹巴までとて、拙者ニかたひら三ツ、宇治の名布とてもたせられ候、きなれ衣の旅やつれを見およはれ候かとこそ、当舟出候らハ、跡にかた田、其前に真のゝ入江、さてむかへ鏡山、三上のたけ、水茎の岡、やすの川、山田、やはせ、当、あハ津の森の前二舟をさしよせ候へハ、其所の人

は紹巴へすゝをもたせ来候ろさひ申候、さて、せたの長橋、亦から橋ともいへり、其次ニ舟橋、軀而石山世尊院へ参、風呂ニ入、あるしまうけ様々、夜入て兒若衆こうたなとうたひ、酒宴あるに、十二三計の若衆、小歌などを舞廻られ、其興をもよほされ候、

- a 島津家久が、明智光秀に坂本城を来るよう誘われる。
- b 茶湯にも誘われるが、家久は不案内ということで、湯のみを所望
- c 織田信長の東国陣立(長篠合戦)を気にしている光秀
- d 坂本城内の見学、倉に薪が積み置く様子
- e 城下の宿の後に舟が着岸できる景観

→光秀の人間性が良く出ている箇所

[史料4]6月14日付、奥村源内宛、明智光秀書状〔益田文書〕 読み下し

わざわざ申しせしめ候、①仍て津田・賀茂・たなかい浦・木浜之下にて候や、比叡辻ニ木浜之舟役を取り候ニ付而、彼三ヶ村も木浜同前之由訴訟候、左ハ有間敷儀歟と存じ候へ共、案内無く之義候間尋ね申し候、前々の如く有様ニ申し付けるべくと思候うて尋ね候間、懇ろに御書付候て、これを給うべく、惣別木浜境内、何方より何方までにて候や、具に示し預けるべく候、②次に今度は東国に於いて各御高名御浦山敷候、其元御隙候ハ々、ふ斗御出津待入候、恐々謹言

六月四日 光秀(花押)

「 明十兵

(墨引) 奥源 光秀

奥村源内→野洲郡、栗太郡の土豪 その後も光秀との関係は続く。

②東国出陣→長篠合戦、佐久間信盛の与力として参陣する。

湖東の村落:津田(近江八幡市)、賀茂(近江八幡市)、田中荘(守山市・野洲市)、八幡(近江八幡市)、木浜(守山市)、木浜の舟役(湖東と湖西との交流) ①琵琶湖対岸の集落

湖西坂本:比叡辻(大津市坂本)

(3)吉田社の小姓与次逐電事件

天正7年2月22日、兼見が譜代契約した小姓与次なる人物が兼見のもとから逐電した。彼は志賀郡雄琴(大津市)出身であることから、その地が「向州(光秀)領知内」であるため、23日には坂本の光秀の元を尋ねた。兼見は与次の契約一式を持参して説明すると、光秀は納得し、彼の探索を約束している。翌24日、光秀の使として、山中集落出身の磯谷新介が兼見の宅を訪れて、小姓与次の在所へ向かうと告げている。探索の結果、3月15日には「雄琴之代官」たる大中寺と川野藤介が与次を召し連れてきた。彼ら2名は与次の赦免を求めた。「成敗」すべきと思卷いていた兼見も、これを受け入れ与次を赦した。与次を召し連れた際、光秀は八上城攻めのため、丹波国多紀郡に在陣していたため、現地へ探索への礼状を遣わしている。

この一件を想起した時、吉田社の小姓与次なる人物の探索を短期間で成し得た点で、光秀による支配の進展ぶりを示している。また、雄琴の代官だった大中寺などが、光秀の在地支配の末端で機能していた様子もうかがうことができる。さらに複雑で錯綜した支配関係にある畿内近国において、「向州領知内」という共通認識が得られていたことも注目されよう。光秀は次第に信長に指示を仰ぐ奉行的役割から、自分で領国経営を判断できる立場へと登り詰めていたのである。

- ・坂本城 天主を持つ 船で行き来が可能。部下たちと茶湯の参加。
- ・坂本城下町の掌握 規模や機能は不明だが、光秀が城下の一角落を活用してもてなしができる。
- ・近江志賀郡=「向州領知内」 明智光秀の領地内と認識されていた。
- ・天正3年の丹波攻めまでは、京都御代官と兼務。

3 明智分国の完結性

(1)丹波攻略

天正3年(1575)～同7年→丹波八上城、黒井城を落とす

丹波支配へ 光秀-近江志賀郡、丹波の両方を治める。

(2)さらに続く坂本城普請

『兼見卿記』天正8年閏三月十三日条

「今日より惟日日向守坂本之城普請云々、丹州人数ニ罷り下る之由申し訖んぬ」とある。つまり、「坂原阿上三所神社所蔵大般若經 卷二三一」天正八年閏三月

「江州坂本において、惟任日向守殿城之石普請各家別に罷り立ち候畢んぬ」

[史料5] 天正9年12月4日付、明智光秀家中法度写「万代文書」読み下し

定家中法度

- 一、①御宿老衆・御馬廻衆、途中に於いて挨拶之儀、見かけてより其所之一方へ、かたつき、いんきんに畏れてとをし申すべき事
- 一、②坂本・丹波往復之輩、上は紫野より白河とをり、下はしる谷(汁谷)・大津越たるへし、京都用所にをいてハ、人をつかはし相調えすべくの事、付けたり、自身在京なくて叶わず子細等候ハ、其の理、案内に及ぶべくの事、
- 一、用所等申し付け、召し使う輩に於いては、洛中馬上停止の事、
- 一、③洛中洛外、遊興見物停止之事、
- 一、道路に於いて他家之衆と卒爾之口論、はなはだもって曲事也、理非ニ立て入らず成敗を加えるべし、但し時に至って了見に及ばず仕合せにをいてハ、其場で一命を相果たすべく事、

右意趣は、④御座所分に対し頗る程近くにより、自余に混じえず、思惟せしめ訖んぬ、万一不慮出来たらば、更に其の悔をあるべからず、所詮面々若党・下人已下、猶もって堅く申し付けるべし、もし違犯の輩に於いては、たちまち其科を行なうべし、八幡照覧、用捨すべからず者也、仍て件の如し

天正九年十二月四日 光秀(花押影)

a、「御宿老衆」「御馬廻衆」に対する儀礼 織田家部将の秩序

b、「坂本・丹波往復の輩」の存在。通り道の規定。坂本城普請の人夫の通行。

c、「家中」に対する強い認識/信長の「御座所分」も強く意識する。

・天正9年6月2日、家中軍法(『御靈神社文書』『尊經閣文庫』)の制定→石高に応じた軍役賦課

(3)近江志賀郡・丹波の一体感

[史料6]大中寺宛、6月11日付、明智光秀書状『真田家文書』

佐川・衣川・穴太三ヶ所之人足来ず之由、唯今奉行共かたより路次迄申し越し候、曲事之儀ニ候、明日ひる以前ニ来ず候らば、普請所くわたい(過怠)として一はい(一倍)あてへく候、其の意を得、夜中ニ成共人を遣わすべく候、志賀郡・丹州在々所々一人も残らず罷り出候処、彼三ヶ所参らず之儀是非なく次第に候、陣夫などニいて申すべく候、其も大形罷り出るほど、分別せしめ候、残る者共老若一人も残らず罷り出るべく由、早々申し遣わすべく候、恐々謹言

六月十一日 光秀(花押)

大中寺

右郷中

a、普請にかかる人足の徵発 やや強圧的

b、「志賀郡・丹州在々所々一人も残らず罷り出候処」という認識

志賀郡と丹波の近接性

天正7~9年の指出、軍法などによる法治支配が進展→強圧的な支配者へ

拠点的城郭の築城、一方で無理な人夫動員で田畠が荒廃する。

信長の中国攻め、四国攻め

4 山崎合戦と近江衆

天正10年(1582)6月2日 本能寺の変

丹波衆が主体となり、信長を倒す。

天正10年(1582)6月13日 山崎合戦

阿閉、池田、後藤、多賀、久徳、小川氏ら、近江衆の参陣(『太閤記』)

丹波衆は並河氏以外の七名の武将たち。

おわりに

- ・比叡山焼き討ちと坂本築城
- ・同じ宿老クラスの佐久間氏の与力、奥村源内に依頼 →配属が決定しながらも比較的自由に行動できる。
- ・近江と丹波の関係

[参考文献]

高柳光寿『明智光秀』吉川弘文館、1967年

高島幸次「近江堅田の土豪猪飼氏について」『日本仏教史の研究』永田文昌堂、1986年

黒嶋敏「光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚」『東京大学史料編纂所研究紀要』14、2004年

鈴木将典「明智光秀の領国支配」戦国史研究会編『織田権力の領域支配』岩田書院、2011年

池上裕子『織田信長』吉川弘文館 2012年

谷口研語『明智光秀』洋泉社、2014年、

高木叙子「近江八幡市益田家文書に含まれる中世文書十通について」

『安土城考古博物館紀要』22、2014年

藤田達生・福島克彦編『明智光秀-史料で読む戦国史』八木書店、2015年



坂本城跡

(明治23年地図を元に福島克彦作成)

第4回 本能寺の変を考える

東京大学史料編纂所 准教授 金子 拓

第5回講座の開始の際にお詫び申し上げたとおり、講義内容の収録について、丹波の森公苑の作業ミスにより講義内容の文章化が出来ませんでしたので、第4回講座については、資料のみの掲載とさせていただきます。

なお、講師である金子先生には何ら落ち度がないことを申し添えます。
たいへん申し訳ありませんでした。何卒、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

丹波の森公苑 文化振興部



本能寺の変を考える

金子拓（東京大学史料編纂所）

信長家臣としての光秀は、信長の目的である「天下静謐」のもと、それを実現・維持するため、京都の奉行や丹波攻略などにあたってきました。また、信長に対する尊崇も非常に厚いものがありました。

そんな光秀が、なぜ信長を討ったのか、それがわかる直接的な史料がないため、ここまでさまざまな理由が提示され、議論になっています。今回この謎に真正面から取り組んでみたいと思います。

●光秀謀叛の理由に関する諸説

谷口克広『検証本能寺の変』（吉川弘文館、2007年）

①怨恨（待遇上の不満）説：信長に対する個人的な理由

信頼感の欠如、侮辱、母の見殺し、国替えの不満、家臣としての将来への不安（秀吉の存在への意識・四国問題）

怨恨説の根拠とされる事件は全て江戸時代の俗書が創作したもので、歴史的事実ではない（呉座勇一『陰謀の日本中世史』）

②政策上の対立説：信長の悪政に立ち上がる

③精神的理由説：信長と性格的に合わなかった、ノイローゼ

④野望説：光秀はもともと野心家であり、自らも天下取りの野望を持っていた

⑤黒幕説：朝廷・足利義昭・イエズス会…

●光秀は信長に対して恨みが蓄積していたのか

むしろ信長への崇敬が直前まである【史料8】

天正10年正月の茶会【史料9】

ではなぜその後の半年のあいだに、主君を討つまでに気持ちが変貌するのか

●長宗我部氏への対応

石谷頼辰（石谷光政の養嗣子）・斎藤利三兄弟を通して、光秀が長宗我部元親（石谷光政の娘が正室）と信長との間を取り次ぐ

元親嗣子弥三郎に「信」の一字を与える【史料1・2】

信長の四国政策の転換：それまでは「手柄次第に切取」ってよいと任されていたのが、土佐と阿波南半分のみ与えるという条件に転換（三男信孝・三好氏の処遇）【史料3～5・7】
天正10年に入つてから

元親も5月になってようやくその条件を呑もうとしていた【史料6】

●那波直治・斎藤利三の処遇問題

稻葉一鉄（実はその子の貞通）の家臣だった斎藤利三・那波直治を光秀が召し抱える武田攻めの出陣中、信濃において貞通が信長に訴えたところ、信長は直治を稻葉家に戻し、利三に切腹を命じる

利三は猪子高就の取り成しにより死罪は免れ、そのまま光秀に仕える

【史料 10】堀秀政、稻葉貞通に直治の稻葉家帰参決定に安堵する旨を伝える

【史料 11】秀政、直治に、稻葉家復帰を祝うとともに、このことは信長の耳にも入っているので安心して下さいと伝える

3月頃に光秀と貞通の間で争いとなり、信長が裁定を下したのち、直治の身の振り方として、稻葉家に「堪忍分」（客分）として召し抱えられることが決まったのは 5 月下旬頃

●信長の光秀打擲

■那波問題が原因の打擲

【史料 13】寛文10年（1670）成立

「伝称」、信濃滞留中、髪を掴み、頭を膝下に押しつけ、手で打つ（なぜそうなったのかは触れず）

【史料 14】延宝8年（1680）成立

信長の直治返還命令を拒否、それに信長が激怒

髪を掴み敷居に当てる、爪が月代に食い込み流血

大禄をもらったうえにはそれなりの家臣団が必要と正論にて反論

アルコールハラスメント

【史料 15】天和 3 年（1683）以前の成立

信濃にて稻葉一鉄が信長に訴える、信長が直治返還・利三切腹を命じ

る猪子高就が間に入って利三の切腹はまぬがれる

信長の怒りは収まらず、「諏訪の拝殿」にて、髪をつかんで膝元に引き寄せ、二三回叩く
信長が光秀の身体を放したとき、その勢いで額を板にて打つ

諸大名の面前での出来事

顔に墨で髪などを描くいたずら

■それ以外の原因による打擲

【史料 16】江戸時代初期成立

信濃での「御折檻」、理由不明、状況不明

【史料 17】1590年代頃執筆

家康接待の準備中、「足蹴」にした

【史料 18】慶長12年（1607）までに成立

光秀の自慢による怒り、欄干に頭を押しつけ、叩く ※【史料 19】の類話

●家康接待役事件

家康の安土上洛、光秀の接待役（5月15 日～17日）

【史料 18】接待役解任、怒って用意したものを廃棄

「諏訪より以来信長の自分に対する態度が心配」「外聞もよくない」

【史料 14】

光秀が用意した魚鳥が腐っていたことに立腹し、膳などを踏み割る光秀はあらためて新しく魚鳥を用意

そこに西国出陣命令 → 「なされたきままのなされようなり」
(立腹して膳を廃棄したようなことは書かれていらない)

【史料 15】

馳走役の解任 → 立腹して用意したもの廃棄

●光秀謀反の原因

1月頃からあった対長宗我部氏の対応変化（5月になって元親がようやく了承し、取次の光秀の面目がつぶれる）

3月に起きた那波・斎藤問題、それによる打擲（5月になって直治稻葉家帰参）
打擲が多くの人の面前であった可能性（恥辱）

5月中旬の接待役交替

交替自体、西国出陣命令によるものなので、表面的には何ら問題ない（信長としてもそこに問題があるとは考えていない）のだが、光秀にとって、長宗我部問題・那波斎藤問題と打擲事件があって、一気に信長に対する憎悪が噴出

個々の事件は、それだけで謀叛の原因になるのか、またはあまりに劇的な（空想じみた）話なのでまともに取りあげられないできたのだが、それらが本能寺の変直前の5月に集中したことにより、光秀の憎悪が短時間に急激に高まり、その頭を冷やすような冷静な時間がとれないまま、大軍を率いての光秀の出陣、そして信長の少人数での京都滞在という偶然が重なったのではないか。

ほとんどあとのことを考えない突発的な事件

●謀反理由の説明

【史料 20】勅使吉田兼見と五日後に、「謀叛の存分を雑談」

【史料 21】協力者と頼んだ細川藤孝父子に対する事情説明

【史料 22】西尾光教への協力依頼 「父子悪逆天下の妨げ」

【史料 23】三日前の日付の書状では理由は書かれておらず（桐野作人氏は、これをもつて、まだ光秀は謀叛を決断していなかったとする…『明智光秀と斎藤利三』宝島社新書）

史料1 『土佐国蠹簡集』四

對「惟任日向守」書状令「披見」候、仍阿州面在陣、尤候、弥可レ被レ抽「忠節」事
簡要候、次字之儀、信遣レ之候、即信親可レ然候、猶惟任可レ申候也、謹言、

十月廿六日（天正六）

信長

長宗我部弥三郎殿

※從来は天正三年（本文書を収録する編纂物編者の見解）と考えられていた

史料2 『石谷家文書』

尚々、稻葉殿御兄弟中へも雖可レ令「啓上」候上、先書に得「御意」候間、

可レ預「御意得」候、追々可「申入」候、かしく、

去月十七日御札、一昨日拝披候、荒木（村重）為「御退治之儀」、至二摶州表

被レ出「御馬」、有岡一途可レ為「進速」之由、尤存候、粗風説付而、此中旬比
以「書状」申入□き、弥御取成奉レ頼候、抑弥三郎字儀、利三迄令「申候処」、御
披露を以被レ成下「御朱印」、殊更信御字拝領候、名聞面目不レ過レ之、誠忝
次第、是非無所可「申上」候、海上少相鎮候者、可レ遂「言上」候、先恭旨不取
敢「利三」（斎藤）まで以「飛脚」申入候、猶可レ預「御助言」候、阿州之儀、調略
不レ存「由断」候、可「御心易」候、委曲先書申達候間、不レ能祥（詳）候、
恐々謹言、

十二月十六日（天正六） 元親（花押）

石兵少（石谷頼辰） 人々御中

史料3 『信長記』卷十三（池田家本）

（天正八年）六月廿六日、土佐国令「補佐」候長宗我部、維任日向守執奏二而、
御鷹十六聯并砂糖三千斤進上、則御馬廻衆へ砂糖被レ下候キ、

尚々、頼辰へ不レ残申達候上者、不レ及「内状」候へ共、心底之通粗如レ此
候、不レ可レ過「御計」候、

史料4 『石谷家文書』

尚々、御朱印之趣も元親御ため可レ然候、向後までも惟日（惟任光秀）如
在を不レ可レ存之由も被レ申候間、行々静穩之筋目たるへく候、以上、

新歴（暦）御吉兆、珍重不レ可「休期」候、仍今度元親御請ニ御申ニ付而、則被
レ成「御朱印」候之間、重而頼辰（石谷）・仁首座下國候、弥始末可レ然様ニ、万
事御異見尤ニ存候、次湯治之事、於「御養性」者可レ然候、猶様子頼辰可レ被

申上「候、取乱候間、重而可「申展」候、恐惶謹言、

正月十一日（天正十）

利三（花押）

進上

空然（石谷光政） 人々御中

史料5 『寺尾菊子氏所蔵文書』

就下今度至「四国」差下上条々、

一、讃岐国之儀、一円其方可「申付」事、

一、阿波国之儀、一円三好山城守（康慶）可「申付」事、

一、其外両国之儀、信長至淡州出馬之刻、可「申出」之事、
右条々、聊無「相違」相「守」之、国人等相「糺思否」、可「立置」之輩者立「置」之
一、「可「追却」之族者追「却」之、政道以下堅可「申付」之、万端對「山城守」、
成「君臣・父母之恩」、可「馳走」事、可「為」忠節「候、能々可成其意」候也、

天正十年五月七日

（朱印）

三七郎（信孝）殿

追而令レ啓候、我等身上儀、始終御肝煎、生々世々御恩慮迄候、中々是非不レ及_レ筆墨候、

一、今度御請、菟角于レ今致_ニ延引_一候段、更非_ニ他事_ニ候、進物無_ニ了簡_一付而遲怠、既早時節都合相延候条、此上者不_レ及_ニ是非_ニ候歟、但來秋調法を以申上、可_ニ相叶_一儀も可_レ有_レ之哉と、致_ニ其覺悟_一候、

一、一宮を始、ゑひす山城・畠山城・うしきの城・仁宇、南方不_レ残明退申候、
応_ニ御朱印_一、如レ此次第を以、先御披露、可_レ有_ニ如何_ニ候哉、是にても御披露難_レ成、頼辰も被_レ仰候条、弥無_ニ残所_ニ存候、所詮時剋到来迄候歟、併多年抽_ニ粉骨_一、毛頭無_ニ造意_ニ処、不慮成下候ハん事、不_レ及_ニ了簡_一候、

一、此上にも 上意無_ニ御別儀_一段、堅固候者、御礼者可_ニ申上_一候、如何候共、
海部・太西両城之儀者、相抱候ハて不_レ叶候、是ハ阿・讚競望之ためニハ一向ニあらす候、たゞ当國の門に此両城ハ抱候ハて不_レ叶候、爰ニ御成敗候へ
ハとて、無_ニ了簡_一候、

一、東州奉_レ属_ニ平均_ニ之砌、 御馬、 貴所以_ニ御帰陣_一同心候、

一、何事も_ニ頼辰可_レ被_レ仰談_一候、御分別肝要候、万慶期_ニ後音_一候、恐々謹言、

五月廿一日（天正十） 元親（花押）
利三御宿所

史料7 『元親記』中『続群書類從』第二十三輯上

信長卿と元親被申通事、付御朱印の面御違却の事
信長卿御上洛以前より被_ニ申通_ニし也、御奏者は明智殿也、又明智殿御内斎藤内蔵助は、元親卿為には小舅也、明智殿御取合を以、元親卿の嫡子弥三郎実名の御契約を致す、此時元親よりの使者に、賀見因幡守と云者罷上る、進物は長光の御太刀・御馬代金子十枚・大鷹二連也、則信と云御字を給る、依_レ之信親

史料8 『個人藏文書』（明智光秀）七〇号

尚以、先日者見事之ふとん給候、如_ニ一覽_一、則

上様へ進上申候、我々着座候つれ共、余ニ結構之物不似合候条、備_ニ上覽_ニ、
上旬大坂面可_レ為_ニ御動座_一を被_ニ仰出_一候、万端止_ニ私用_一、御用意義、具に一廉可_レ有_ニ覺悟_一候、無_ニ由断_ニ可_レ被_ニ入精_ニ事肝要候、恐々謹言、
阿波を打捨上る、已に元親卿運を開き給ひし也、

十一月三日（天正四年） 光秀（花押）

と云し也、其為_ニ御祝儀_一、信長卿より左文字の御太刀、鞘は梨地、金具分は後藤仕也、御馬一疋栗毛拌領有、以_ニ此由緒_ニ、四国_ニ儀は、元親手柄次第に切取候へと御朱印頂戴したり、然處に、其後元親儀を信長卿へ或人さゝへ申と有聞及申處に、元親事西国に並なき弓取と申、今の分に切伐に於は、連々天下のあたにも可_ニ罷成_一、阿州・讃州さへ手に入申候はゝ、淡州などへ手遣可_レ仕事程は御座有間敷と申上と云、信長卿実もとや思しけん、其後御朱印の面御違却有て、予州・讃州上表申、阿波南郡半本国に相添可_レ被_レ遣と被_レ仰たり、元親四国御儀は、某か手柄を以切取申事に候、更信長卿可_レ為_ニ御恩儀_一に非す、存の外なる仰、驚入申とて、一円御請不_レ被_レ申、又重而明智殿より、斎藤内蔵助兄石谷兵部少輔を御使者に被_レ下たり、是にも御返事被_ニ申切_一也、就_レ夫四国への御手遣火急に御沙汰有、信長卿御息三七殿へ四国の御軍代被_ニ仰付_一、先手として三好正厳（康慶）、天正十年五月上旬、阿波勝瑞へ下着す、先一の宮塗山表へ取掛、両城を攻落す、三七殿は岸の和田まで御出陣と有、折斎藤内蔵助は、四国の儀を氣遣に存によつて也、明智殿謀叛の事弥被_ニ差急_一、既六月二日に信長卿御腹をめざるゝ、此註進堺より上之坊と云者来る、三好正厳も阿波を打捨上る、已に元親卿運を開き給ひし也、

2020年11月21日 本能寺の変を考える（史料）

津田備中守殿
津田利右衛門尉殿

謹言、

五月廿七日（天正十） 堀久太郎

稻葉彦六殿

※『稻葉家譜』は江戸時代後期頃成立か。

史料9 『天王寺屋会記』他会記

天正十年午正月朔日

上様御礼申上候、惣見寺通ニ罷上候、鳥目十疋ツ、各持參仕、直ニ御手へとら
せられ候而、忝次第也、

御幸之間おが見申候、堺衆ハ、宗久・宗易・宗一・宗及・宗薰、此分也、

惟任日向守殿・宮内法印（松井友閑）一番也、

和州衆順慶など、箸尾・越知參候、

従 上様、生鸞拌領イタシ候、

同正月七日朝 惟任日向守殿御会 宗一 宗及

一、床ニ上様之御自筆之御書、カケテ、

一、炉二八角之金、

一、床ニ八重桜之大壺、アミカケテ、

一、台子ノ上ニ長盆、大海、袋二、かたつき、袋二、二ツならべて有之、

一、台子下ニスヽノ蓋置、駅鈴、

一、カウライ茶碗 ふかきと、あさきと、二ツ重而、

珠光ノ龜ノフタ 三ツ置也、

宗及サラウイタシ候、一ぶく計光秀きこしめし候、

史料10 『稻葉家譜』四

今度那波与三方儀、以ニ上意被成御返候、然者為堪忍分、重而御扶助之由ニ候、可然御次而之間申上候処、尤之由御詫候、為ニ御意得申入候、將又久不申承候、御參之砌御尋可為本望候、旁期面上之時候、恐々

史料11 『稻葉家譜』四

態令啓上候、仍其方御身上之儀、従彦六殿内々被仰合候為筋目、
重而御支配之由承候、於我等令満足候、則御耳ニも立候間、時宜可心
安候、委細馬淵与右衛門尉可申入候、恐々謹言、

五月廿七日（天正十） 秀政判

那波与三殿

史料12 『稻葉家譜』四（地の文）

同年（天正十年）信長公伐甲州武田一家、平之、信長公帰于安土、此日一鉄於濃州六渡、驥信長公乗船俗云御座船、以献酒杯、時四月二十一日也、

是年、那波和泉直治、去ニ鉄家ニ而仕明智日向守光秀、光秀厚遇之、以為家臣、一鉄大怒曰、嚮不レ招利三、先レ是斎藤内蔵助利三従明智日向守光秀、今復招和泉、乃与光秀訟之於信長公、公命光秀、使和泉返ニ一鉄而、使内蔵助自殺、時猪子兵助、為光秀執達之故、内蔵助免レ死、仕于光秀如レ元、然信長公怒光秀背レ法、以召レ之、譴責而手自打光秀頭者至ニ三也、光秀鬓髮少故、常用附髪、此時被打落之、光秀深御之、叛逆原本発起于此、既而和泉帰于濃州、仕于一鉄如レ元、是時堀久太郎秀政贈書於貞通、其文曰（史料10に続く）

史料 13

『本朝通鑑後編』

信長定_レ「甲斐・信濃制法」、而令曰、我_レ欲_二覽富士山_一、自_二東海道_一帰_二安土_一、諸軍可下自_二東山道_一先帰上、

伝称、信長留_レ「滞信濃」之間、明智光秀・稻葉一鉄論_レ事、信長以_二一鉄所_一レ言為_レ有_レ利、光秀不_レ屈、信長怒、召_二光秀_一擗_二其髮_一、伏_二其頭於膝下_一、手打_レ之、良久而放_二遣之_一、〈光秀叛心萌_二於此_一〉

史料 14 『武辺咄聞書』

明智光秀逆心は心から不_レ起、皆信長公被_レ成たる事なり、或時酒盛有、七盃入の大盃を柴田勝家ひかへ居る、信長仰に、明智へさせと有、明智中々御免被_レ下候へと云、無理にさせと有故、勝家盃をさす、日向不_二存寄_一も被_レ下難しと侘る時、信長氣色損し、立かゝり、日向をうつふしにおしふせ、脇差をぬき、酒を可_レ呑か、若酒を不_レ呑は、脇差をのませんとせつかん也、日向無_二是非_一かの大盃にて酒を呑ける、其後稻葉伊予家人那波和泉・斎藤内蔵介を日向高知にて抱る、伊与方より断申せ共、不_レ返、其段信長聞給ひ、明智を召、早々伊与方へ可_レ返との怒りなれ共、不_レ請に付、信長せひて日向をとらへ、両の鬚をつかみ、敷居の上へあて、折檻の時、爪先日向か月代に入、血流る、日向申上は、三十万石の大禄を被_レ下候へ共、身の欲に不_レ仕、能兵を抱候は偏に御奉公の為也と申上る、其時信長、己脇指をさしたらは成敗致べけれ共、丸こしなれば命を助ると仰す、日向もやみく退出せし也、家康公穴山梅雪御同道にて安土へ御上りと有時、大宝坊を御宿所に定、御馳走は明智に被_二仰付_一、光秀山海の珍物を集め用意、信長は鷹野に御出、大宝坊へ御寄、御覽あれは、五月温氣故、魚鳥さかり匂ひ甚也、信長機嫌損し、わらちながらに拵置膳部以下、皆踏割、中々叱甚敷事也、日向迷惑し、又新敷膳部魚鳥を調集る所へ、毛利輝元備中口へ出張候間、明智事彼地へ被_レ遣候間、早々可_二罷下_一と有、日向大に

恨み、大分の支度用意させ、費を尽させ、又候哉西國立とは、被_レ成度まゝの被_レ成様也、此上は不_レ及_二是非_一とて、謀反弥究りし也、

史料 15 『忠興公譜』(熊本県立美術館所蔵)

○稻葉伊与守貞通入道一鉄之家来那波和泉守・斎藤内蔵助利三といへる兩人、家を立退て光秀に仕ふ、一鉄はなはた怒りて、信州におひて信長公に訴ふ、信長公尤也とて、光秀に下知し、和泉を一鉄の方へ返し送り、内蔵助に切腹を被_レ仰付_一ける、時に猪子兵助色々取成を申、御免を蒙り、光秀に仕へけるか、信長公猶御機嫌悪敷して、諏訪之拝殿にて光秀を御前に召れ、今から小身者の遣ふ奉公人を呼とらふかとて、髪束をつかみ、膝本へ引よせ、頭を二つ三つはり給ひしかば、御為にこそ高知をもくれ召抱候へ、畏奉り候と申されける時、御放し被_レ成、両の手にて肩をつゝと突しさりし給へば、間中あまり推やられ、額を板にて打たれける、諸大名のみる前なれば、無念かり給しとや、又或時ハ煩を出せとて、貞に筆をそめ、鬚など作給ひしとなん、(中略)

○天正十年五月十五日、家康公安土へ立越、信長公に御対面被_レ成し時、兼て奉行人に仰付られ、路次之船橋を修理し、大宝坊を宿と定め、光秀をして御馳走被_レ仰付_一しかば、光秀俄に仮屋を構へ、厩を立双へ、金銀を以て饗膳をかさり、器具を拵、待かまへらるゝ、折節羽柴秀吉公備中におはして毛利の輝元と対陣し、加勢を乞はれしかば、信長公より明智光秀等に仰付られしかば、家康公の御馳走を別人に云付、光秀を替らしむ、光秀腹立して、調置たる饗膳器具等を湖に棄しむ、

史料 16 『川角太閤記』

一、天正十年の年、信長公甲斐国武田の四郎勝頼を御追罰の其ために、江州安

土の御城より御馬を被^レ出候、但御先手は信忠公に被^レ仰付^一候、城之介殿は岐阜より御出陣なり、家康卿駿河口より御入被^レ成候、其外方々口々より飛入候得は、勝頼は甲府家城を被^レ明退^一、同国野里山林にて被^レ打果^一候、其後御仕置無^二残所^一被^レ仰付^一候、駿河国をは家康卿に被^レ進^一之候、同年四月初頃に安土の御城え御馬を被^レ納候、然るに家康卿は駿河国御拝領の為^一御礼^一、穴山殿を御同道被^レ成、御上洛之由被^レ聞召^一付、御宿には明智日向守御宿に被^レ仰付^一候處に、御馳走のあまりにや、肴など用意の次第御覽可^レ被^レ成ために御見舞候處に、夏故用意のなまさかな殊の外さかり申候故、門へ御入被^レ成候とひとしく風につれ悪き匂ひ吹来候、其かほり御聞付被^レ成、以之外御腹立にて、料理の間へ直に御成被^レ成候、此様子にては家康卿御馳走ハ成間敷と御腹立被^レ成候て、堀久太郎所へ御宿被^レ仰付^一候と、其時節の古き衆の口は右の通とうけ給候、信長記には大宝坊所家康卿御宿に被^レ仰付^一候と御座候、此宿の様子は「通に御心得可^レ被^レ成候、日向守面目を失ひ候とて、木具・さかなの台、其外用意のとり肴以下、無^レ残ほり^一打こみ申候、其悪にほひ安土へふきちらし申と相聞え申候事、

（中略）

一、日向守殿それより南え馬を乗出し、備へと一町半隔て、聟弥平次をよひよせ、五人の者ともに談合すへき子細候間、急き我前へ來候へとて、弥平次使に參候、以上五人被^レ召寄^一、此外あたりに一人も無^レ之、日向守殿はしやうきよりおり、敷皮をのへさせ、其上に居なをり、存胸申出す也、上様かほどに御取立被^レ成候儀は各被^レ存候通也、我身三千石の時、俄に廿五万石拝領仕候時、人一円に持不^レ申故に、大名衆の者ともよひ取候處に、於^二岐阜^一三月三日の節句、大名高家の前にて面目失ひ次第、其後信濃の上の諏訪にての御折檻、又此度家康卿御上洛のとき安土にて御宿被^レ仰付^一候處に御馳走の次第、油断の様に御しかり被^レ成、俄に西国陣と被^レ仰候条、数再三に及

ひ候上は、終には我身大事に可^レ及と存候、又つら^一事を案するに、右の三ヶ条の遺恨の次第、目出度事にもや可^レ成、世間うゐてんへんのならひ、一度はさか^一へ、一度はおどろふるとハよくこそつたへたり、老後のおもひ出に、一夜成とも天下の思出をすへきと、此程光秀は思切候、各無^二同心^一候ハ、本能寺へ一人乱入、腹切て可^レ思出す^一覚悟也、各いかにくと被^レ申しかは、（以下略）

史料17 『フロイス日本史』（第五十六章）

ところで信長は奇妙なばかりに親しく彼を用いたが、このたびは、その権力と地位をいつそう誇示すべく、三河の国主（徳川家康）と、甲斐国の主将たちのために饗宴を催すことに決め、その盛大な招宴の接待役を彼に下命した。これらの催し事の準備について、信長はある密室において明智と語っていたが、元來、逆上しやすく、自らの命令に對して反対（意見）を言われることに堪えられない性質であつたので、人々が語るところによれば、彼の好みに合わぬ要件で、明智が言葉を返すと、信長は立ち上がり、怒りをこめ、一度か二度、明智を足蹴にしたということである。だが、それは密かになされたことであり、二人だけの間での出来事だったので、後々まで民衆の噂に残ることはなかつたが、あるいはこのことから明智には何らかの根拠を作ろうと欲したかも知れぬし、あるいは「おそらくこの方がより確実だと思われるが」、その過度の利欲と野心が募りに募り、ついにはそれが天下の主になることを彼に望ませるまでになつたのかもしれない。

史料18 『祖父物語（朝日物語）』（続群書類從卷五十九）

信州諏訪郡何レノ寺ニカ御本陣可^レ被^レ置ト、其席ニ而明智申シケルハ、拵モヲハシマサス箇様成目出度事不御座、我等モ年来骨折タル故、諏訪郡ノ内皆御人数也、何レ

モ御覽セヨト申ケルハ、信長御氣色替リ、汝ハ何方ニテ骨折武刃ヲ仕ケルヲ、我社日頃粉骨ヲ尽シタル惡キ奴ナリトテ、懸造リノ欄干ニ明智力頭ヲ押附テ扣キ給フ、其時明智諸人中ニテ恥ヲカキタリ、無念千万ト存詰タル氣色顯レタル由伝タリ、（中略）御帰陣ノ後家康公御上洛ト申時、明智ニ御馳走被^レ仰付^タリ、忝ト申テ珍物ヲ調、京・堺ノ傘木履迄買切、夥敷用意仕タルニ、俄ニ變替、家康公御馳走余人ニ被^レ仰付^{タリ}、明智羽柴筑前守安藝ノ毛利ト対陣、難儀ニ及由注進有、急キ加勢ニ可^レ罷下ル^タ、横目三堀久太郎ヲ御差添へ被^レ仰出^タリ、其時明智思様、諏訪ヨリ以来御目見不^レ宜、今度御馳走ノ儀モ他人ニ被^レ仰付^タ、外聞モ不^レ然、腹立ニ存詰メ、御馳走ノ用意ノ調物モ安土ノ城下父力橋ノ下へ皆捨タリケル、

史料19 『信長記』卷六（池田家本）

（天正元年八月）十三日夜中ニ、越前衆陣所へ信長又被^レ成^タ御先懸^タ、被^レ懸付^タ候、然而度々被^レ仰遣^タ候御先陣ニさし向衆油断候て、信長之御跡へまいられ候、地蔵山を越候て、懸^タ御目^タ候へハ、數度被^レ仰含^タ候ニ、見合候段、各手前之比興曲事之由御詫之處ニ、信長へ^タされ申^タ、面目も無^タ御座^タ之旨、稻葉・蜂屋・柴田・瀧川・丹羽・羽柴初とし而、謹而被^レ申上^タ候、佐久間右衛門、涙をななし、さ様に被^レ仰候共、某程之内者ハもたれ間敷と自讚を被^レ申^タ、信長御腹立不^レ斜、其方ハ男之器用を自慢にて候歟、何を以て之事候、片腹痛申候哉と被^レ仰、御機嫌悪候、

※建勲神社本では「我々程之内之者ハ」

史料20 『兼見卿記』天正十年六月（別本）

七日、癸巳、至^タ江州^タ下向、早々発足、
申下刻下^タ着安土^タ、佐竹出羽守小性（新八）為^タ案内者^タ、召^タ真新八^タ令登

城、跡ヨリ予登城、門外三暫相待、以^タ喜介罷下之由日向守へ案内、次入^タ城中^タ、向州対面、卷物等相^タ渡之^タ、忝之旨請^タ取之^タ、予持參大房之鞶一懸遣^タ之、今度謀叛之存分雜談也、蒲生末罷出^タ云々、（下略）

史料21 『細川家文書』

覚

一、御父子もとゆい御拵候由、尤無^タ余儀^タ候、一旦我等も腹立候へ共、思案候程、かやうにあるへきと存候、雖^レ然此上者大身を被^レ出候て、御入魂所^レ希候事、

一、國之事、内々攝州を存当候て、御のほりを相待候つる、但・若之儀思召寄候ハ^タ、是以同前二候、指令、きと可^レ申付^タ之事、

一、我等不慮之儀存立候事、忠興など取立可申とての儀ニ候、更無^タ別条^タ候、五十日百日之内ニハ、近国之儀可^レ相堅^タ候間、其以後者十五郎（明智光慶）・与一郎（長岡忠興）殿など引渡申候て、何事も存間敷候、委細兩人可^レ申候事、

以上

六月九日

光秀（花押）

史料22 『武家事紀』三五所収文書

父子恩逆天下之妨討果候、其表之儀御馳走候て、大垣之城可^レ被^レ相濟^タ候、委細山田喜兵衛尉可^レ申候、恐々謹言、

惟日

六月二日

光秀（花押）

西小（西尾小六光教） 御宿所

※西尾光教は美濃安八郡野口城主。

史料 23 一五二九号 明智光秀書状写

猶以、去春歟、山喜迄御内状、毎事氣遣歡悅三候、

其以来、不レ能音問之、依遼遠互不レ任心底、所存之外ニ候、抑山陰道出勢之義被仰出付、於其面可レ有御入魂之由、誠以祝着候、南勘御内証之通、是又御懇意満足之旨、能々申入度候、隨山陽道毛利・吉川・小早川於〔取力〕出、羽藤対陣之由候間、此度之義ハ、先至彼面可レ相動之旨上意ニ候、着陣之上、様子見合、令〔変化〕、伯州へ可レ発向候、至其期別而御馳走所レ希候、猶以去年以来其許御在城、貴所御粉骨、南勘於度々御勵、彼是以御忠節無浅所候、委曲山田喜兵衛自可レ有演説候、恐々謹言、

惟任日向守

五月廿八日（天正十）

光秀在判

福屋彦太郎殿

御返報

現代語訳

それ以降連絡できませんでした。お互い離れた場所にいるため、思ったような意思疎通ができずに申し訳ございません。さて、山陰道への出陣について上様より命ぜられたにあたり、そちらで協力してくださること、ありがたく存じます。南条が内々示して下さっていたとおり、懇意にして下さるのは満足であることをはつきり申し上げたいと思っておりました。山陽道に毛利・吉川・小早川が出撃し、秀吉と対陣しているとのことなので、今回はまずそちらに出向くようになり、上様の命でありますので、そちらに着陣したうえで様子を見て、変化があつたら伯耆へ移動します。そのときはとくに「協力下さい」。去年以来そちらに在城され、粉骨の働きをされていることや、南条の度々のいくさにおけるあなたの忠節については浅からざるものがあります。詳しくは山田喜兵衛から伝えます。

追伸、春のことでしたでしょうか、山田喜兵衛まで書状をいただきました。気づか嬉しく思います。

※島根県立図書館所蔵『立原福原両家伝』を参照した。

第5回 山崎合戦と惟任（明智）光秀 ～本能寺の変後の主導権をめぐる動向～

東洋大学文学部 非常勤講師 柴 裕之

はじめに



皆さん、こんにちは。ただいま、過分なご紹介をいただきました東洋大学文学部非常勤講師の柴裕之と申します。本日は、年末にもかかわらず、また新型コロナウイルスの感染が懸念される世情のなか、たくさんの方々に受講いただき感謝申し上げます。本日の講座では、皆さんには、「山崎の合戦と明智光秀の最期」というテーマでお話しすることになっているのですが、少しだけ変えさせていただき、「山崎合戦と惟任（明智）光秀～本能寺の変後の主導権をめぐる動向～」というテーマでお話しさせていただきます。私のお話は、お配りしています資料に基づき進めさせていただきます。それでは、さっそく、お話に入らせていただきます。

1 本能寺の変の実態

まず、最初に押さえていただきたいことは、前回の講座で金子拓先生のお話があった天正10年（1582）6月2日に起きた「本能寺の変」です。本能寺の変とは、織田家の重臣であった惟任光秀の軍勢が主君の織田信長を討つ事件です。信長といいますと、戦国時代に「天下一統」を推し進めた政治権力者で、いまなお私たちを魅了し続ける「革命児」として知られる人物ではないでしょうか。もっとも近年、信長は彼が生きた時代・社会のなかでその「同時代人」としての「実像」が見直されている状況にあります。

さて、織田権力というのは、天下人信長のもとで国内の統合＝「天下一統」を進めていった、中央を押さえ活動した領域権力のことです。畿内の主要な中央部分に織田権力の勢力が及んでいます。また、それ以外にも、関東地方や中国地方の大部分、そして九州地方にも、実は織田権力の影響がおよぶ情勢にありました。この頃、織田権力に対抗していた存在は、越後の上杉氏、土佐の長宗我部氏、中国地方の毛利氏のみとなっていました。その他の大部分の勢力は、織田権力のもとでゆるやかながらも統制・従属が進みつつあるという情勢にありました。まさ

に、信長のもとで、「天下一統」が間近に迫っていた状況であったのです。

天正10年（1582）6月2日、その信長が惟任光秀に討たれてしまう事件として本能寺の変が起きました。そしてその後は、信長を討った光秀と信長の後を引き継いでいこうとする羽柴秀吉とが争い、勝利した秀吉がやがて天下人へと歩んでいくという、いわゆる秀吉のサクセストーリー（成功譚）として描かれてきました。ところが、近年の歴史学の研究では、秀吉が天下人となったことを前提とするのではなく、その時代に生きた人物や出来事に注目して捉えていこうという考え方方が生まれてきています。つまり、同時代の視点による研究であります。私たちは山崎合戦の結果やその後の動向を知っているわけですが、そのことを前提として、今回の講座のテーマである山崎合戦と惟任光秀についてお話しするのではなく、その時代の流れの中で、山崎合戦とはどのような戦いであったのか、そしてその中で、惟任光秀はどのような動きをしたのか、山崎合戦の勝者となった羽柴秀吉はその後どのように活動していくのかといったお話を本日はしたいと思います。

なお、本日の講座の主人公である光秀は、一般に明智光秀として扱われていますが、本日の講座では「惟任光秀」とすることにします。では、なぜ、惟任光秀とするのかといいますと、これには深い理由があります。それは、光秀がそれまで仕えていた室町幕府将軍の足利義昭と織田信長との関係が悪化した後、光秀が将軍義昭から離れ、本格的に信長の重臣となっていった際に、光秀は信長から織田家の宿老（家老）として位置づけられるとともに、惟任という名字（家の姓）を信長から与えられることになります。それ以降、亡くなるまで光秀は「惟任光秀」として生きていましたので、本日の講座では明智光秀ではなく惟任光秀と称することとするわけです。同じように、織田家の重臣でありました丹羽長秀という家臣がいますが、この人も信長から惟（これ）住（ずみ）という名字をもらい丹羽から改めています。そこで本日の講座では、丹羽長秀も「惟住長秀」といわせていただきます。さらに、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」にもでてくる細川藤孝ですが、この人も、それまで仕えていた將軍義昭から離反し信長に仕え、長岡という名字に変え、名前を「長岡藤孝」に改めます。このような名字の変更は、將軍義昭との関係を絶つといった意味も含まれていました。藤孝も信長のもとで活動していたときは、「長岡藤孝」と称していましたので、今回の講座では、長岡藤孝とさせていただきます。

それでは、以上のことと踏まえ、本能寺の変の実態についてお話しします。

まず天正10年（1582）6月2日に起きた本能寺の変は、一般的に、光秀が主君の信長を討った事件とされていますが、次のことと注目していただきたいのです。このとき討たれたのは信長だけではなく、信長の後継者として歩んでいた嫡男の信忠、さらには信長の側で日常仕える近臣や馬廻衆という親衛隊の多くが討たれています。このことから、信長を中心とした権力中枢に位置する人たちが討たれたということがみえてきます。つまり、本能寺の変は、単に信長が討たれたというだけでなく、織田権力の中核が討たれたというクーデターであったのです。

そのことを押さえてもらったうえで、織田権力の中枢を討った後の光秀がどのような動きをしたのかをみていきましょう。

本能寺の変のあった6月2日のうちに、光秀は、京都が鎮まつた状況を見届けた後、近江国、現在の滋賀県に向かいます。なぜ、近江国へ光秀が向かつたのかといいますと、そこには、皆さんもご承知のとおり、織田権力の中核拠点、信長の政庁であった近江安土城（滋賀県近江八幡市）があったからです。そして、光秀は、6月5日、安土城に入ります。

したがって、本能寺の変のポイントは2つ、1つが織田権力の中核の打破、もう1つが織田権力の中核拠点であった近江安土城を押さえることにありました。以上のことをふまえると、本能寺の変がなぜ起きたのか、みえてくるのではないでしょうか。変が起きた理由には諸説ありますが、織田権力内部の政争が関わっていたこと、それへの対応として織田権力中枢の打破と拠点の掌握であったと考えています。

当時の織田権力は急激な発展を遂げていくと同時に、敵対する勢力が生じていきましたが、その敵対勢力に対する対応をめぐって権力中枢において主導権争いが起きていたのです。そのなかで主導権を握ったものが権力中枢において発言権を持ち、一方、政争に敗れた側は立場や家の行く末（将来）が不安視される状況に追い込まれていったわけです。このような状況のなか、どうやら光秀も、担当していた四国政策に関係して、権力中枢において難しい状況に追い込まれ、どのように対応するべきか追い込まれた状況に置かれていたようです。そして、光秀は自分だけではなく家臣、また配属されていた長岡藤孝のような与力軍将なども含めて、どのように生き残っていくかという事態に追い込まれていきました。本能寺の変とは、そのような事態に追い込まれたなか

で、光秀と惟任家の重臣・斎藤利三らによるクーデターだったと私は考えています。

また本能寺の変は、信長と信忠という権力中枢のトップ、企業でいえば会長と社長の二人が同時に京都にいたということが実行への一番のきっかけとしてあったと思っています。それでは、はじめから二人が京都にいることになっていたかというと、そうではありません。実は信忠は、このとき畿内に来ていた徳川家康を観光案内することになりました。ところが、父の信長が京都に来るということで、予定を変え、信長を京都で迎えることにしてしまったのです。この結果、偶然にも、信長・信忠の父子が京都にそろってしまったわけです。そして、このときを、光秀及び惟任家の家臣たちは見逃さなかつたのです。もちろん、信長・信忠父子が京都にそろつたということは、彼らと日常行動をともにする権力中枢にいる人たちも京都にそろうということになり、その機会を見逃さなかつたということです。光秀率いる惟任家が偶発的なこのような機会を見逃さなかつたことから、本能寺の変は起きました。

ただし、このクーデターは信長・信忠の父子が京都にそろつたという偶発的な機会を優先して起きたため、信長から光秀に与力軍将として配置されていた長岡藤孝・忠興の父子ら、光秀と関わり深い人物らには事後承諾を得ることになってしまいました。

2 畿内の織田勢力の対応と羽柴秀吉の帰還

このように本能寺の変は、偶発的な機会を捉えたクーデターであったため、早急なその後の対応が求められています。まずは、各地で活動している織田家の諸将への対応が必要です。そこで、光秀は、かつての主君であった室町幕府將軍足利義昭や安芸の毛利氏、越後の上杉氏ら反織田勢力と連携していくことを模索していきます。そうしたなか近江・美濃両国では、凋落からの復権を試みていた京極高次や伊賀道足（安藤守就）、また若狭国でも、旧守護家の武田元明ら応じる勢力もみられました。

さて光秀が起こした本能寺の変というクーデターは順調に進んだのかといいますとそうではありませんでした。たとえば、6月2日に本能寺の変が起きますが、織田権力の中核拠点・近江安土城を光秀が押されたのは6月5日です。この間に3日かかっています。3日もかかってしまった理由ですが、それは、京都から近江国に向かう交通の要衝にあった瀬田橋を近江瀬田城（滋賀県大津市）の城主・山岡氏によって焼かれてしまったためです。このため、光秀は橋の修繕に日数を要してしまいます。こ

うして6月2日、光秀は信長・信忠父子を討った後、安土城を押さえるのに3日間も要してしまったのです。結果的には、このことが、その後の展開に大きく関わっていくことになります。

それでは次に、当時、光秀に対抗する勢力はどうであったのか、みていきましょう。

現在の近畿地方、当時は畿内といいますが、その畿内周辺には、織田信孝と惟住長秀の率いる軍勢が比較的まとまっていました。織田信孝という人物は信長の三男です。この時期、織田信孝や惟住長秀が畿内にいた理由は、本能寺の変がなければ、翌6月3日から四国に出兵する予定になっていたからです。彼らは、本能寺の変が起きた時、和泉国堺（大阪府堺市）の周辺にいました。したがって、比較的、京都に近いところにいたわけです。信長・信忠父子が討たれたという情報が入ると、信孝は、父と兄が討たれたということで、すぐに惟住軍の討伐に向かおうとしました。しかし、信長・信忠父子が討たれたという報せを受け、軍勢が狼狽してしまい、散り散りなってしまいました。実は信孝が率いる軍勢は、信孝自身のもとからの軍勢だけでなく、織田軍団の中から寄せ集められた軍勢で構成されました。そのような事情のため、散り散りになってしまったのです。このような事態を受け、信孝と長秀は、このままでは光秀と戦うことはできないということで、摂津大坂城（大阪府大阪市）で態勢の立て直しを図ることにします。

次に畿内に比較的近い位置にいたのは、伊勢国南部と伊賀国三郡を治めていた北畠信雄です。信雄は信長の二男です。ちなみに、北畠信雄の後裔がここ柏原を治めた織田家につながることになります。信雄に信長・信忠父子が討たれたという報せが伝わると、惟住軍が近江国へ進軍する状況に、信長の妻子を居城の近江日野城（滋賀県日野町）に避難させ、惟住軍に不服従の姿勢を貫いた蒲生賢秀・賦秀（のち氏郷）の父子を救援すべく出陣します。しかし、その途中で自分の勢力下になって程ない伊賀国の「浪人衆」の抵抗にあい、足止めさせられてしまいます。

このように、本能寺の変直後の情勢としては、光秀に優勢な状況に進んでいました。

ところが、そのような状況のなか、天正10年（1582）6月5日に事件が起きます。織田信澄の殺害です。織田信澄は信長の甥で、近江国高島郡（滋賀県高島市）の統治を任せていた武将でした。信澄が殺害されたことは、この後の動きに大きな意味合いがありました。実は、信澄は光秀の娘婿であったことから、光秀と深い関係をもつ人物でもありました。こ

の頃、四国出兵に備えて大坂城にいたわけですが、大坂城に態勢の立て直しのために入った信孝・長秀の軍勢に信澄は光秀に応じるのを恐れられて殺害されてしまったのです。このとき、信澄は25歳、または28歳であったと伝えられています。そして、この後、信孝と長秀の軍勢が、大坂城近くの河内国における勢力を味方につけ、反惟住氏勢力として態勢を整えていくのです。

また摂津国では、織田家の重臣でありました池田恒興、さらには国衆の高山重友（高山右近）や中川清秀ら（以下、この勢力を「摂津衆」といわせていただきます）が、光秀に反抗の姿勢を見せます。恒興は信長の乳兄弟の武将であったことから、信長との関係が深く、当然のこととして光秀に反抗したわけです。高山重友、中川清秀も信長から多大な恩恵を受けていたため、池田恒興と同様の態度をとりました。また、もともと畿内周辺の地域で、この摂津国だけがこの時光秀の傘下にななく、信長の直接管轄地域としてありました。こうしたそれぞれの事情や地域の性格から、摂津衆は光秀に与しないという立場をとります。

このため畿内周辺地域の鎮静化を進めていた光秀にとって、摂津・河内の反勢力を平定することが急務としてありました。

一方、摂津衆、河内国の織田信孝らは、自分たちだけで光秀の勢力に立ち向かえる軍勢数を持っています。そこで、彼らは、各地の有力な織田家の諸将に救援を求めます。

この動きに、いち早く応じた軍将が、織田家の宿老であった羽柴秀吉でした。それでは、この頃の秀吉は、織田家のなかでどのような立場にあったのでしょうか。

秀吉は、天正5年（1577）10月から、中国地方の攻略を担当し、この頃、秀吉は織田家の中で、とても大きな勢力を持っていました。本能寺の変が起きた天正10年（1582）6月の時点では、近江国北部、かつての浅井氏の領国で現在の滋賀県長浜市域にあたる長浜領のほかに、播磨国（大部分、西側の赤穂・佐用両郡は備前宇喜多氏の従属に伴い割譲されていました）、但馬国、因幡国の3カ国を統治し、家臣からも「筑前守殿御分国」と呼ばれた、これらの領国を統治する織田権力下の大名＝「織田大名」がありました。さらに、備前宇喜多氏をはじめ備前国、美作国、伯耆国東部、瀬戸内海の従属国衆を政治的・軍事指揮的配下の与力に置いていました。その規模はおよそ5カ国ほどにおよび、この時、織田家のなかで、秀吉に対抗できる存在は、越前国を中心に

北陸地方に勢力を展開していた宿老の柴田勝家だけでも、秀吉は織田家のなかで一、二位を争う立場にあつたのです。

一方、光秀の「織田大名」としての領国は、近江国坂本領（滋賀県大津市）と、この丹波国です。つまり、一国と一郡という規模であります。さらに光秀と縁戚関係をもつ武将や与力軍将に目をやりますと、長岡藤孝・忠興父子が治める丹後国、筒井順慶を主将とした大和国、先程もふれた光秀娘婿・織田信澄の近江国大溝領、さらには山城国北部がその傘下の勢力圏にあげられます。それらを合わせると、光秀の勢力圏はおよそ4カ国ほどになります。しかしながら、この勢力圏にある諸将がまとまっているかといいますと、わからない状況にありました。なぜなら、信長・信忠父子が京都にいることを優先して本能寺の変を起こしてしまったため、自分に従ってくれるかどうかは、これからの対応次第という状況にあったからです。もっとも光秀自身は、事前に伝えておかなくても、これらの諸将が自分についてくれるであろうと考えていたようですが。このように、光秀と秀吉では、その勢力とまとまりに差がみられました。

それでは、秀吉が本能寺の変が起きた時、どうしていたかについてみてきましょう。

天正10年5～6月にかけて、秀吉は織田権力に敵対する安芸毛利氏勢力と戦っていました。そして、本能寺の変が起きた頃は、備中高松城（岡山県岡山市）に「水攻め」を実施しており、高松城は落城間近の状況にありました。高松城が攻略されてしまうと織田権力の勢いがさらに伸張してしまう事態に、毛利家では当主の輝元をはじめ一門の吉川元春や小早川隆景らが高松城の救援にやってくることになります。このような毛利勢との対陣に、秀吉は信長に援護を求め、信長も秀吉の求めに応じて光秀らの軍勢を率いて中国地方に出陣することになっていました。

ここで、本能寺の変が起きたとき、秀吉は信長の到着を待つ状況にあり、信長と連絡を密に取り合っていたということを確認してほしいと思います。つまり、秀吉は信長の動きに関する情報が入りやすい状況にあったということです。そのため、本能寺の変で信長が討たれたという情報が、秀吉に早く入ることになったのです。本能寺の変の報せは、翌日の6月3日の深夜に秀吉のもとに伝わったといわれています。これだけ早く情報を得ることができたところに、秀吉が他の織田家の軍将と比べて有利な状況にありました。一方、他の軍将、北陸戦線の柴田勝

家には6月6日、関東にいた滝川一益には6月9日に情報が入っている状況です。秀吉にいち早く変の報せが入ったのは、秀吉が作為をして状況を作りだしたわけではなく、信長が救援に秀吉のところへ出陣してくるという状況が既に進んでおり、信長と秀吉との間の連絡網が整備されていたためです。つまり、本能寺の変に関するいわゆる「秀吉黒幕説」は成立し得ません。

さて、その後、秀吉は毛利氏勢力との有利な戦況のなかにありましたが、情報が入ったその日のうちに動きだします。翌6月4日、毛利氏と誓紙を交わし和睦を整えてしまいます。そして進軍を開始し、6月5日、秀吉は備前国沼（岡山県岡山市）に到着します。秀吉が沼に到着したこの日、秀吉は、「信長様・信忠様は何とか変を乗り切り生きている」という嘘の情報を流し、「秀吉が助けに行くので安心せよ」と書状を遺わして、摂津衆の中川清秀をつなぎとめています。

そのうえで6月6日、秀吉は、この頃の居城としていました播磨姫路城（兵庫県姫路市）に到着します。備前国沼から播磨国姫路までは78kmぐらいあります。一日で78kmというと早い進軍だと思いますが、全軍が進軍し終えたわけではなく、秀吉と一部の将兵のみが姫路に到着しました。その後、秀吉は姫路城で情報収集をおこないながら、遅れてくる全軍の姫路到着を待ちます。その間、2～3日を要しています。このため、軍勢全体の進軍としては、決して特別に早いものではありません。そして態勢が整った6月9日、秀吉は播磨国明石（兵庫県明石市）に向かいます。畿内に近い明石への到着後、秀吉は各地の諸将と連絡を密にしていきます。

ここまででは、順調に秀吉の進軍は進んできていますが、ここで、秀吉にとって時間を要してしまいそうな事態が起きます。それは、淡路国において、反織田氏勢力としてあった菅達長が蜂起し洲本城（兵庫県洲本市）を攻略してしまったからです。淡路国は、前年の天正9年（1581）11月に池田恒興の嫡男であった池田元助と秀吉によって制圧されていました。しかし、本能寺の変によって動搖している間に、反織田氏勢力の菅達長が立ち上がり淡路国を奪い返してしまったのです。

歴史に「もし」はありませんが、この淡路国の反織田勢力を押さえ込むのに時間が必要ことになってしまっていたら、その後の動きに大きく影響していたでしょう。秀吉は、菅達長の蜂起に対して、自分は明石にとどまり、部隊を振り分け、制圧のための部隊を淡路に派遣しました。そして、この派遣さ

れた部隊が、わずか一日で淡路国を制圧しました。この淡路国制圧に要した日数がわずか一日であったことが、進軍を続ける羽柴軍を勢いづかせることになりました。これがうまくいっていなければ、その後の羽柴軍の進軍はうまく順調にいったかどうかわかりません。わずか一日で淡路国を制圧できたことで、羽柴軍はこの後の進軍を順調に進めていくことができたのです。

その後、6月10日には兵庫、6月11日には予定通り尼崎に到着、そして6月12日には池田恒興、高山重友、中川清秀ら摂津衆と合流します。この間の移動距離は、決して早いものではありません。この間の移動距離はおよそ40kmぐらいです。現在の私たちにとって40kmはたいへんな距離ですが、当時の人にとっての40kmはたいした距離ではありません。羽柴軍の行軍のスピードについて、沼から姫路までの78kmを除くと、決して画期的なものではありません。さらに沼から姫路までの78kmも、先ほどもお話しした通り、姫路で2~3日、休憩をとり態勢を整えるのに努めていたことを考えると、特別なことではなく普通の移動だったと考えます。秀吉のこの畿内への帰還は、「中国大返し」として知られていますが、そのインパクトは距離にあるのではなく、先ほどからお話ししていますように、わずか数日で帰還してきた日数にこそあったのです。この事態は、羽柴軍がこんなに順調に戻って来ることを予期しておらず、まだ充分な備えもしていなかった惟任氏勢力に大きな衝撃を与えることになりました。

3 山崎合戦への過程とその勝敗

この間、光秀は近江安土城にいました。その安土城に朝廷からの使者、勅使を迎えることになります。勅使に対して、光秀は、畿内周辺を安泰にすることを約束します。この勅使となった人物は、京都吉田神社の神官で吉田兼見という人物です。この吉田兼見の日記（『兼見卿記』）には、兼見との雑談中に光秀が本能寺の変をなぜ起こしたかということを語ったと書かれています。ただし、その話の内容は具体的には書かれていません。つまり、なぜ本能寺の変を起こしたかを語ったと書いてはありますが、そのなぜについては具体的に書いていないということあります。そのため、本能寺の変をなぜ起こしたのか、いろいろな説が唱えられることになります。

光秀は、その後、6月8日、秀吉に対して抗戦の構えをとり京都に向かいます。光秀は京都に向かうにあたって、近江国の居城であった坂本城には後継者であります光慶を配置します。次いで、本能寺の

変のクーデターによって掌握した近江安土城には、二男の自然と娘婿の明智秀満を配置して、留守中の敵対勢力の反攻に備えたのです。

そのうえで、6月9日、光秀は京都に入ります。京都に入った光秀は、正親町天皇とその後継者の地位にあった誠仁親王に献上品を贈ります。さらに、光秀は京都の住人に対して、地子銭を免除するなどしました。そして、光秀は、摂津衆を討つため、鳥羽に向かっていくことになります。

しかしながら、この頃、羽柴軍の中国地方からの帰還状況が伝わり、惟任氏勢力内部にまとまりを欠く事態が相次いで起きていました。

まずは、そのような立場を見せ始めたのが、長岡藤孝・忠興父子です。NHK 大河ドラマ「麒麟がくる」でも放映されているとおり、長岡藤孝は光秀と深い関係を持っておりました。また、藤孝の嫡男・忠興には、芦田愛菜さんが演じる、光秀の三女・玉が嫁いでいました。このように長岡家は光秀と非常に親しい間柄にありました。ところが、6月3日の朝、長岡家に信長・信忠父子が討たれたという情報が入ると、藤孝・忠興父子は、光秀との関係よりも、信長から受けた恩恵を重視して、忠興の妻となっていた玉を幽閉し、藤孝は剃髪し光秀には与しない態度をハッキリと示しました。このことは、光秀にとって、予想外の出来事でした。光秀は、長岡家は自分と深い間柄にあり、自分についてくるものだと考えていたからです。そこで、光秀は説得に努めます。例えば、畿内を鎮静化した後には自分の後継者である光慶と娘婿である忠興に任せるとか、長岡家には摂津国か若狭国を任せるといった話を持ち出します。しかし、長岡家は家の存続を考えて情勢を判断し、光秀に味方することなく、あろうことか秀吉に近づいてしまいます。

次に筒井順慶です。順慶は、当時、織田権力のもとで大和国に率いる立場にあり、本能寺の変の直後、光秀に従い行動する立場をとっていました。ところが、羽柴軍が畿内に近づいてきたという状況のなかで、光秀のもとに遣わしていた軍勢を引き上げてしまいます。なぜ、このような行動をとったのかといいますと、いま起きつつある情勢に対して、家の存続を図るために今後どうあるべきかを考えたからのようです。これに対して、光秀は、順慶に対して味方するよう促すため、洞ヶ峠に出陣します。そして、この頃、惟任家で順慶の取次（交渉役）を務めていた藤田行政（大河ドラマ「麒麟がくる」では、「藤田伝吾」として活躍している武将です）を派遣して説得にあたらせます。しかし、刻々と動きつつ

ある情勢に対しての家の存続を考慮して、順慶は光秀になびきませんでした。

なお、この時順慶は洞ヶ峠に出向き、光秀につくのか秀吉につくのか、日和見的態度をとったといわれていますが、これは誤りです。洞ヶ峠にいたのは、順慶ではなく光秀であり、光秀はこの地に赴き順慶の説得にあたったのですが、順慶がなびかなかったというのが実のところの話です。

このように、長岡藤孝・忠興父子や筒井順慶が光秀に従わないという状況となり、惟任勢力はまとまりを欠いてしまうことになりました。

そのような状況のなか、光秀は摂津国、さらには河内国の平定に向かおうとします。ところが、羽柴軍が6月10日には兵庫（兵庫県神戸市）、翌11日には尼崎（同尼崎市）に着陣します。この事態に、光秀は摂津衆らを討つことを後回しにせざるを得なくなります。そこで、光秀は、当時の日本の首都であった京都の防衛を優先して、山城国淀城（京都府伏見区）の普請にあたります。そのうえで山城勝龍寺城（同長岡京市）に入り、秀吉の軍勢と対峙していきます。

一方、摂津衆と合流した秀吉は、6月12日、勢いを得て、山城国山崎、現在の京都府大山崎町ですが、ここに陣をはることになります。山崎の地は、山城国以東に展開する惟任氏勢力と秀吉らの反惟任氏勢力との政治的・軍事的境界＝「境目」に位置していました。山崎の地が惟任氏勢力と反勢力との戦場となつたのは偶然ではありません。戦国時代に起きた合戦は、互いの勢力が接しあう「境目」を舞台にして、「国郡境目相論」という領土戦争としての特徴をもつており、その勝敗はその後の勢力の盛衰にも影響しました。この山崎合戦も、そうした同時代の合戦の特徴である「国郡境目相論」という性格をもつ戦争であったわけです。

戦闘は6月12日から開始され、秀吉は下級兵士の足軽を光秀が籠もる勝龍寺城に向かわせ、鉄砲隊で攻撃させました。これをきっかけに、翌6月13日、いよいよ戦闘が本格的に始まることになります。そ



して同日、信長の三男である信孝と惟住長秀の軍勢が秀吉らの軍勢に合流します。

ここで、押さえておいてほしいことが一つあります。「山崎合戦」といいますと、一般に光秀と秀吉の戦争と捉えがちですが、実は、光秀と織田信孝を総大将とした織田軍との戦争で、秀吉は織田軍に属する主力勢力でした。したがって、山崎合戦とは、その性格は本能寺の変から引き続く織田権力内部の政争から至った、光秀の率いる惟任軍と信孝・秀吉らの織田軍との今後をめぐる勢力争いの戦争であったのです。

惟任側の軍勢は1万人ほどで、斎藤利三は数で勝る織田軍との対陣は不利だと判断し反対したのですが、光秀はそれを振り切って対戦にでます。そして斎藤利三の軍勢を先陣に織田軍と対陣します。

一方、織田軍の軍勢は、『太閤記』では4万人と書いてありますが、当時の史料では2万余だったとみられます。惟任軍と対陣した織田軍の陣営は、高山重友、中川清秀を先陣に、織田信孝、惟住長秀、そして羽柴秀吉といった配置がありました。

午後4時、鉄砲戦により、山崎合戦が始まります。その結果、惟任軍は奮戦しましたが、結局、敗れてしまします。惟任軍が敗れた理由は軍勢の数だけではありません。実は、この合戦で中川清秀や高山重友の摂津衆の奮闘があったからです。彼らにとってみると、ここで負けるとなると、その後の自分たちの家の将来がどうなってしまうかわからないという状況であったため奮闘したわけです。この摂津衆が奮闘した結果、織田軍の勝利に決しました。戦後に記された秀吉の書状によると、この戦いの結果、首3000余を討ち取り、淀川に流れた死体は数え切れなかったと記されています。

山崎合戦に敗れた光秀は、勝龍寺城に戻ります。しかし、その勝龍寺城も織田軍に包囲される状況となり、迎え撃てないと判断した光秀は、夜中に城を抜け出して、自身の居城であります近江坂本城に向かいます。ところが、その向かう途中、光秀は、山科・醍醐（京都市山科・伏見区）にて、織田軍の勝利に応じた周辺の村人の「一揆」（集団による武装行為）による、いわゆる落ち武者狩りにあって殺されてしまします。皆さん、村人といいますと竹槍を突いて光秀を刺したというイメージが強いと思いますが、この頃の民衆というのは、自分たちの地域を守るために、弓や槍などといった武器を所持していました。村人は、そのような武器を携えて光秀を討ち取ったのです。討ち取られたときの光秀の年齢については、江戸時代初頭に編纂された『当代記』では67歳、江

戸時代中期の『明智軍記』では55歳とみえます。いずれにせよ、信長より年上であったことだけは間違いないありません。この後、光秀の首は隠されていたのですが、村人によって掘り起こされてしまいます。そして、首は胴体とともに本能寺の跡地に晒されることになります。また、光秀の重臣であった、斎藤利三は近江国堅田（滋賀県大津市）で捕まり、京都六条河原で斬首されます。

こうして光秀を打ち破った織田軍は、その後京都へ進軍し、その一方で丹波国の惟任家の居城であった亀山城（京都府亀岡市）の攻略に高山重友、中川清秀らの軍勢が派遣されることになります。そして6月14日、その攻撃を受け、亀山城は落城します。

一方、信孝・秀吉らが率いる織田軍の本隊は、京都に入った後、光秀の居城であった近江坂本城に向かいます。このとき、坂本城には光秀の後継者であった光慶と光秀の二男である自然、宿老の明智秀満らがいました。前にもお話ししたように、自然と秀満は近江安土城にいたのですが、安土城では織田軍を迎撃つことができないと判断し安土城を焼いたうえで坂本城に入りました。なお発掘調査の結果によりますと、このとき安土城は全部が焼け落ちたではなく、炎上したのは五層七階の「天主」を含む主郭部分だけであったそうです。恐らく秀吉の御伽衆であった大村由己が著した『惟任退治記』がいうように、自然・秀満の軍勢が安土城を退く際に燃やしたのではないでしょうか。光慶・自然の兄弟と秀満らの軍勢が近江坂本城に集まり、織田方の軍勢を迎撃ちますが、結局織田軍の攻撃に適わず、秀満は光慶、自然という2人の息子を殺したうえ、腹を切り坂本城に火を放ちます。こうして惟任家は滅亡することになります。

惟任家を討った織田軍は、この後、惟任方に与した美濃国の勢力を鎮めたうえで、尾張清須城（愛知県清須市）に向かうことになります。なぜ、清須城に向かったかといいますと、そこには信長・信忠を失ったいま、唯一の家督相続者の立場にある信長嫡系の孫である三法師（のちの織田秀信）がいて、三法師のもとで織田権力を運営していくことを考えたからです。

こうして本能寺の変から引き続いた織田権力内部の政争は、ここに惟任勢力の討滅をもって一端幕を閉じることになったのです。

おわりに

今回の講座は、山崎合戦とはどのようなものであったのかという話をしました。内容をまとめますと、この合戦は、本能寺の変後、主導権をめぐる勢力争いであったといえるのではないかでしょうか。しかし、光秀にしろ、それに対抗する織田方の勢力にしろ、この時点ではまだしっかりしたビジョンを構築していたわけでもなく、戦われたのが山崎合戦だったのではないでしょうか。つまり、この合戦の勝敗が信長・信忠父子を失った後の方向性を築いていくことに繋がっていたのではないかでしょうか。

この戦いに勝利した織田軍は、天正10年（1582）6月27日、今後の織田権力における運営のあり方を決める「清須会議」を開催します。会議の結果、信長嫡系の孫である三法師を擁立し、織田権力を再動していくことになりました。

しかし、三法師は、まだこの時数えで3歳です。したがって、三法師は天下人としてまだ政治運営を担える存在ではありません。そのため織田権力はまとまりを欠き、そのなかで信雄・信孝兄弟や羽柴秀吉・柴田勝家ら宿老間で起きた対立はやがて翌天正11年（1583）4月に賤ヶ岳合戦という内戦に至ります。そして織田権力は中央権力としての実体を喪失させてしまっています。その「結果」として、織田家宿老の一人だった羽柴秀吉が台頭し、やがて織田家に代わる天下人へと歩み始め、信長の死によって中断していた「天下」=日本の中央のもとに諸勢力の国内統合を目指した「天下一統」に向けて活動していくことになるのです。このあたりのことは、拙著『シリーズ実像に迫る 17 清須会議—秀吉天下取りへの調略戦』（戎光祥出版、2018年）、また拙編著『図説

豊臣秀吉』（戎光祥出版、2020年）に詳細は記していますので、そちらを参照いただいたら幸いです。

最後に改めて確認しておきたいことは、本能寺の変後、すぐに秀吉が天下人へと歩んでいったではなく、その後の主導権をめぐる争いを経て、織田権力の再興が進められたが政争・内戦により実体を失っていた「結果」、秀吉が織田家に代わる天下人として「天下一統」に向けて活動していくこと、歴史の流れです。私たちはその歴史の結末を知っていますので、それを前提に歴史上の出来事をみてしまいますが、歴史は一つ一つを押さえたうえでその展開をその時代の視点からみていくことが必要であるということを、最後に述べさせていただきます。

以上大変拙い話でしたが、これで終わります。ご静聴ありがとうございました。

[第5回 柴 裕之氏 資料]

山崎合戦と惟任(明智)光秀—本能寺の変後の主導権をめぐる動向—

柴 裕之

はじめに

- ・天正10年(1582)6月2日の本能寺の変
…織田家重臣の惟任(明智)光秀の率いる軍勢が天下人で主君の織田信長を討つというクーデター。日本史上において、いまなお私たちに关心を持たせる出来事である。
 - ・それは、時代の「革命児」信長を討つという出来事として捉えられ、その像のもとに、その後の展開は描かれ、やがて重臣の羽柴秀吉が天下人へ台頭する過程としてあつかわれてきた。
 - ・しかしながら、近年は同時代のなかで人物や出来事をとらえていく傾向にある。そのなかで本能寺の変後の動向も、秀吉の天下人への台頭という歴史観を前提にせず、その過程を追う検討が進んできている【柴：2018】。
 - ・本講座では、そうした近年の研究成果をふまえて、本能寺の変後から山崎合戦とその後までの動向をみる。
- *なお、本講座では明智光秀を「惟任光秀」、丹羽長秀を「惟住長秀」、細川藤孝を「長岡藤孝」と、当時の名字で記載する。

1、「本能寺の変」の実態

- ・天正10年(1582)6月2日の本能寺の変=惟任光秀による権力中枢の打破と拠点掌握。
…京都本能寺に滞在していた天下人織田信長、その後に二条御所に迎撃に備えた信長の嫡男で織田家当主の信忠をはじめ権力中枢の人物が討滅。
→この後、光秀は京都の鎮静化を遂げたうえで近江国の制圧にあたり、6月5日に織田権力の政庁にあった安土城(滋賀県近江八幡市)へ入城を遂げる。
- ・このクーデターの主要因は、情勢の展開によって生じた織田権力内部の政争における惟任家の事態打開にあつたが、その決起は急遽信長・信忠父子ら権力中枢の人物が京都に偶然にも会したという状況があつてなされた【柴：2020 b】。
→偶発的な機会を見逃さず活かしたクーデターであったが、それゆえの突飛性から早急な事後対応が求められている。特に、有力な対抗勢力への備えの構築が必要となり、そのための長岡藤孝・忠興父子や筒井順慶ら与力軍将に事後了承のうえ協力を求める一方、呼応勢力の取り纏めと備後国鞆(広島県福山市)の室町幕府將軍足利義昭に本格的な接触、安芸毛利・越後上杉両家ら反織田勢力との連携を模索し始める。
- ・実際に近江・美濃両国では、凋落からの復権を試みる京極高次や伊賀道足(安藤守就)、また若狭国でも、旧守護家の武田元明ら応じる勢力もみられた。
- ・しかし、その一方で、近江瀬田城(滋賀県大津市)の城主・山岡家は安土城に向かうにあたり渡橋すべき交通の要衝にあつた瀬田橋を焼き払い、光秀はその修繕に日数を要してしまう。→安土城掌握までに3日間のロスが発生、この日数の影響はその後に尾を引く。

2、畿内の織田勢力の対応と羽柴秀吉の帰還—惟任勢力への反抗—

①本能寺の変時の畿内周辺における織田方諸将の動向

織田信孝・惟住長秀の対応

- ・四国出兵を目の前にしていた織田信孝(信長の三男)を総大将に惟住長秀ら軍将からなる軍勢は、本能寺の変時、和泉国堺(大阪府堺市)周辺にあつた。
- ・信長・信忠父子の討滅の急報が入ると、信孝自身はすぐに惟任軍の討伐に向かおうとしたが、率いる軍勢は動搖し分散したといわれる(1582年11月5日付けイエズス会宣教師ルイス・フロイス報告書〔『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第3期第6巻所収〕)。
→惟住長秀とともに摂津大坂城(大阪府大阪市)で態勢の立て直しを図る。

北畠信雄の対応

- ・北畠信雄(信長の二男、伊勢北畠家当主)は、居城の伊勢松ヶ島城(三重県松坂市)で信長・信忠父子の討滅を知り、信長の妻子を居城の近江日野城(滋賀県日野町)に避難させた後、惟任軍に服従を迫られていた蒲生家(賢秀・賦秀〔のちの氏郷〕父子)救援に出陣する。ところが、平定して間もない伊賀国で「牢人衆」の蜂起に遭い、対応に追われる。

⇒信長・信忠討滅直後の段階では、近江・美濃両国を中心に呼応勢力がみられた惟任方が優位な情勢に進んでいた。

織田信澄の殺害

- ・ところが光秀が安土城掌握を果たした6月5日、摂津大坂城に入城した、信孝と惟住長秀は、同城の千貫櫓にいた織田家御一門衆の織田信澄を殺害する(『多聞院日記』ほか)。
- ・信澄は、信長の弟信成(初名は信勝、一般には「信行」で知られる)の子で、近江大溝城(滋賀県高島市)の城主として近江国高島郡を支配した。妻は光秀の娘で、畿内軍事司令官にあつた光秀が努めていた中央周縁の守衛の一翼を担つた。このため、光秀に応じるのを恐れて討たれた。享年は25、または28と伝わる(『寛政重修諸家譜』)。
→そして、信孝・長秀は河内国(河内守)の諸将を味方に付け、惟任勢力との対決に備えていく。

摂津衆の不服従

- ・摂津国では、織田家重臣の池田恒興、そして同国國衆の高山重友・中川清秀ら(以下、この集団を「摂津衆」と表記する)が、光秀からの従軍要請を拒絶した。
- ・恒興は、信長とは乳兄弟(母が信長の乳母)にあり、また高山重友・中川清秀のいずれも信長の恩恵が深い存在だ

った。そもそも、摂津国はこの時は信長の直接管轄下にあり、彼らは光秀と関係の深い与力軍将の立場にあったわけではない【中西：2019】。そのうえで、これまでにおける信長との個々の関係から、彼らは光秀に与しなかったのだろう。

⇒このため畿内近国の鎮静化を急ぐ光秀にとって、摂津・河内両国の反惟任勢力の平定が急務となる。この事態に、摂津衆ら反惟任勢力は、援護を各地の織田諸軍将に求める。このなかでいち早く対応を示した軍将こそが、中国地方での安芸毛利勢力との対陣を切り上げ、畿内へ帰還していった、宿老の羽柴秀吉だったのである。

②羽柴秀吉の帰還「中国大返し」のインパクト

織田権力下における羽柴秀吉の立場【柴編：2020】

- ・天正5年(1577)10月から中国地方方面を担当する軍将。
- ・この時には、江北浅井家の領国を継承した近江国長浜領(滋賀県長浜市旧市域とその周辺)のほかに、播磨(備前宇喜多氏の従属に際して割譲された赤穂・佐用両郡は除く)、但馬、因幡の各國からなる「筑前守殿御分国」を統治する「織田大名」。
- ・そのうえ、備前・美作各國(宇喜多氏ほか)と伯耆国東部、瀬戸内海の従属国衆を政治的・軍事指揮的配下の与力に置く。

→その勢力圏は、およそ6ヶ国におよび織田家中において一・二位を争う存在。

*惟任光秀の勢力圏

- ・「織田大名」としての領国は、近江国坂本領(滋賀県大津市)と丹波国。
- ・与力軍将は丹後国(長岡家・一色家)、大和国(筒井家)、近江国大構領(滋賀県高島市、織田信澄)、山城国(大方は北部)

→その勢力圏は、およそ4ヶ国、ただし与力軍将が光秀に応じるかは事後承諾へ

彼らの対応次第。光秀はどうやら応じるものと考えていたようだ。

本能寺の変時の秀吉

- ・天正10年(1582)5月には、毛利勢との「境目」(政治的・軍事的境界)の要城で、毛利方の城将・清水宗治が守る備中高松城(岡山県岡山市)を包囲し、「水攻め」を実施。5月末から6月頭にかけて、ほぼ連続の降雨により、高松城は水没寸前にあった【盛本：2016】。
- ・高松城を救援するために、当主の毛利輝元ほか一門の吉川元春や小早川隆景も出陣。この毛利軍との対陣に対し、秀吉は信長に援勢を求め、信長は数日後に毛利勢との決戦に出馬する予定。本来、光秀の軍勢も、この出馬に応じて向かう手はずとなっていた。

→秀吉は、水没寸前に追い込まれた備中高松城とそれに関わる毛利方への優勢な戦況のもとに、信長の到着を待つという状況にあった。

「中国大返し」の実態

- ・秀吉のもとへ、光秀による信長・信忠父子の討滅を伝える急報が届いたのは、天正10年(1582)6月3日の深夜とされる(『惟任退治記』)。この急報を受け、秀吉は「おとろき入」ったと、のちにその時のことと書状に記している(「金井文書」「秀吉」512)。
- ・秀吉が信長・信忠父子の討滅の急報を得ることができたのは、信長出馬に備え、畿内の情報網を張り巡らしていたことによるのだろう。つまり、信長本隊の出陣が予定されたことが、いち早く秀吉に信長・信忠父子の討滅を伝えることになったのである。
- ・秀吉は優勢な状況をふまえ、急ぎ毛利家との和睦締結の交渉に動きだした。この交渉結果、翌6月4日に毛利家と誓紙を交わし和睦を締結させた秀吉は、清水宗治らの切腹を見届けて高松城の包囲を解除し、6月5日には光秀を討つべく進軍を始めた。
- ・同日中に備前国沼(岡山県岡山市)に至った秀吉は、その途次に中川清秀に信長・信忠父子は惟任軍の攻勢を切り抜け、近江国膳所(滋賀県大津市)に無事遁れたと偽りの情報を伝え繋ぎ止めている(「梅林寺文書」「秀吉」424)。翌6月6日には、大雨のなか約78キロメートルの距離を進軍し、居城の播磨姫路城(兵庫県姫路市)に入った(「松井家譜」)。
- ・その後、姫路城にて休息して情報収集・分析をおこなった後、6月9日には姫路を発ち、明石(兵庫県明石市)へと向い、明石に着いた秀吉は織田信孝と連絡を取り、明後日には摂津国尼崎(同尼崎市)に向かうことを伝えている(「坂井正秋藏文書」「秀吉」427)。
- ・そこに、菅達長が淡路洲本城(兵庫県洲本市)を攻略したことが伝わった。淡路国は、前年の天正9年11月に、池田元助(恒興の嫡男)と秀吉の軍勢に制圧されていたが(『信長公記』)、本能寺の変による混乱情勢のなかで、菅達長が反旗を示したのである。

→この事態は、対処を滞らせば、秀吉の帰還はここで時間を費やされる状況にあった。

- ・これに対し、秀吉は淡路国に軍勢を派遣し、翌6月10日、菅達長を洲本城から追い再制圧を果たしたうえ、明石海峡を押さえる要の岩屋城(兵庫県淡路市)の防備を固めた。

→1日で淡路再制圧を果たせたことが、羽柴軍を勢いづけさせた。

- ・羽柴軍は進軍し、6月10日の夜中には摂津国兵庫(兵庫神戸市)に至った(「荻野由之氏所蔵文書」「秀吉」431)。そして6月11日、秀吉の軍勢は予定通り尼崎(兵庫県尼崎市)に到着、翌6月12日には、池田恒興・中川清秀・高山重友の摂津衆と合流を遂げた。
- ・その備中國高松から畿内への秀吉勢の進軍は、既に盛本昌広氏が指摘するように、当時の移動距離としては決して早いものではない=「四〇km歩くのを異常なスピード」というのは現代人の感覚でしかなく、現在のように交通機関が発達する前は普通のことであったとされる【盛本：2016】。
- ・けれども、のちに「中国大返し」といわれる、この羽柴軍の帰還達成が、まとまりをかき充分な備えを構築できていなかった惟任勢力に動搖を与え、惟任軍との対戦に優勢な状況をもたらすことに繋がっていった。

⇒そのインパクトは距離ではなく、帰還を遂げることができた日数にこそあった。

3、山崎合戦への過程とその勝敗

①山崎合戦前の惟任勢力

光秀の摂津出陣

- ・光秀が事後対応を進めるなか、誠仁親王(正親町天皇の後継者)は勅使を近江安土城の光秀のもとへ遣わした。勅使に選ばれたのは、光秀と親懇な公家で京都吉田神社の神官であった吉田兼見だった。
- ・天正10年(1582)6月7日、兼見は安土城を訪れ、光秀に面し勅使として誠仁親王から言付かった京都の治政に安泰を取り計らうべき旨を伝えた。光秀は、この勅旨を承る一方、兼見との雑談に「今度謀反之存分」(なぜ本能寺の変を起こしたのか)を語ったが、残念ながら兼見の日記には記述はみられない(『兼見卿記』別本)。
- ・その後、光秀は6月8日、服従しない摂津衆を討つべく上洛の途に着いた(『兼見卿記』)。
- ・上洛にあたり、光秀は近江安土城に二男の自然と娘婿で宿老の明智秀満を配置した(『安養寺文書』『丹羽』参考48)。また居城の坂本城には、1582年11月5日付けのルイス・フロイス報告書から、「明智の一子」が在城していたことが確認され、これは光秀の嫡男・光慶だろうと推察される。つまり、光秀は上洛にあたり、息子2人をそれぞれ坂本城と安土城に配し、上洛・出陣中の敵対勢力の反攻に備えたのだった。
- ・翌6月9日、光秀は上洛し、吉田兼見の邸宅に入った。その後、正親町天皇・誠仁親王へ銀500枚、五山諸寺と大徳寺へ銀100枚を献上(『兼見卿記』)、また京都市中の住人に、地子銭(土地税)を免除したとされる(『京都町屋旧事記』)。そして光秀は、兼見の邸宅で夕飯を食した後、下鳥羽(京都市伏見区)方面へ出陣した(『兼見卿記』)。

長岡藤孝・忠興父子と筒井順慶の不従姿勢

- ・一方、この頃には羽柴軍の中国地方からの帰還状況が伝わり、光秀の協働要請に応じない姿勢を示した存在もみられはじめた。その代表的な存在が、長岡藤孝・忠興父子と筒井順慶である。彼らは、いずれも光秀の与力軍将にある。
- ・長岡家とは、藤孝と古くからの親懇の間柄にあり、三女の玉が藤孝の嫡男・忠興に嫁いでいるという、昵懃の関係にあった。ところが6月3日の朝に、信長・信忠父子討滅の報を受けた藤孝・忠興父子は、信長への厚恩を重んじたうえ、長岡家の存立と行く末(将来)を見据えて剃髪し、玉を離縁し幽閉するなど、惟任家とは距離をとる(『綿考輯録』)。
- ・光秀はこれまでの昵懃の関係から長岡家は応じるものと考えていたため、藤孝・忠興父子の姿勢に腹立ちしたが、再度摂津国または若狭国を与えるとの約束と、50~100日の内に畿内周辺を鎮静化したら、嫡男の光慶や忠興に運営を委ねたいと将来構想を語り、説得にあたる(『細川家文書』『明智』121)。
→だが、藤孝・忠興父子は説得に応じることなく、秀吉へ近づいていってしまう。
- ・一方、筒井順慶は本能寺の変直後、光秀の要請に従い兵を派遣していた。ところが6月9日になると、光秀に命じられていた河内方面への出陣を取り止め、翌6月10日には光秀のもとへ遣わしていた兵を引き上げさせてしまった。
- ・この背景には、やはり秀吉は順慶の畿内への帰還があり、それに応じた順慶の判断があった。実際、6月11日に順慶は秀吉は誓紙を遣わしている(『多聞院日記』)。
- ・これに対して、光秀は洞ヶ峠に着陣し(『蓮成院記録』)、6月10日には順慶へ担当取次の藤田行政を遣わし説得にあらせた(『多聞院日記』)。一般に洞ヶ峠に順慶が着陣し日和見の姿勢を取ったと知られるが、金松誠氏が明らかにした通り、洞ヶ峠に着陣したのは光秀である【金松:2019】。
- ・だが順慶は、光秀の説得に応じることなく、秀吉へ接近していった。順慶が、光秀に不従姿勢を示し秀吉へ接近していったのも、長岡藤孝・忠興父子と同様に筒井家の存立と行く末(将来)を考慮したことであろう。
- ・このように長岡藤孝・忠興父子、筒井順慶という光秀が頼りとした、いずれもの与力軍将が、家の存立と行く末(将来)のもとに、本能寺の変後における情勢対応のなかで、光秀に不服従の態度を示していく。光秀は、このようなまとまりをかいた惟任勢力の内部状況を抱えながら、畿内へ帰還してきた秀吉や織田方諸勢力との対立を向かえる。

②山崎合戦の展開

- ・6月10日、惟任光秀は摂津・河内方面の反抗勢力を討つべく向かった。ところが、この日、摂津国尼崎には、羽柴秀吉の軍勢が到着した。
- ・この事態に、翌6月11日に光秀は下鳥羽へ帰陣し、京都防衛に備えて、山城淀城(京都市伏見区)を普請して防備を固めた(『兼見卿記』)。その後、山城勝龍寺城(京都府長岡京市)に入り、山崎(同大山崎町)に陣した秀吉らの軍勢と対峙した。
- ・一方、6月12日に摂津衆の軍勢と合流した秀吉の軍勢は、山城国山崎に進軍し、陣を張った。山崎の地は、山城国以東に展開する惟任勢力と織田勢力との「境目」に位置した。つまり、戦国時代の合戦の特徴であった「国郡境目相論」の性格ももつ【盛本:2016】。
- ・「国郡境目相論」とは、勢力間の政治的・軍事的境界にあたる「境目」の確保をめぐりおこなわれた領土戦争で、その勝敗はその後の勢力の盛衰に影響した。山崎の地は、まさに惟任・羽柴ら織田両勢力の「境目」に位置し、同地が戦場になったのは偶然ではなかった。
- ・着陣した秀吉は、早速足軽を派遣して、勝竜寺城近辺で惟任軍を鉄砲で攻撃した(『兼見卿記』)。そして翌6月13日には、織田信孝・惟任長秀の軍勢が、淀川を越えて、秀吉らの軍勢に合流した。ここに、信孝を総大将とした織田軍が結集を遂げた。その軍勢 数は、『太閤記』によれば、4万人におよんだとされるが過大で、実際は『兼見卿記』が記す2万人ほどで、秀吉の率いる軍勢数がその多くを占めたのは間違いない。
- ・けれども注意したいのは、織田軍の総大将は信孝であったことである【盛本:2016】。つまり、山崎合戦とは、天下人信長の座をめぐる光秀軍と秀吉軍の戦争であったのではない。その性格は、本能寺の変から引き続く織田権力内部の政争から至った、光秀の率いる惟任軍と信孝・秀吉らの織田軍との今後をめぐる勢力争いの戦争だったのだ。それが、山崎の地で「国郡境目相論」として起きようとしていたのであった。
- ・いま惟任・織田両軍が対峙する状況のなかで、1万人ほどの軍勢であった惟任軍は、6月13日、山城勝龍寺城を出て、織田軍への攻撃にでた。この直前の軍議で、宿老の斎藤利三は近江坂本城に退却し迎え撃つよう進言したが、光秀は斥ける(『太閤記』)。

- ・山崎の地に着した惟任軍は、『太閤記』によると、先手に斎藤利三ら、その加勢に阿閉貞征・小川祐忠ら近江衆、山手備えには松田太郎左衛門尉や明智(並河)掃部助ら丹波衆、右備えには旧幕府衆の伊勢貞興・諏訪飛騨守・御牧三左衛門尉の軍勢が配置された。
 - ・一方、織田軍の陣備えは、摂津衆の高山重友・中川清秀、堀秀政の軍勢を先備えに、池田恒興と信孝・惟住長秀の軍勢、秀吉の軍勢が展開した(「金井文書」『秀吉』512ほか)。
 - ・そして惟任・織田両軍は、午後4時(申刻)頃から鉄砲戦がおこなわれ、惟任側の攻撃に大山崎に陣していた高山勢が応戦し、山崎合戦は始まった(『兼見卿記』、1582年11月5日付のルイス・フロイス報告書)。この高山勢との戦闘に中川清秀の軍勢も加わり、惟任軍では伊勢貞興、諏訪飛騨守、御牧三左衛門尉が戦死したとされる(『太閤記』)。
 - ・光秀は味方の軍勢の奮戦を鼓舞したが、数で優る織田軍の攻撃を前に敗れ去った。この直後の秀吉の書状によれば、惟任勢の首3000余を討ち取り、淀・桂川に流れた死体の数は数知れないとみえる(「大坂城天守閣所蔵文書」『秀吉』444)。
- ③光秀の敗死と惟任家の滅亡
- ・戦いの勝利後、織田軍は勝龍寺城に退却した光秀の軍勢を追い、同城を包囲する。光秀は、夜中に同城を抜け出し、再起を図るべく居城の近江坂本城へ向かった。
 - ・だが、その途次に山科・醍醐(京都市山科・伏見区)にて、光秀は織田軍の勝利に応じた同地の村人の「一揆」(集団による武装行為)によっての落人狩りで殺害された(『兼見卿記』ほか)。享年は、諸説あるが、近世初頭に編纂された『当代記』によれば67。
 - ・光秀の首は、溝に隠されていたが、村人によって拾われ、信孝のもとに届けられた。そして、首は胴体とともに焼失した本能寺の跡地に曝された(『兼見卿記』)。また斎藤利三は、近江国堅田(滋賀県大津市)に逃れたところを捕縛され、6月17日に京都市中を車で引き回しにされたうえ、六条河原にて斬首された(『言経卿記』)。
 - ・勝利した織田軍は山城国南部の惟任勢力を制圧しつつ、京都へ向かった。丹波國へ遣わされた高山重友・中川清秀らの軍勢は、6月14日に同国内の惟任家居城の亀山城(京都府亀岡市)を落城させている(『豊後岡中川家譜』)。
 - ・信孝・秀吉らの織田軍本隊は、近江国へ向かい、坂本城を攻撃した。この時、坂本城には光秀の嫡男・光慶のほか、安土城を退いた光秀二男の自然と宿老の明智秀満も籠もっていた。自然を擁した秀満は、山崎合戦の敗報を受け安土城から退去するにあたり、安土城に火を放ったと秀吉の御伽衆である大村由己が著した『惟任退治記』にはみえる。なお、この時に炎上したのは、発掘調査の成果によると、五層七階の「天主」を含む主郭部分に限られているとされる【松下:2014】。
 - ・その後、織田軍の攻撃に、6月15日に明智秀満は光秀の二子を刺殺のうえ、腹を切って坂本城に火を放ち、同城は落ち惟任家は滅亡した。光秀に味方した近江衆も平定され、奪われていた佐和山や長浜などの諸城も奪還された。
 - ・近江国を平定した織田軍は、引き続き美濃国へ軍を進め、同国の惟任勢力を鎮め、戦後処理と今後の織田権力の政治運営を決めるために、信長の嫡孫で家督相続者の立場にある三法師(のちの織田秀信)が退避していた尾張清須城(愛知県清須市)に向かった。
- ⇒こうして本能寺の変から引き続いた織田権力内部の政争は、ここに惟任勢力の討滅をもって一端幕を閉じることとなつたのである【柴:2020a】。

おわりに—山崎合戦の性格とその後—

- ・天正10年(1582)6月2日に起きた本能寺の変は、織田権力の置かれた情勢とそれに伴う内部の政争から起きた惟任光秀のクーデターであった。
- ・クーデターを成功させた光秀は、以後事態の鎮静化のうえ「天下静謐」(中央情勢の安泰と統治の正常化)に努めるべく事後対応に追われるが、このクーデターは信長・信忠父子が偶然にも京都に会したという機会をねらったという、突發的なところもあった。そのため、事態の進展のなかで、光秀は家の存立と行く末(「将来」)を重視し対応を図っていた与力軍将の長岡藤孝・忠興父子や筒井順慶から不従姿勢を示されてしまう。
- ・その一方、畿内の織田勢は、態勢の立て直しのうえ、光秀に反攻の姿勢を貫いていた。この事態に光秀は、討伐を進めるが、そこに予想外に織田勢力を救援すべく駆け付けてきたのが、安芸毛利家との戦争を切り上げ畿内へ帰還した羽柴秀吉だった。
- ・この結果、羽柴勢を主力に結集した、信長三男・織田信孝を総大将とする織田軍との対決を余儀なくされ、両勢力の「境目」にあつた山城国山崎の地で戦争に至る。これが山崎合戦で、その性格は本能寺の変後も引き続ぐ織田権力内部の政争から起きた戦争だった。なおかつ勢力の「境目」で争われたその戦争は、今後の主導権争いも関わる「国郡境目相論」としての性格ももつておこなわれた。したがって、この戦争は、あくまでも本能寺の変後の混乱における主導権争いであって、まだ信長・信忠討滅後の政局に充分なビジョンを築け得ていない中途で戦われたものであった。
- ・このため、この勝敗は信長・信忠父子を失った中央政局における勢力の保持・奪還と、これからの方針性の構築をめぐる性格をも併せ秘めていた。山崎合戦は、このような情勢に応じた複雑な性格を持ちながら、惟任・織田両軍の間で戦われたのである。
- ・この結果、敗れた惟任勢力はその勢いのもとに滅亡し、勝利した信孝・秀吉らは織田権力の再興に努めた。そのなかで、6月27日の清須会議によって信長が生前より織田家嫡流のみが家督を継承するという方針に従い、幼少の三法師(秀信)が擁立された。そして宿老衆の柴田勝家・羽柴秀吉・惟住長秀・池田恒興が三法師を支えながら合議のもとで、織田権力の政治運営にあたるということ(「織田体制」の展開)で進められる。
- ・だが、その後、信雄・信孝兄弟や羽柴秀吉・柴田勝家ら宿老間の対立を機にした内戦のなかで、織田権力は中央権力としての実体を喪失させていくことになる。この結果として、織田家宿老の一人だった羽柴秀吉が台頭し、やがて織田家に代わる天下人へと歩み始め、信長の死によって中断した「天下」=日本の中央に諸勢力の国内統合を目指した「天下一統」に向けて活動していくことになる【柴:2018、柴編:2020】。

主要参考文献

- 金松 誠『シリーズ実像に迫る 18 筒井順慶』（戎光祥出版、2019年）
柴 裕之『シリーズ実像に迫る 17 清須会議 秀吉天下取りへの調略戦』（戎光祥出版、2018年）
柴 裕之「山崎合戦の性格」（渡邊大門編『考証 明智光秀』、東京堂出版、2020年a）
柴 裕之『織田信長 戦国時代の「正義」を貫く』（平凡社、2020年b）
柴 裕之編著『図説 明智光秀』（戎光祥出版、2019年）
柴 裕之編著『シリーズ織豊大名の研究 8 明智光秀』（戎光祥出版、2019年）
柴 裕之編著『図説 豊臣秀吉』（戎光祥出版、2020年）
柴裕之監修・すずき孔『マンガで読む 信長武将列伝』（戎光祥出版、2019年）
中西裕樹『中世武士選書 41 戦国摂津の下剋上 高山右近と中川清秀』（戎光祥出版、2019年）
福島克彦『明智光秀と近江・丹波 分国支配から「本能寺の変」へ』（サンライズ出版）、2019年）
松下 浩「天下統一へ」（近江八幡市史編集委員会編『近江八幡の歴史』第六巻通史 I、2014年）
盛本昌広『本能寺の変 史実の再検証』（東京堂出版、2016年）

主要史料集 ※…以下は、史料引用に際しての略記載。

- 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』第1巻（吉川弘文館、2015年）…『秀吉』+文書番号
藤田達生・福島克彦編『明智光秀 史料で読む戦国史③』（八木書店、2015年）…『明智』+文書番号
功刀俊宏・柴裕之編『戦国史研究会史料集 4 丹羽長秀文書集』（戦国史研究会、2016年）…『丹羽』+文書番号
『史料纂集 兼見卿記』（続群書類從刊行会・八木書店刊）
『大日本古記録 言経卿記』（岩波書店刊）
『増補続史料大成 増補続史料大成 多聞院日記 附録 蓮成院記録』（臨川書店刊）

3 講師紹介

渡邊 大門 氏（株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役）

神奈川県生まれ。関西学院大学文学部卒業。佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。戦国時代の研究においては、特に赤松氏、山名氏、宇喜多氏を手がけるほか、戦国大名全般にも詳しい。著書に、『戦国期赤松氏の研究』（岩田書院）、『戦国期浦上氏・宇喜多氏と地域権力』（岩田書院）、『赤松氏五代』（ミネルヴァ書房）、『戦国・織豊期 赤松氏の権力構造』（岩田書院）、『論集 赤松氏・宇喜多氏の研究』（編著・歴史と文化の研究所）などがある。

山田 康弘 氏（小山工業高等専門学校 非常勤講師）

群馬県生まれ。学習院大学文学部史学科、同大学大学院人文科学研究科博士後期課程修了。博士（史学）。日本学術振興会特別研究員などを経て、現在、小山工業高等専門学校非常勤講師。著書に『ミネルヴァ日本評伝選 足利義輝・義昭一天下諸侯、御主に候』（ミネルヴァ書房、2019年）、『中世武士選書 足利義植—戦国に生きた不屈の大将軍』（戎光祥出版、2016年）などがある。

福島 克彦 氏（城郭談話会 会員）

兵庫県生まれ。立命館大学文学部卒業。専門は日本中世都市史、城郭史。丹波地域の戦国史および城と城下町を研究している。著書に『畿内・近国の戦国合戦（戦争の日本史11）』（吉川弘文館）、『近畿の名城を歩く 大阪・兵庫・和歌山編』『近畿の名城を歩く 滋賀・京都・奈良編』（編纂・吉川弘文館）、『明智光秀：史料で読む戦国史』（編纂・八木書店古書出版部）などがある。

金子 拓 氏（東京大学史料編纂所 准教授）

山形県生まれ。東北大学文学部卒業後、1995年同大学院博士課程後期修了。博士（文学、東北大学）。専門分野は日本中世史。東京大学史料編纂所准教授。史料編纂所では『大日本史料』第十篇（織田信長の時代）の編纂を担当。著書に『織田信長権力論』（吉川弘文館、2015年）、『織田信長〈天下人〉の実像』（講談社、2014年）、『信長家臣明智光秀』（平凡社、2019年）などがある。

柴 裕之 氏（東洋大学 非常勤講師等）

東京都生まれ。東洋大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。現在、東洋大学文学部非常勤講師。専門は、日本中近世移行期政治・社会史。著書に『徳川家康—境界の領主から天下人へ—』（平凡社、2017年）、『シリーズ実像に迫る 17 清須会議』（戎光祥出版、2018年）などがある。

編集後記

令和2年度の講座「丹波学」は、130名の定員を大幅に上回る183名の方々に受講いただき開講することができました。受講いただきました皆様には、心よりお礼を申し上げます。

本年度は、NHK大河ドラマ『麒麟がくる』の放映にあわせ、特別編として『明智光秀～光秀は何を見たか～』をテーマに、5名の先生をお迎えし、講座「丹波学」を開催しました。先生方には、最新の研究や多くの史料を用いて、大変わかりやすく興味深い講義をしていただきました。時には黒井城や福知山城など明智光秀に関連した現地へと足を運び、事前に情報収集をされたとお聞きし、大変感謝しております。おかげをもちまして、光秀の生涯を知ることで、光秀がどのように丹波を見ていたのか、また、その時代の権力者と丹波の人々がどうつながっていたのかなどを詳しく学ぶことができ、丹波の人々がその時代をどのように生きていたのかを知る機会となりました。この講座を通じて、丹波の誇れるものや受け継がるべきものについて考えていただけたなら、講座の目的に迫ることができたのではないかと思います。

講座「丹波学」は、多くの受講生の皆様、講師の先生方に支えられ、育てられて参りました。今後も、受講生の皆様にとって、さらにわかりやすく興味の持てる講座になりますよう企画して参りたいと考えています。本講座が皆様にとって、丹波の伝統文化を次代へ受け継ぐ原動力となりますとともに、地域の活性化につながる新たな展開の一助となれば大変嬉しく思います。

最後になりましたが、講師の先生方におかれましては、講義録の作成にあたり惜しみないご協力をいただきましたこと、心より感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

令和2年度講座「丹波学」講義録

令和3年3月発行

発行 (公財) 兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑 文化振興部

〒669-3309
丹波市柏原町柏原5600
TEL 0795-72-5170
